

7
6
77

環球漆器考
全

東泉
鍾

鍾

馬

鮮



堅筆集

明治二十二年六月十四日

綱堂題



琉球漆器考

FOREIGN

明治二十年福原少將元老院議官より轉じて沖繩縣知事の職を繼ぎ其五月赴任と數日を出てすして同月の下旬管下久米宮古八重山及與那國の諸島巡回せらる余隨行の一員に加はり一行中君と起居を共にせり而して談屢殖産工藝の事に及び遂に本縣有名の漆器に移れりといへとも素り旅中の事故啻に談柄に過ぎざりしか君の諮詢頗る細密且つ周到なりと余答ふる漆器の事業は元官設なりしか廢藩置縣後は一に民業に任放せり然れども該器製造に係る圖畫及仕様帳体のもの引繼書類中に在りて其數一個の長持に充滿す唯惜くは欠漏錯雜の勿論官設事業の組織等一も備ふざる是なり然はあれとも圖畫は往々見るべきものあり就中其仕様法の周到且つ入費と時日とを吝まざりしかは想像するに餘りありて今日復得かぬきものならん是れ偏に藩廳か舊幕府薩藩及清國等へ獻する爲に斯くは意を用ひあるに因るへ云々と君曰く是れ屈竟のものなるへ歸廳の後一閱すへいと約せられぬ此約は従ひ古ひに古ひある書籍を君の電覽に供せむに君は圖畫中の尤品を撰ふに付箋を以てせられたり因て更に余一閱之を寫生佐渡山安豐木脇啓四郎の兩名に命じて騰

寫せしむ是れ則ち此冊子乃成る所以なり圖書中往々法に適はざるものあれども務めて之を改竄せざるは先輩の勞を重んずれり又二百年前の古を追懷せは敢て深く咎むるに及はざるへき歟

君又更に余一命するに本業の沿革を詳記すへきを以てせらる然るは本業の起因たる史に載するなく邈として考究すへかざるか如く況んや余の如き薄學淺識をや君の命を滿たすその能はざるは明なる所なり然れども君の命を空ふするは本意にあらす由で聊か諸書に散見する所口碑に傳ふる所及卑見とを併記し以て之に酬んとす固より誤謬なき能はず並に探究の至らざる所は免かれざる所とす識者訂正の勞を吝まざるあらは幸甚

琉球の漆器は其製法一種なるの如くと雖ども其原内地より傳はりたるは疑ひなき何とあれば之が製造に要する第一の原料漆汁は古來吉野漆を用ひると今尙一般人口に膾炙し傳ふればなり然れども何の時代に始まりしを知るに由なきは太九遺憾なり貝摺奉行の創設も判然せされども護佐丸の一族勝連某の家譜に左の條あり蓋し同奉行の文字に顯はれたるは之を以て權輿とす

毛姓家譜曰萬曆四十年壬子閏十一月二十日

尙寧王時毛氏保榮茂親雲上盛良任貝摺奉行

昔管具摺主取二員繪師主取一員屬官六員
檢物師主取二員磨物師主取一員木地引勞

頭一員御櫛作主取一員三線打主取一員矢矯主取一員
至於近世別建引物奉行而分管焉即今又兼管了

按するに明の萬曆四十年は本朝の慶長十七年に當る則ち島津氏の琉球を征服せし後四年目なり抑も此役後沖繩に於て新事業の起りたるは甚た多き中にも木綿飛白陶器等を著るきものとす實に諸工業に新面目を與へたるの時期なるへし然れども右の割注に據れば當時貝摺奉行職こそなけれ該業に關する當職乃ありたるは明かなり只其何の時代に創設せしや否の明瞭あらざるを遺憾とするのみ然は則ち慶長十七年に至り漆器業の規模を擴張せしに過ぎすと知るへし又當縣廳に於て編纂せし舊記を見るに貝摺奉行は左の如し

貝摺奉行所

諸器髹漆ノ事ヲ管ス申口双紙庫理ノ所轄ナリ

一奉行一人職務右ヲ總裁ノ首里有祿無祿士族ヨリ勤功ヲ以テ進ム一年期

一筆者二人右ニ關セル出納會計帳簿ヲ掌ル無祿士族中ヨリ勤功ヲ以テ進ム一年

期是五等ノ心附役

一加勢筆者五人筆者ノ事務ヲ助力ス無祿ノ士族ヨリ勤ム年期ナシ勤星ヲ積テ心附役ニ充ル

一貝摺師主取二人職工人ノ指揮ヲ掌ル貝摺師ヨリ進ム五年期

一繪師主取一人職工人ノ指揮ヲ掌ル繪師中勤功ヲ以テ進ム五年期勤星ヲ積テ心附役ニ充ル

一繪師四人繪畫ヲ掌ル出願者中試験ヲ以テ進ム二年期以下同上

一下代二人小使ヲ勤ム各所オワバ公事拜ヨリ進ム年期ナシ

員摺奉行所	奉行	從四品	正七品	從七品	正八品	從八品	正九品	從九品	小
	役俸	壹名	繪師主取	壹名	繪師四名役俸	貝摺師主取二名役俸	三石	三石	下代
	五石	役俸	四石	加勢筆者四名飯米ナシ	貝摺師主取二名役俸	三石	三石	三石	二名
				全足筆者一名飯米七升五合					三石

是より沂りて漆器製造の起因を探らん我内地より傳はりて支那傳授にあらざること彌よ明かなるか如し中山世譜を見るに尙巴志王の部に

宣德二年本朝應永三十四年夏宣宗遣内官柴山齋勅至國賜王皮辨冠服如綵幣等物勅曰今

遣内官柴山前來賜爾皮辨冠服並齋銅錢收買生漆及各色磨刀石云々とあり是に依て考ふるに彼明朝の琉人を介して我漆液を買ふたるや明けし何とかれは此地古來漆樹なし今尙然り其要する所の漆液一に吉野を用れはなり又永亨文安の頃琉人の攝津の

兵庫に來りて貿易せし事諸書に散見するを得るを以て考ふる時は其以前既に漆液等賣買の途開けたるは疑を容れざる所なればなり又明朝か本朝の漆器を貴重と漆液を羨慕せしを知るに足るへきは本草綱目啓蒙に據て之を證すへし其漆の部に曰

く前略奥州羽州野州ヨリ出ルヲセシメ漆ト云力強ノ上品ナリ物ヲ續ニ用ユ日州ヨリ出ルハ小細工ニ用ユ和州芳野ヨリ出ルハ力弱シ朱漆ニ用ユ越前ヨリ出ルハ下品ナリ唐山ノ漆モ下品ニノ舶來ノ漆器甚ダ損シ易シ故ニ本邦ノ漆器ヲ賞スルヲ遵生八牋ニ見ヘタリ東西洋考ノ日本ノ條ニ一統志ヲ引テ曰以漆制器甚工綴両山墨談日泥金畫漆之法古亦無有宣德時遣漆工至倭國傳其法以歸とあり故に余は琉球の漆器其源は我内地の流に相違なしと断定せむと欲す今又那覇由來記として康熙四十八年本朝寶永六年に成りたる書本を見るよ左の條あり

輓轡始りの事

滿氏安里筑登之家譜曰安里掟者隅州國分郡の人曰鯨島六郎兵衛者也國分郡就合戰取乘于舟將至覺府時逢逆風漂至琉陽被召置于親見世既歷數年娶宮古島の女生一男故難離妻子終に居住于普門寺村崇元寺有御普請塗上漆勤焉この人後は若狹町村に移て輓轡を始と言傳へあり年代は知らず

是れ蓋し琉球漆器の元祖なるべしと信ずれども惜らくは今其正統詳ならず同族にして現今若狹町村に居住せる士族喜瀬某の家譜に記せる流書を見るに左の如し抑元祖を尋に日本國隅州國分の郡鯨島六郎兵衛と申奉りけるが往年國分の郡合戰有之鹿兒府へ御渡海の砌被逢逆風御當國へ御漂着折節宮古島の女渡合に付御娶男子御出生終に普文寺村と申所へ御居住にて引物漆塗物初て被仕出崇元寺御普請之時塗物師御勤滿氏安里掟被叙夫より若狹町村へ御引越木地引漆塗物御子孫共へ御相傳猶又世上にも手廣被相教永代御國家之御用被相立候段滿氏家譜に相見得記事にも其段御記被置候由然處五代目宮城掟親雲上御事木地引の業を以て百姓に被召貶系祖喜瀬筑登之親雲上御事は宮城掟親雲上曾孫にて候處道を先祖之家筋引起申

度願意よて醫道之御用被相勤其御功德を以て乾隆四十二年酉八月被奉認翌成年六月十五日新祿被成下終に譜代家迄頂戴被仕由誠以て子々孫々迄多幸無此上難有仕合奉存候基は系圖にも不相見得新祿願之書面に相見へ候迄にて若哉致傳失儀も難計候に付書流候畢

同治七年戊辰八月二十三日

眞實謹テ述

是よ由て考れば則ち彼隅州國分郡の住人鯨島六郎兵衛こそ琉球漆器の元祖にして慶長十七年貝摺奉行を設けたるを此鯨島の興業に胚胎せしや疑ふへからずと雖とも如何せん年代を記さざるは太た遺憾とす先つ試に崇元寺御普請の文字に就て考按を附せんに蓋し該寺建立の當時をらん歟果して然は中山世譜尙圓王の部より左の附記あり曰く

附 成化年間王命輔臣建寺名天王而爲家廟之備

弘治七年尙眞王建宗廟于圓覺寺故以天王寺爲王妃廟即今尙稷以下諸

妃神主皆奉于此寺節々致祭著爲典例

王又卜地於泊村東南之間創建中山國王廟而廟側建寺名崇元其

制與家廟大異每會冊封之時則諭祭之禮有行于此廟實非私廟之所較也故是廟

也自舜天而下惟卽位者必奉安此廟而春秋二仲以中華之禮祭之著爲定規

然は則ち明の成化年間には本朝の寛正長享年間に當り本邦の漆器の既に幾内其近國は盛域に達し四方該職の擴りたる時代なれば隅州の人にして之を琉球に傳ふ亦決して怪しむに足らざるへし降て世譜尙質王の部に曰く

康熙五年丙午本朝寛文六年春王遣正議大夫鄭思善使者毛榮清等赴京奉表入貢又于常貢外加進紅銅六百劬黑漆龍畫螺盤十個稱爲外貢而欽賞如例外貢例自此始

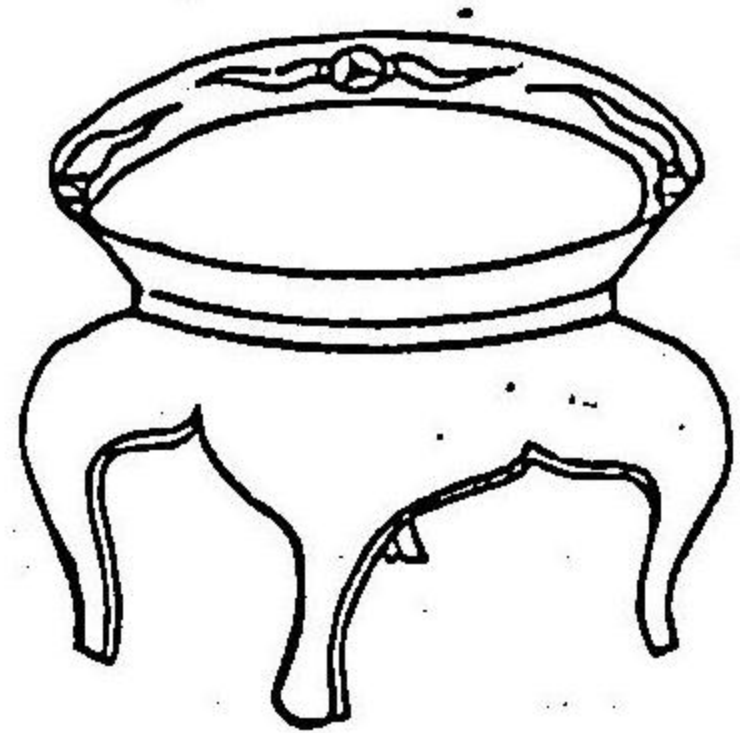
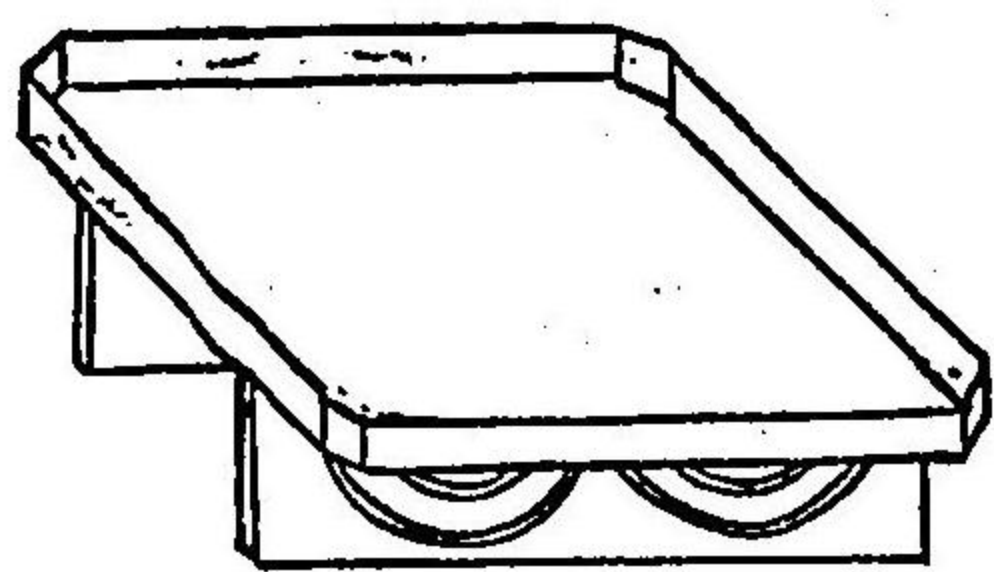
七年戊申春王遣耳目官吳文顯遣耳目官自此而始正議大夫王明佐等入京奉表貢方物時于外貢内減去黑漆龍畫盤十而黑漆絢螺茶鍾一百個 聖祖降勅獎諭後每入貢賜勅爲例及欽賞如例

と見ゆ按するに假令外貢なりと雖とも漆器を清朝に進めざるは明朝に通せし以來之を以て嚆矢とせん抑も貝摺奉行を創設せし以來既に五十餘年を経過せし末なれば百事整頓して美麗なる青貝摺其他の種類も出來し頃と知るべし此冊子の圖畫も總て康熙以後のものなり又徐葆莚の中山傳信錄を見るに器具中漆器を掲ぐ甚多る且つ特に其形容は琉球固有の如くに感觸を起ししものゝ如し然れども余より之を見る時と悉く幾内の形に法りたるのと言はさるへかす今其二三を掲ぐれば左の如し

器皿

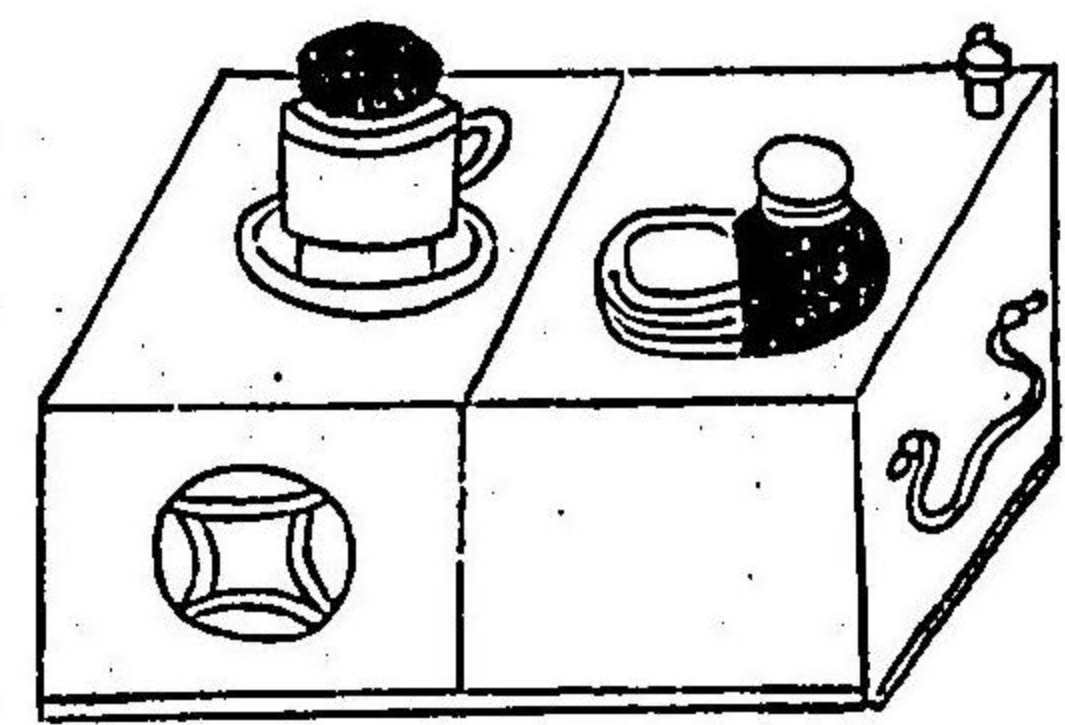
室中席地坐。無椅桌之用。飲食諸具皆低小以使用。其與中土異製者。圖之如左。

凡飲食置碗之具。如古俎豆。槃器或方或圓。皆著脚。高五六寸許。食羅數具於前。



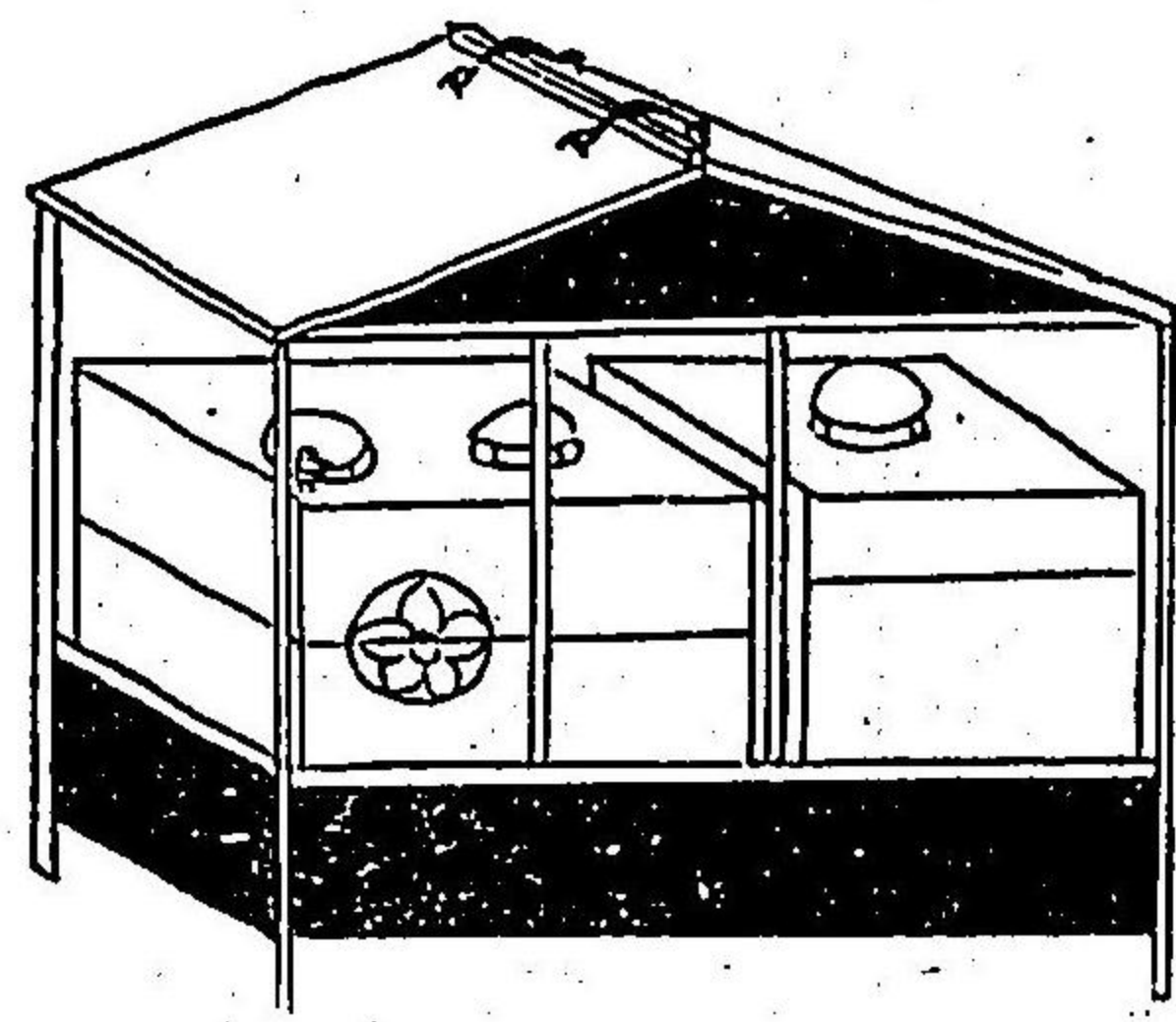
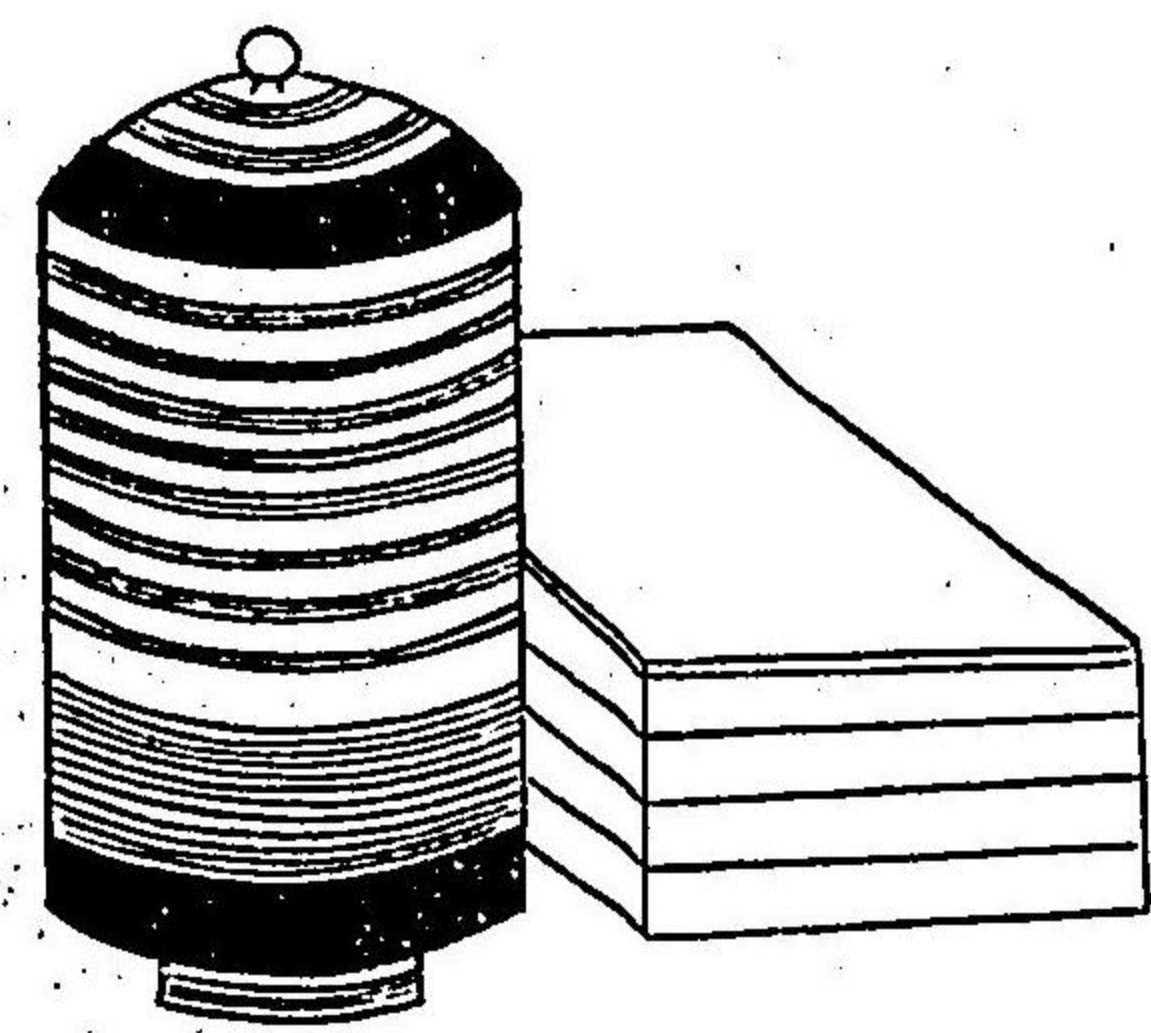
檯

士夫家有一檯。或朱或黑。滲金間采。製作甚精。郊飲各携一具。中四器置食物。旁置酒壺一盞。一筋二。諸具略備。民家食檯。或方或圓。皆作三四層。剝木爲之。



爐

水火爐。製用輕簡。銅面錫裏。一置火。一置水。外作一小木架盛之。下二層黑漆。奩三四事。中藏茗具。入茶擔中。國王令秀才二人值之。客出遊則携以隨。



又馬の部。曰

〔鞍〕制同中國。黑漆紅漆不同。有極精者。鞍前後加紅帕四條。分垂左右。以爲馬飾。

斯の如く事實に照し證左を舉ぐれば則ち其流儀の根原は誠に分明なるへし故に其根原論は茲に之を止め以て更に本業の沿革を述べんと欲すれども其材料に乏しく爲に之を詳にすること能はず因て聊か見聞と臆説とを述べ且つ元祿より享保年間に行われたる漆器製造に係る仕様式の一二を掲げ以て筆を擱んとす想ふに官設なる



貝摺奉行は格別盛衰なかるへしと雖とも人々家々之に従事せし時の最も盛大なり
 とは蓋て今を距る三十年前其前不詳迄なりとならん故に漆器は本國四大物産の一に位
 せしといふ則ち第一砂糖第二小祿布第三漆器第四泡盛是なり加之本縣製造品中稍
 や美術に近きものは漆器を措て他に之れあふさるなり他を官設事業によりて献
 品に意を用ひたるを製造上古式を破らざると一種の季候と職由せしならん抑も
 本縣諸職工の勞銀貴にあらす此器物たるや美術品日用品共に必要のものなれば將
 來最も之が挽回改良に向て望を囑すへきものとす然るに近年に至り大に聲價を落
 とし既に泡盛の臀に降りたるは社會の風潮によるへしといへとも抑も亦其間に粗製
 濫造の弊害を醸せしに歸せざるへからず利弊の害豈夫れ恐れざるへけんや今に
 て此弊を矯すんは當業者不測の困難に陥らん故に置縣後主として之を鞭達督勵せ
 られたるの功空しらす第二回勸業博覽會以降面目を改めたる者少しとせず願く
 は當業者尙左の様式を玩味し且つ見聞を博くし更に意匠を煅煉し以て別模範を案
 出するに至らば昔日の盛域を凌駕する豈難き事と爲さるらんや

明治二十一年一月下浣

石澤兵吾謹述



附言

現今行はれ居る所の漆器種類は概ね左の如し然れども各種の出所及新古は知る
 に由かち聊か参考として茲に掲ぬ唯堆朱に至りては現に首里に居住せる喜瀬乘
 隆の家譜を見るに其祖先乘昌正徳五年之を發明し各種の器物を製せしを以て當
 時其賞として其向より若干の賞品を賜りしと記せり

漆器塗色種類

- 一 青貝黒塗蠟取
- 一 朱塗黒塗堆朱
- 一 朱塗黒塗卷繪
- 一 柿色塗
- 一 梨地塗 朱塗黒塗々々上ケ中ナリ
- 一 箔覽塗 金付上ルモノナリ
- 一 木地蠟取
- 一 春景塗
- 一 朱塗青貝
- 一 朱塗黒塗沈金
- 一 青塗
- 一 棕梠色塗
- 一 叩キ塗
- 一 水粉塗 白地塗
- 一 うるみ塗 朱塗光色戻ルモノ上春
- 一 溜塗 春上景塗等

一景塗

御硯屏貳ツ眞塗青かい付入目

- 一和吉野漆三斤五拾匁
- 一和吉野漆三斤五拾匁
- 一晒抗永雲齋壹切長壹丈六尺布はゞ
- 一宮古赤島本上布壹切長四尺五寸布はゞ
- 一吉野紙貳百枚
- 一吉野紙貳百枚
- 一吉野紙貳百枚
- 一綿子拾匁
- 一はせを紙九拾五枚
- 一砥わり五斤
- 一菜種子油三合五勺
- 一六寸廻唐竹壹切長壹尺五寸
- 一ちたま木へら拾貳枚
- 一炭壹斗三升
- 一樫木切々七斤五拾匁
- 一鹿之角拾五匁
- 一手延かい四百七拾五枚

- 一麥之粉九合
- 一瓦地粉壹升五合
- 一古苧物三百貳拾匁
- 一明松灰すみ三合
- 一かいすり脇主取拾五人
- 一中かいすり師六拾壹人五分
- 一繪師八人
- 一同白のい四拾五枚
- 一煮かい百三拾枚
- 一餅米四合
- 一達摩墨三分
- 一檜白紙いた壹切長四寸壹分厚貳寸
- 一上のいすり師七百拾六人五分

御籠飯貳ツ下漆共眞塗青かい付入目

- 一和吉野漆壹斤百五拾匁
- 一和吉野漆壹斤百五拾匁
- 一晒抗永雲齋壹切長壹丈五尺布はゞ
- 一宮古赤島本上布壹切長四尺五寸布はゞ
- 一明松灰すみ四合五勺
- 一達摩墨三分
- 一はせを紙六拾枚
- 一吉野紙百四拾枚
- 一綿子拾匁
- 一古苧物貳百六拾匁

- 一炭壹斗貳升
- 一茶種子油三合五勺
- 一手延り三百九拾五枚
- 一同白かい三拾九枚
- 一煮り八拾七枚
- 一ろいすり脇主取拾人
- 一上かいすり師四百三拾人八分
- 一中かいすり師九拾貳人貳分
- 一繪師拾人

總合代錢三千百六拾八貫八百九拾三文

中央卓一脚蠟色ニ青貝付

- 一和吉野漆貳百六拾九匁三分
- 一同地漆八拾四匁六分

- 一瓦地粉壹升五合
- 一砥はり六百四拾匁
- 一麥ノ粉三合五勺
- 一餅米四合
- 一六寸廻唐竹空壹切長八寸
- 一樞木切五拾匁
- 一しらま木鉾拾枚
- 一鹿之角拾五匁
- 一百田紙五拾九枚

代錢百貳拾貫三百四拾六文
同四拾四貫五拾四文

- 一手延かい貳百四拾壹枚
- 一同耳かい拾枚
- 一同壹つ折かい拾貳枚
- 一手延ちりすりかい拾四匁
- 一煮かい貳拾七枚
- 一麥之粉壹合九匁五才
- 一瓦地粉壹升壹合
- 一明松灰すみ四合五勺
- 一古葎物百九匁
- 一晒銅雲齋長壹丈四尺貳寸五分布幅
- 一餅上白米壹合壹勺六才
- 一四寸廻唐竹五寸
- 一炭六斤壹合七勺
- 一はせを紙拾壹枚

同四百三拾三貫文
同拾六貫九百文
同貳拾貫貳百八拾文
同三拾壹貫貳百貳拾文
同拾六貫九百七拾文
同五百貳拾四文
同三貫三百文
同九百文
同壹貫三百六拾三文
同拾五貫五百七拾四文
同五百三文
同拾七文
同四百九拾四文
同三百九拾九文

一百田紙四拾七枚
 一吉野紙百七枚
 一紙はり一斤百貳拾匁
 一こしかみ拾七枚
 一はせを皮五拾五匁
 一茶種子油三夕五才
 一樫木切く三斤五合
 一鹿之角拾壹匁
 一白花さや長六寸布はゞ
 一中貝摺師拾五人三厘
 一したま木鉾五枚
 一綿子三匁九分
 一貝摺脇主取四分五厘
 一宮古白中布長三尺三寸貳分布幅

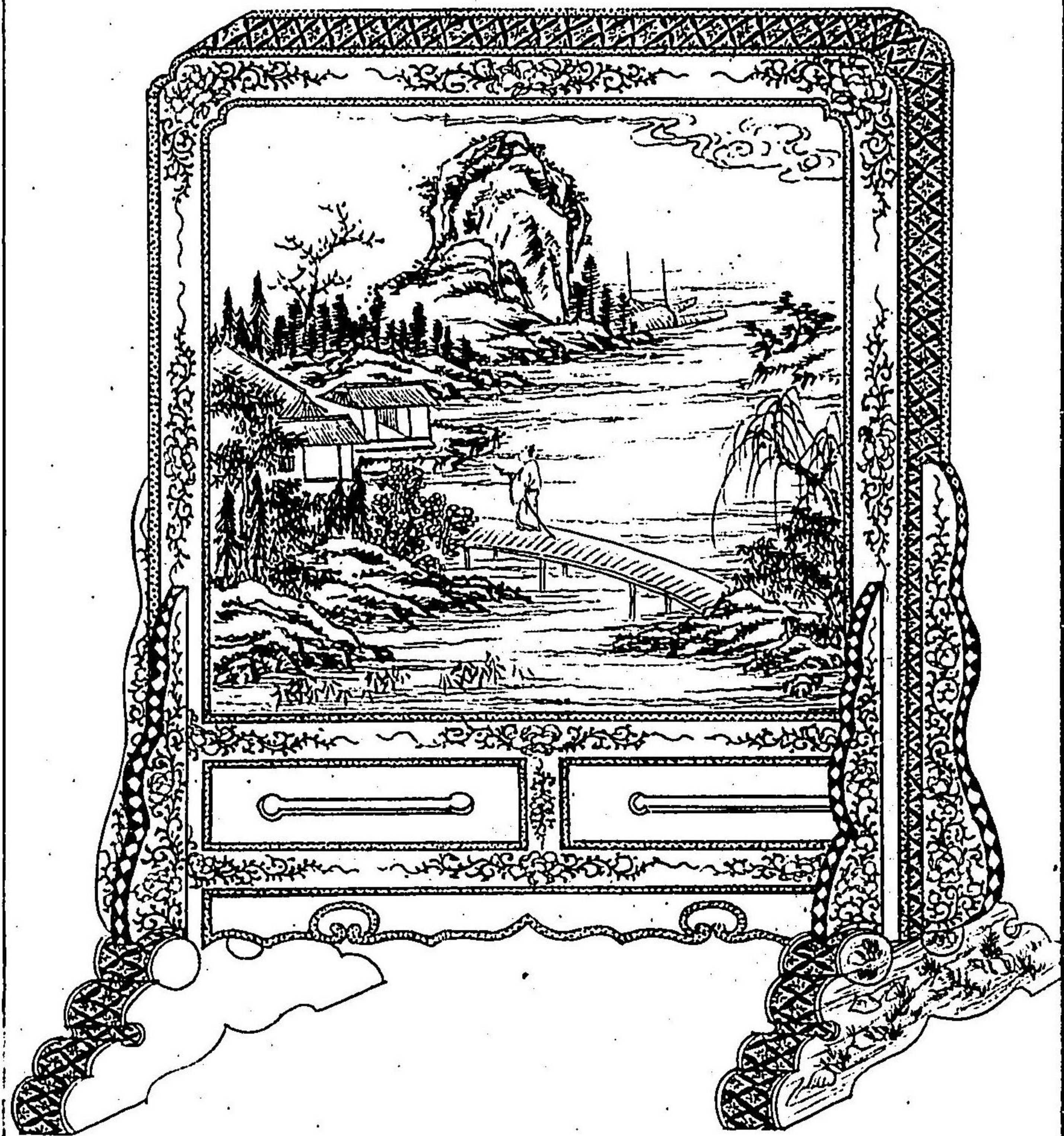
同壹貫七百九拾八文
 同貳貫百四拾六文
 同三百九拾四文
 無代
 同貳百七拾文
 同五百八拾六文
 同貳百八拾文
 同四百六文
 同貳貫三百貳拾文
 作料 米貳斗貳合九夕
 代錢 貳拾壹貫七百九拾四文
 同三貫百六拾七文
 作料 米六合九夕八才
 代錢 貳貫九百四文
 代錢 貳貫九百四文

一上日用六分七厘五毛
 一繪師一人七分六厘
 一御屋繪師八分八厘
 一達摩墨七厘
 一書筆壹本
 一上貝摺師八拾八人七分七厘
 合錢千三百六拾七貫百八文
 因に記す綿子とは眞綿樫木とは楨鉾は篋の事なり

價錢貳貫貳拾五文
 中賄 米八合八夕
 代錢 貳貫七拾七文
 作料 米一貫七合六夕
 代錢 貳貫四拾六文
 代錢 百三拾五文
 同六百四拾三文
 作料 米壹石三斗七升五合九夕
 代錢 百五拾貫九百九文

東泉
固香
銷臧

正德四年製
真金背貝現屏

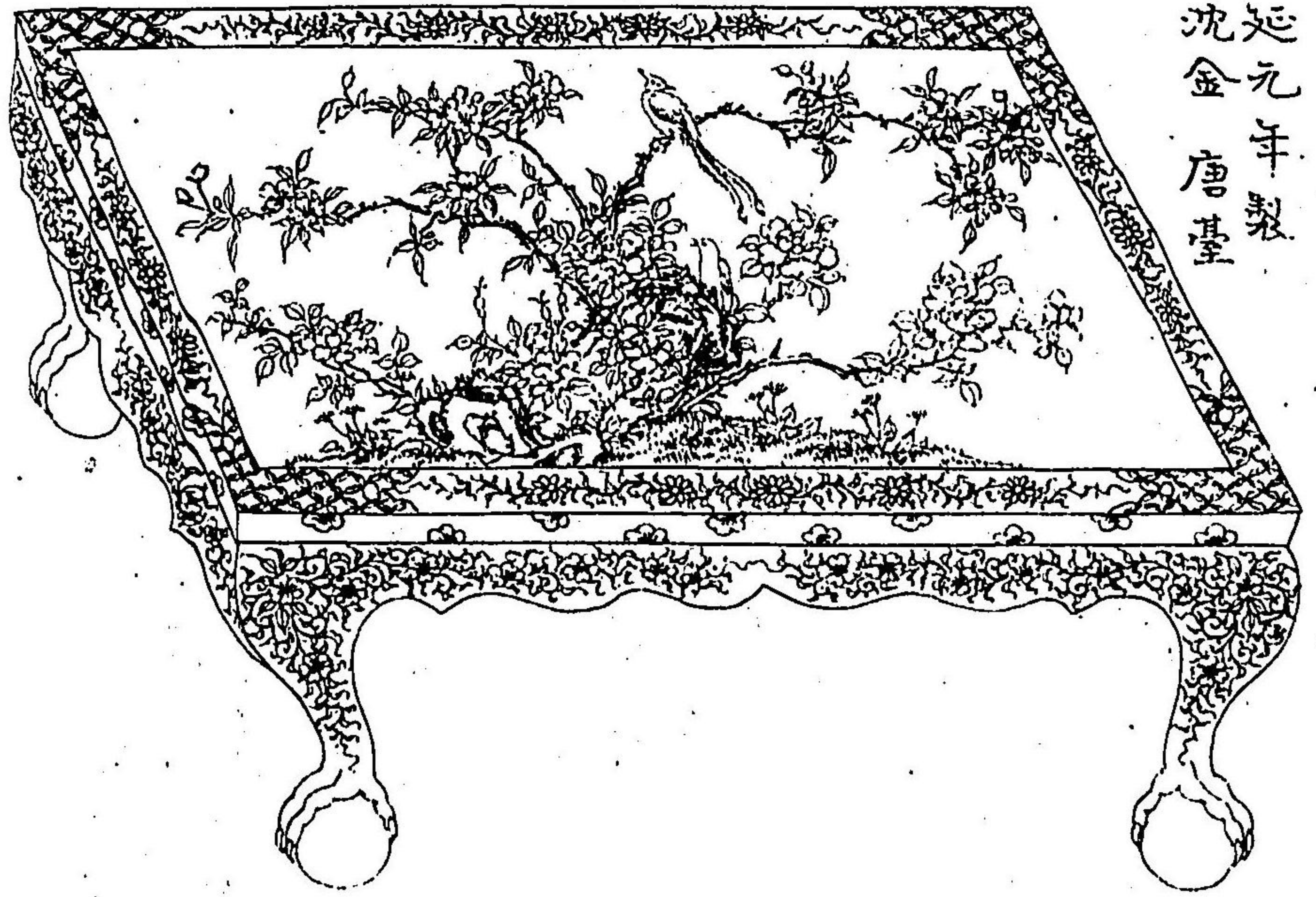




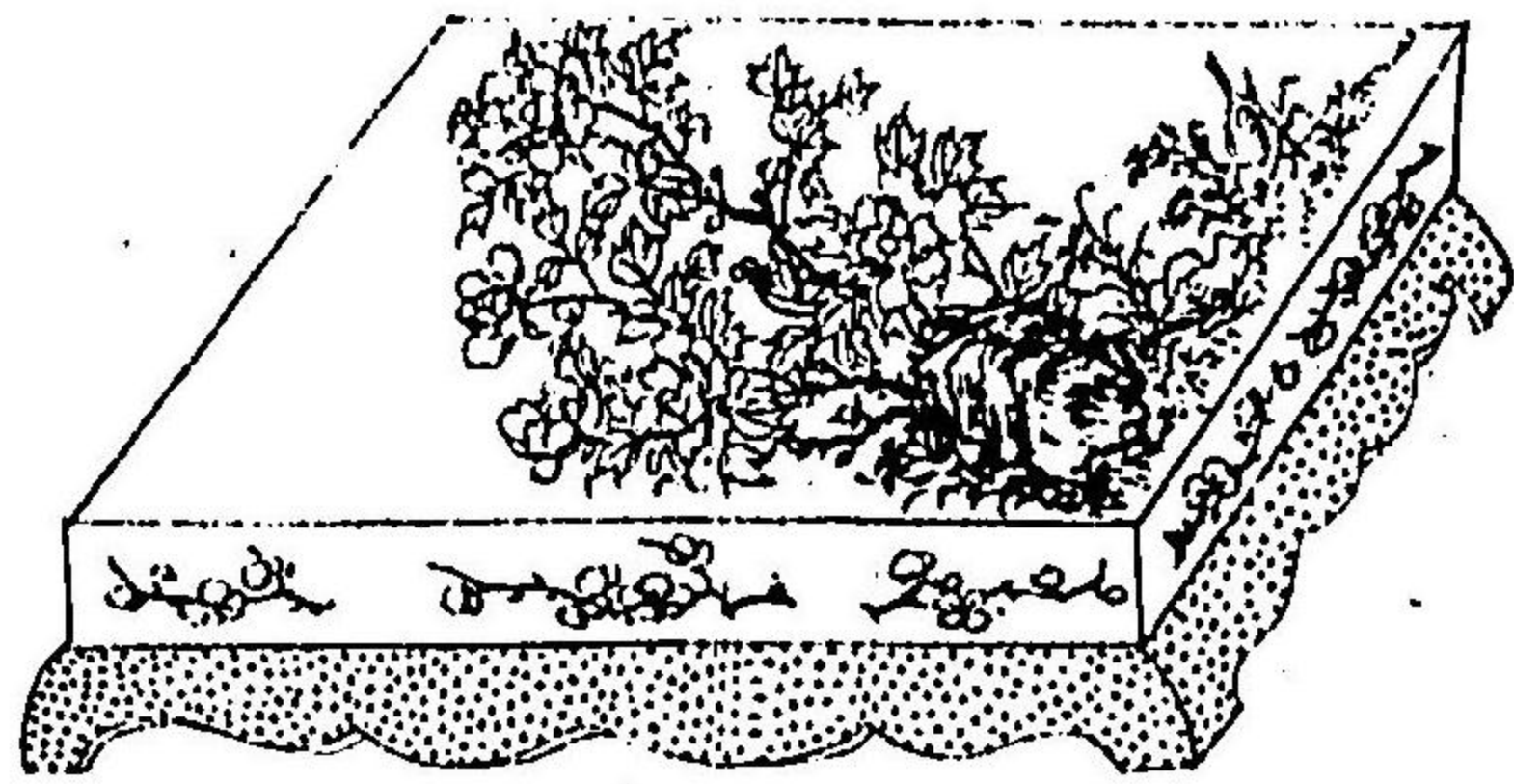
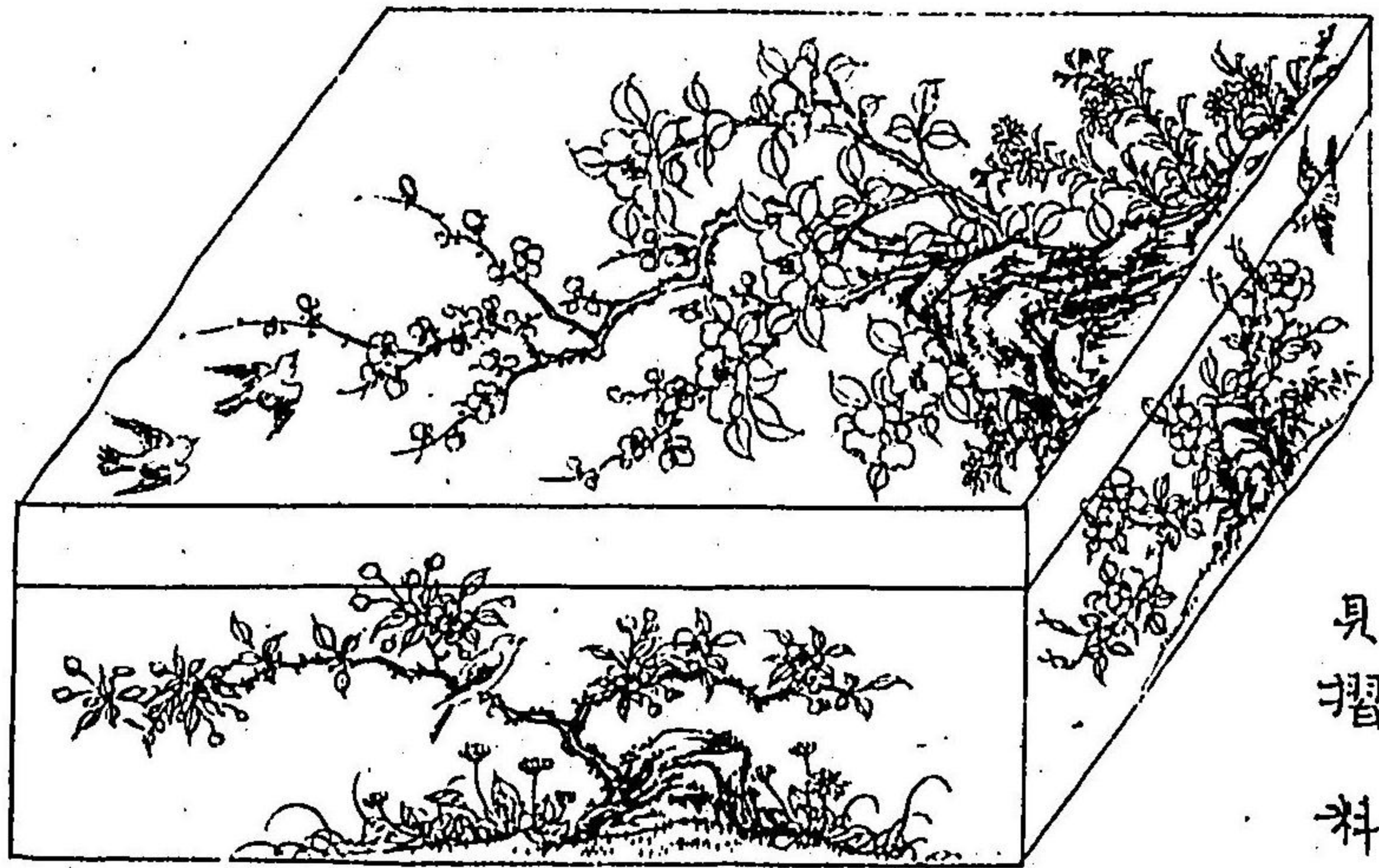
寬保二年製
貝摺



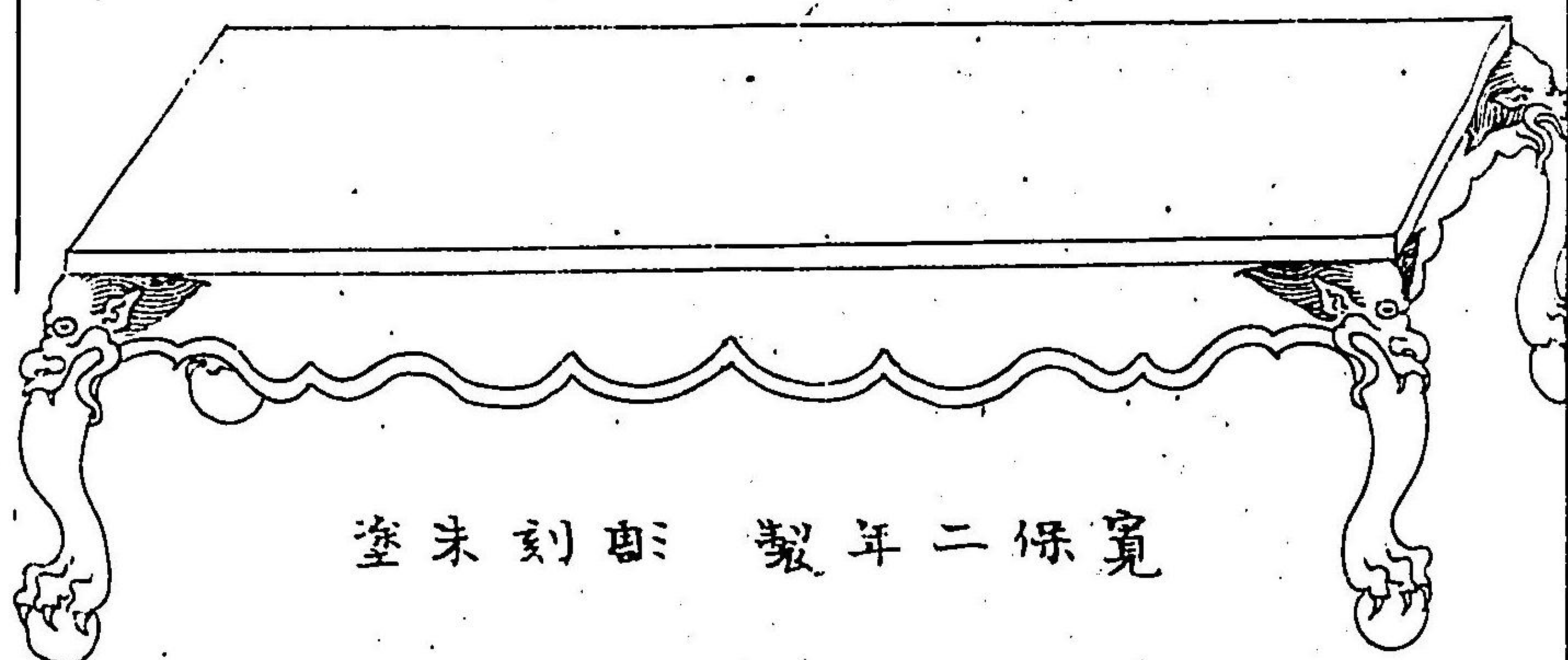
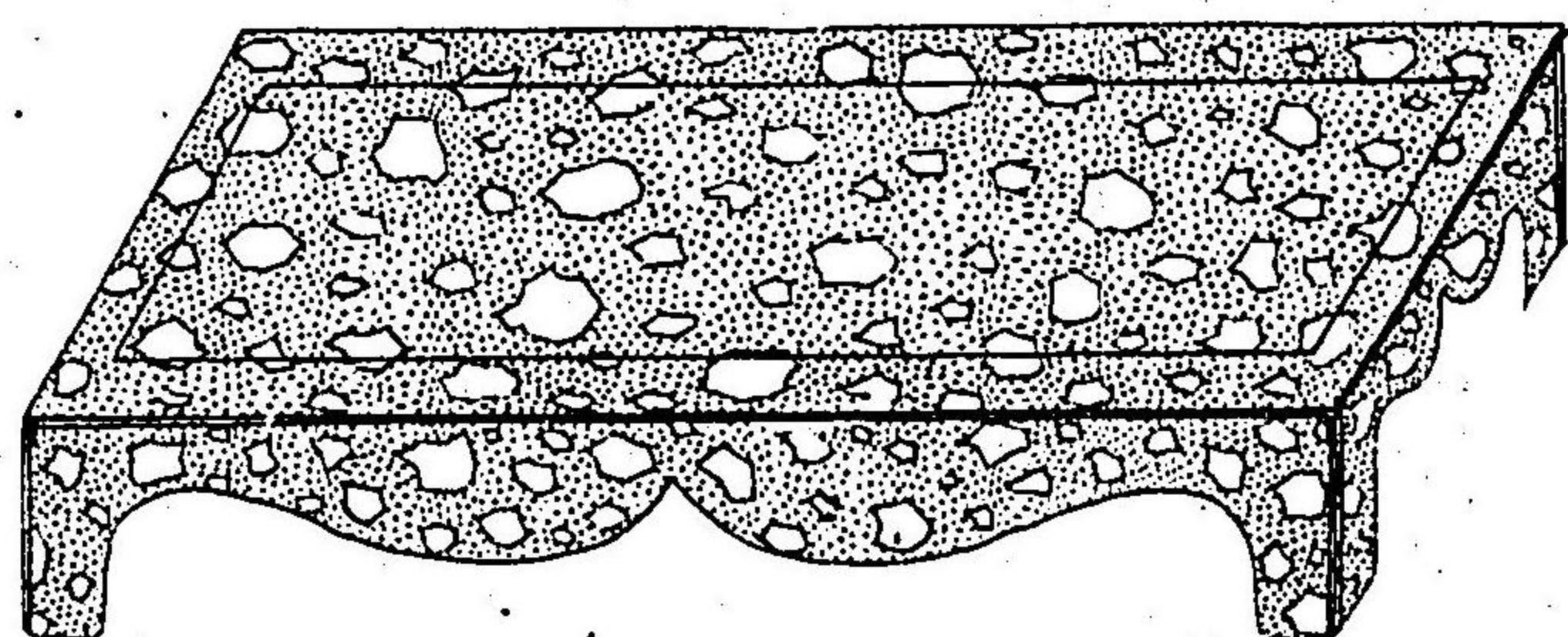
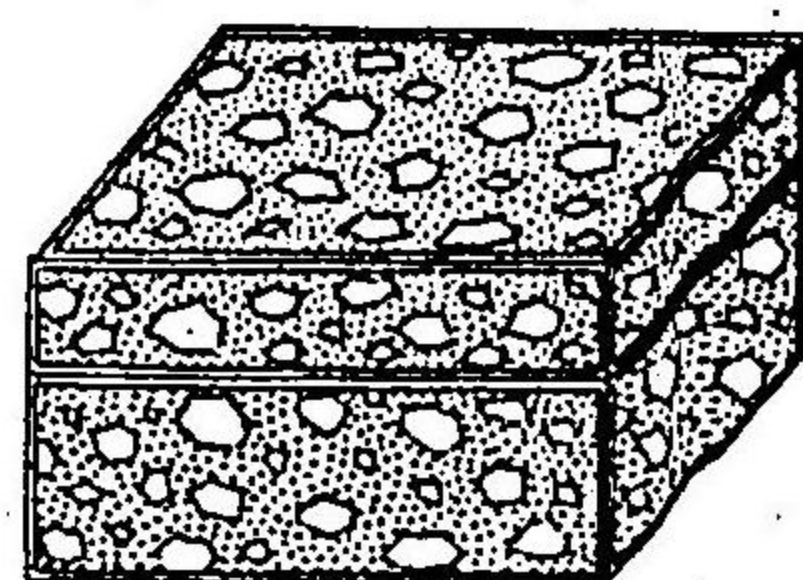
寬延元年製
黑沈金唐臺



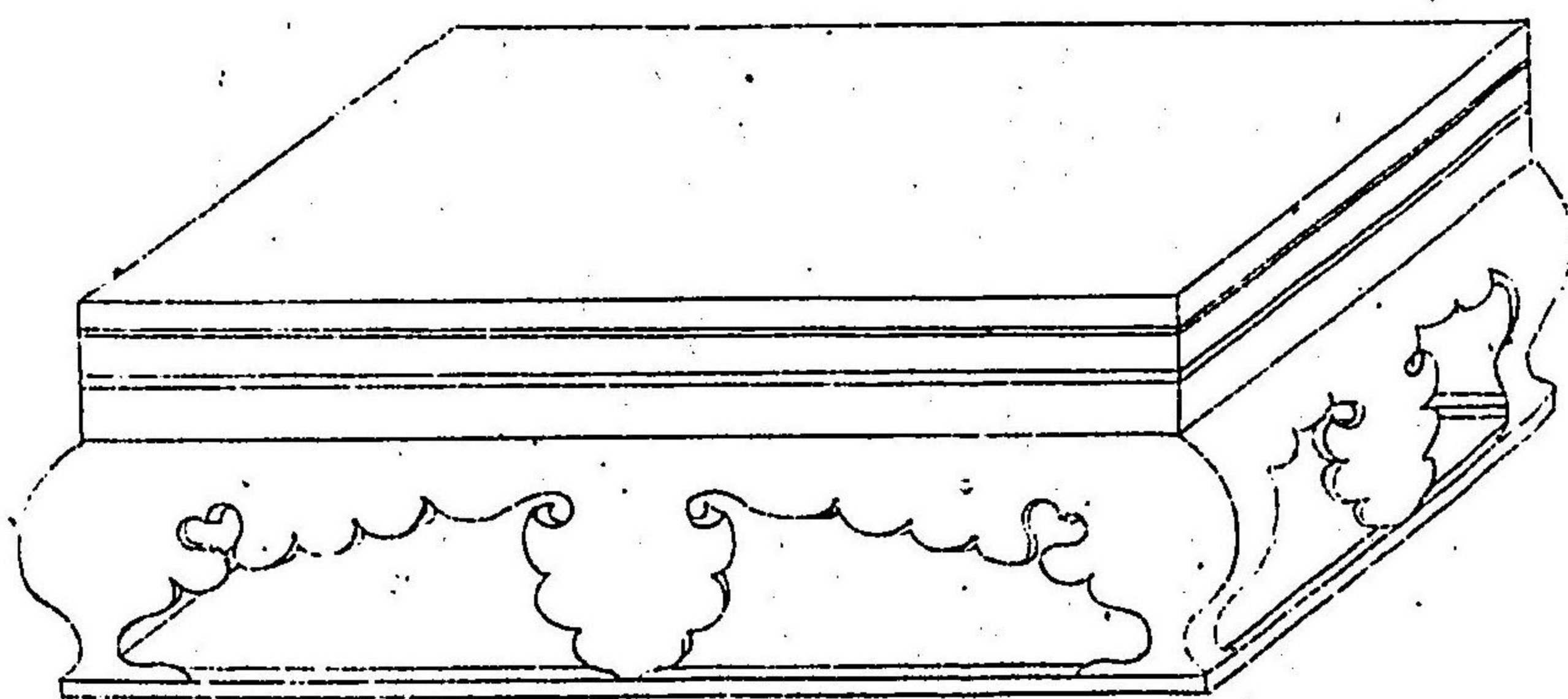
寬延元年製
貝摺料紙箱



寬保二年製
貝摺

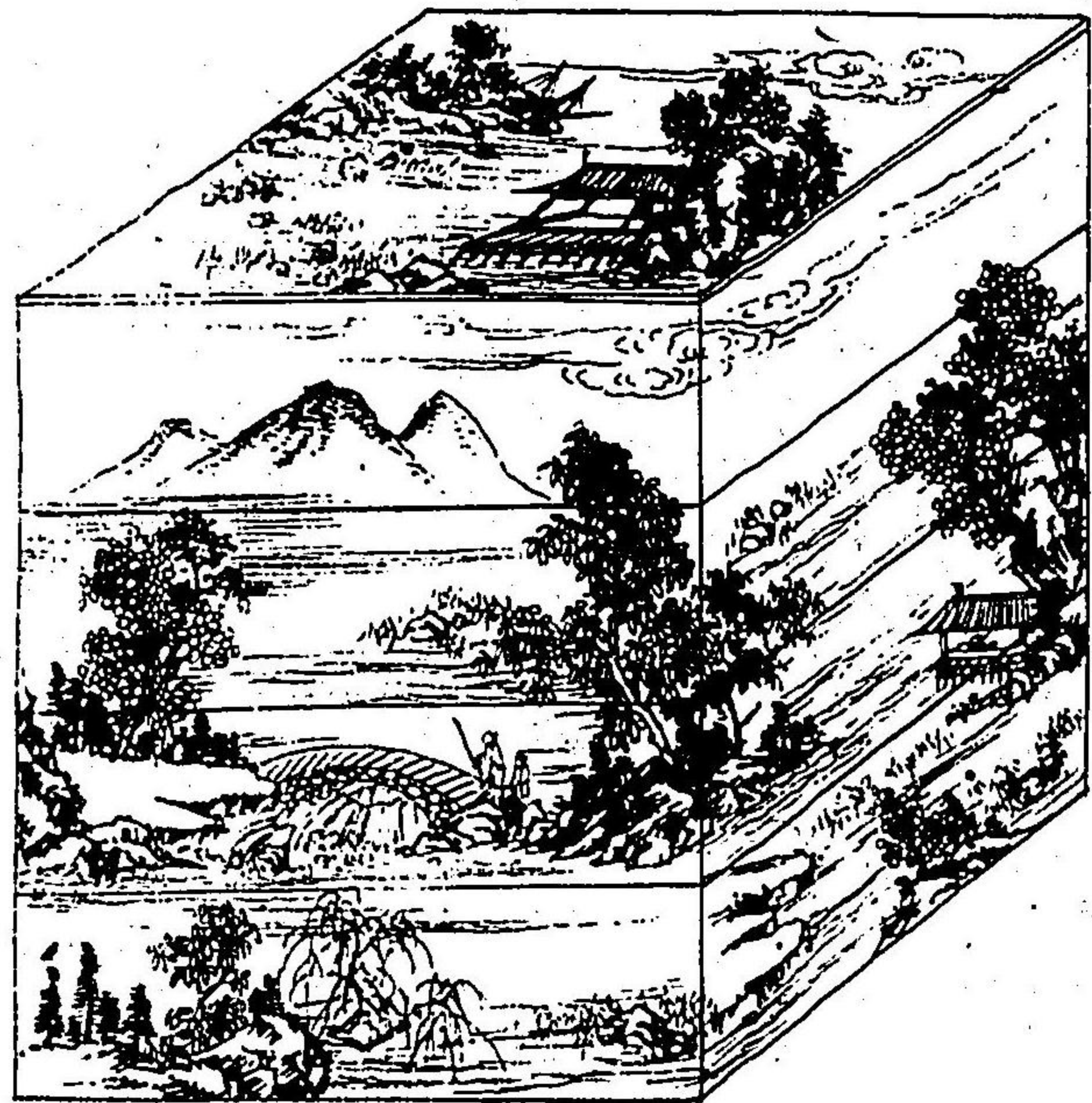


寬保二年製
刻未塗

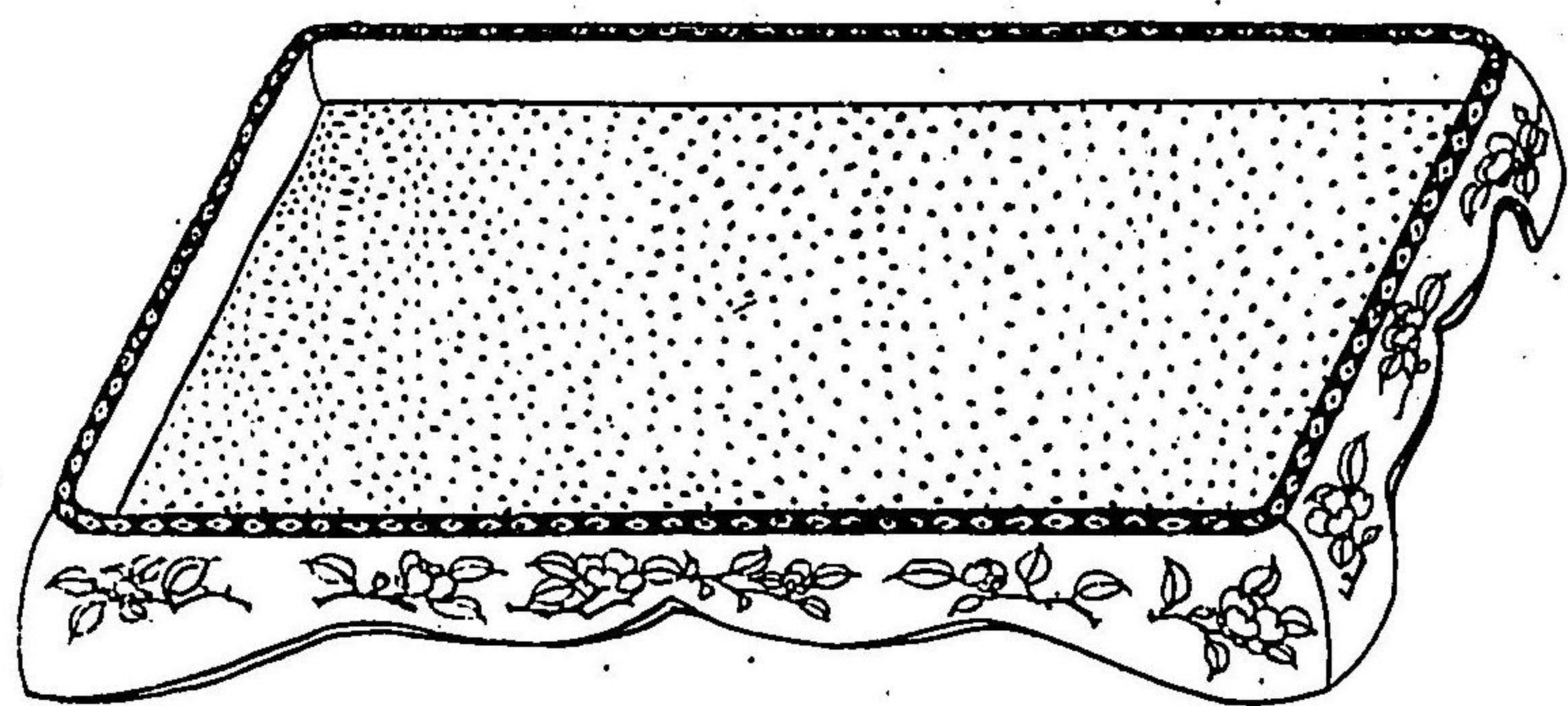


寬保二年製
貝摺

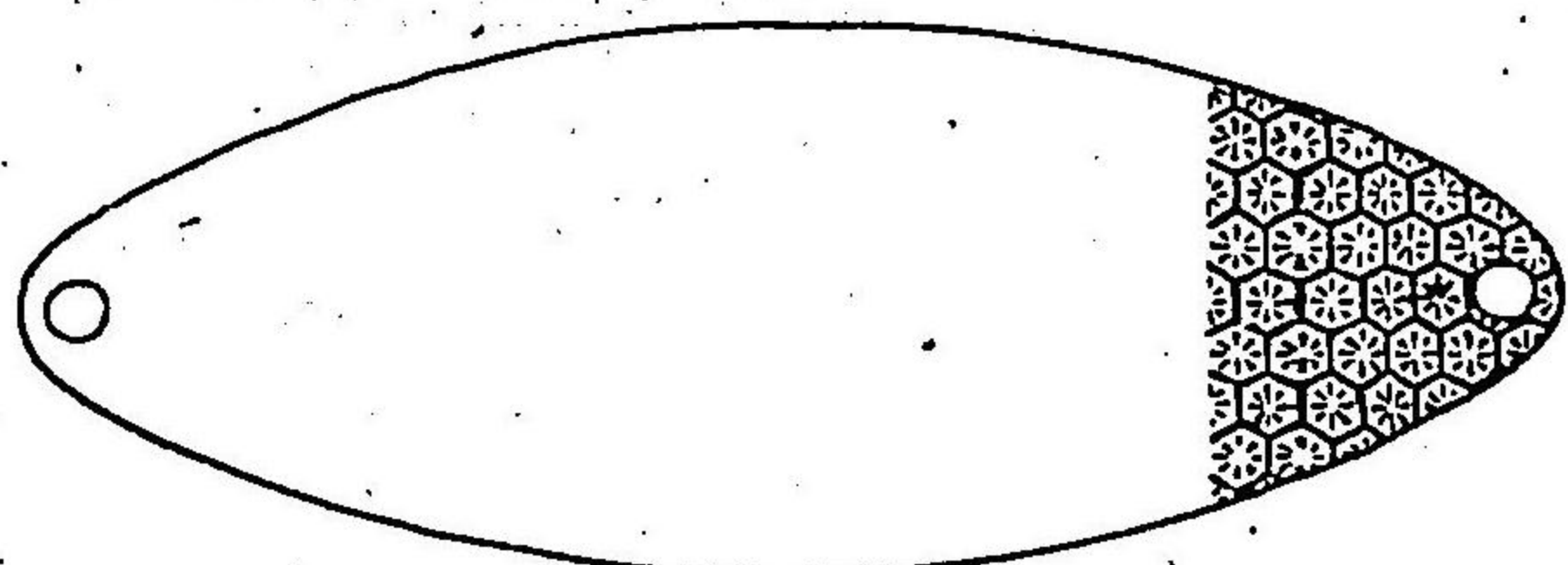
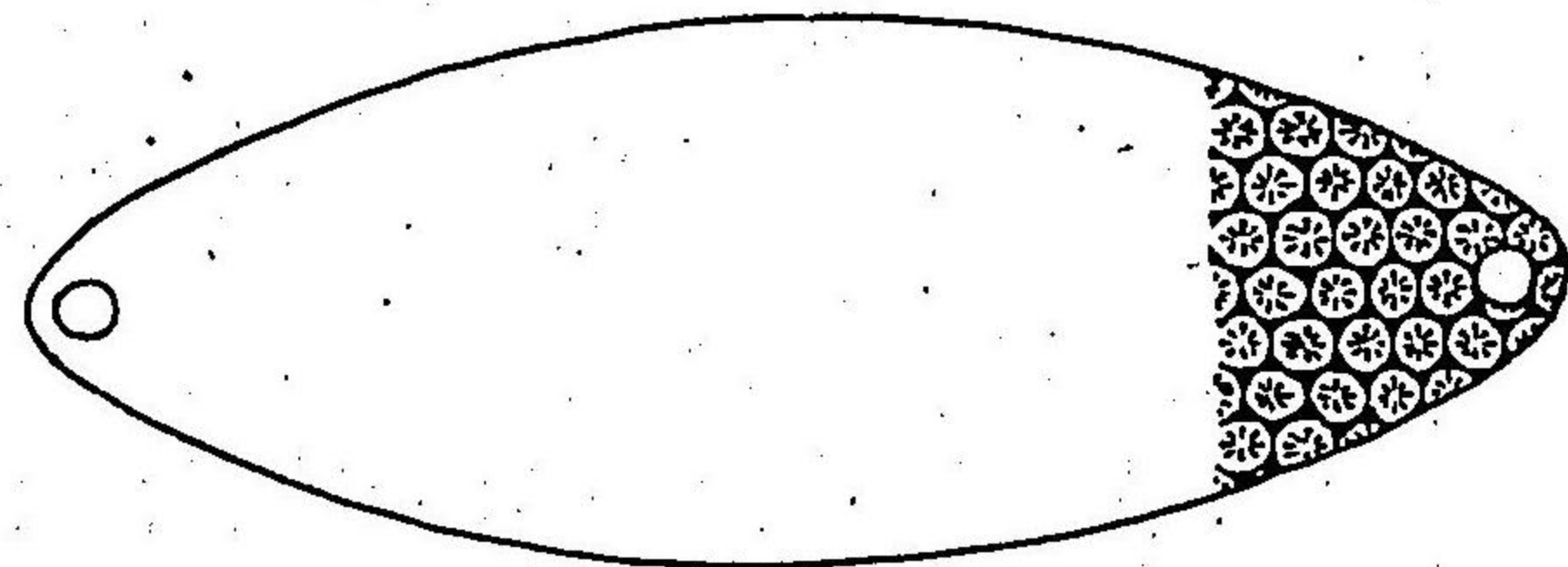
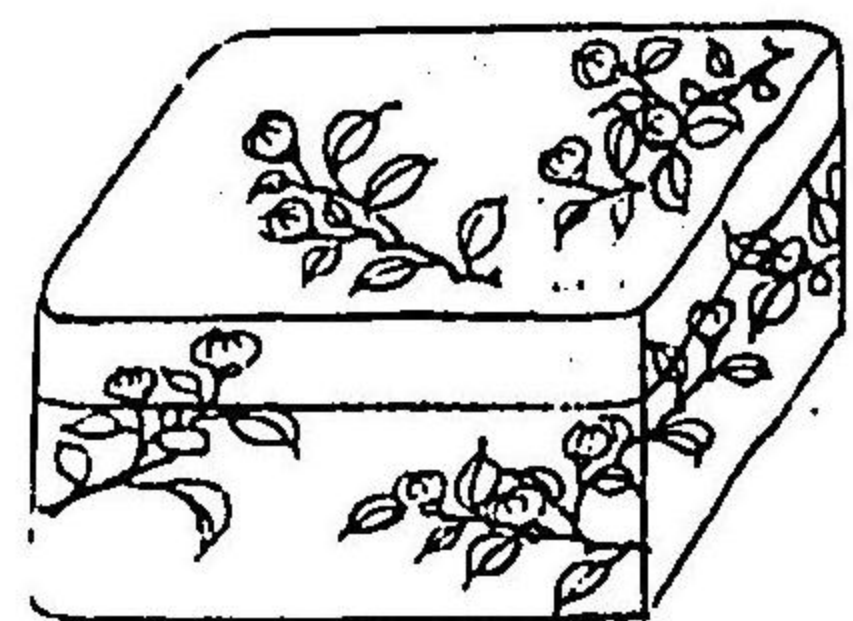




延享四年製
真塗沈金匣箱

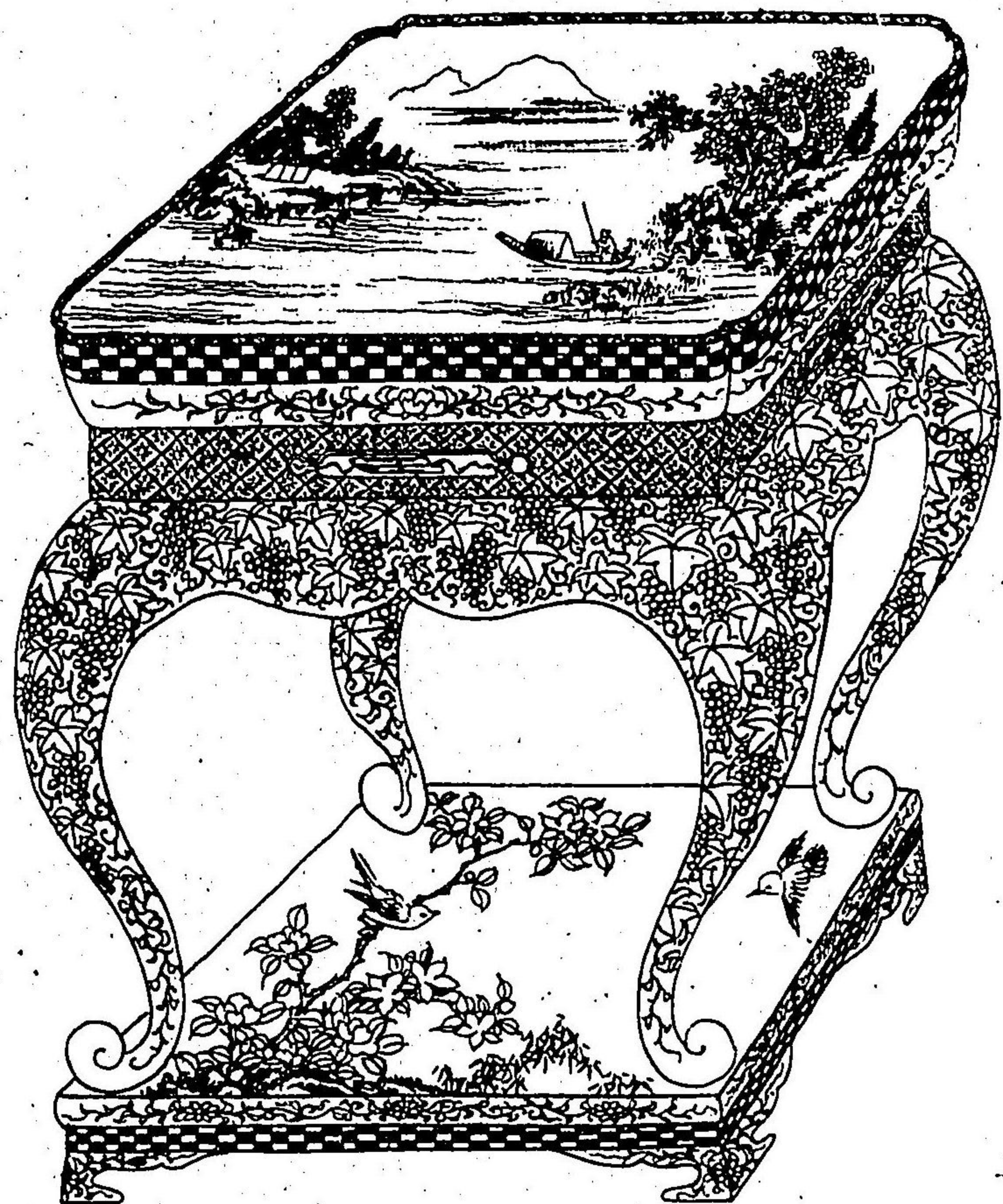


延享四年製貝摺煙草盆並煙草箱

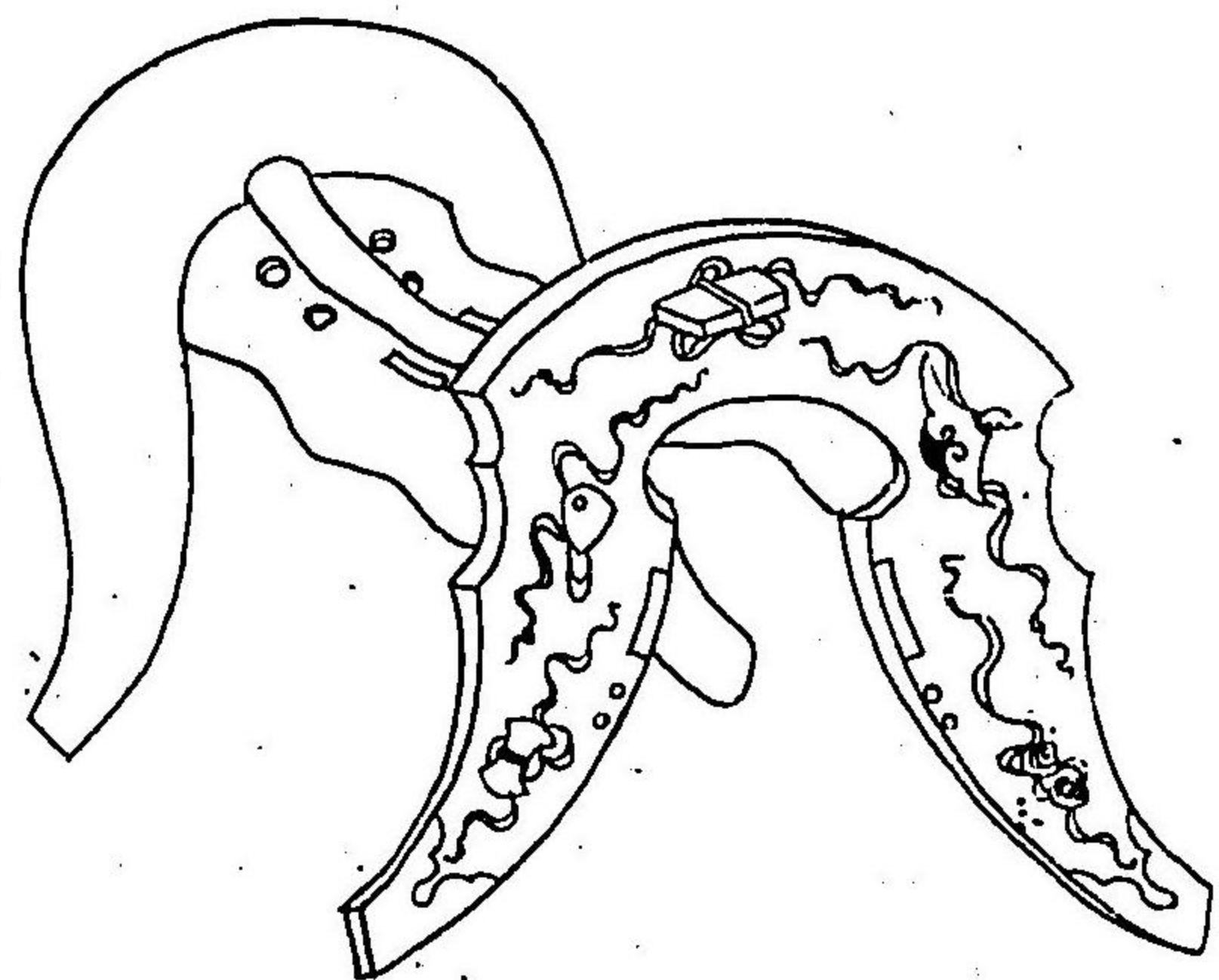


寬保二年製貝摺

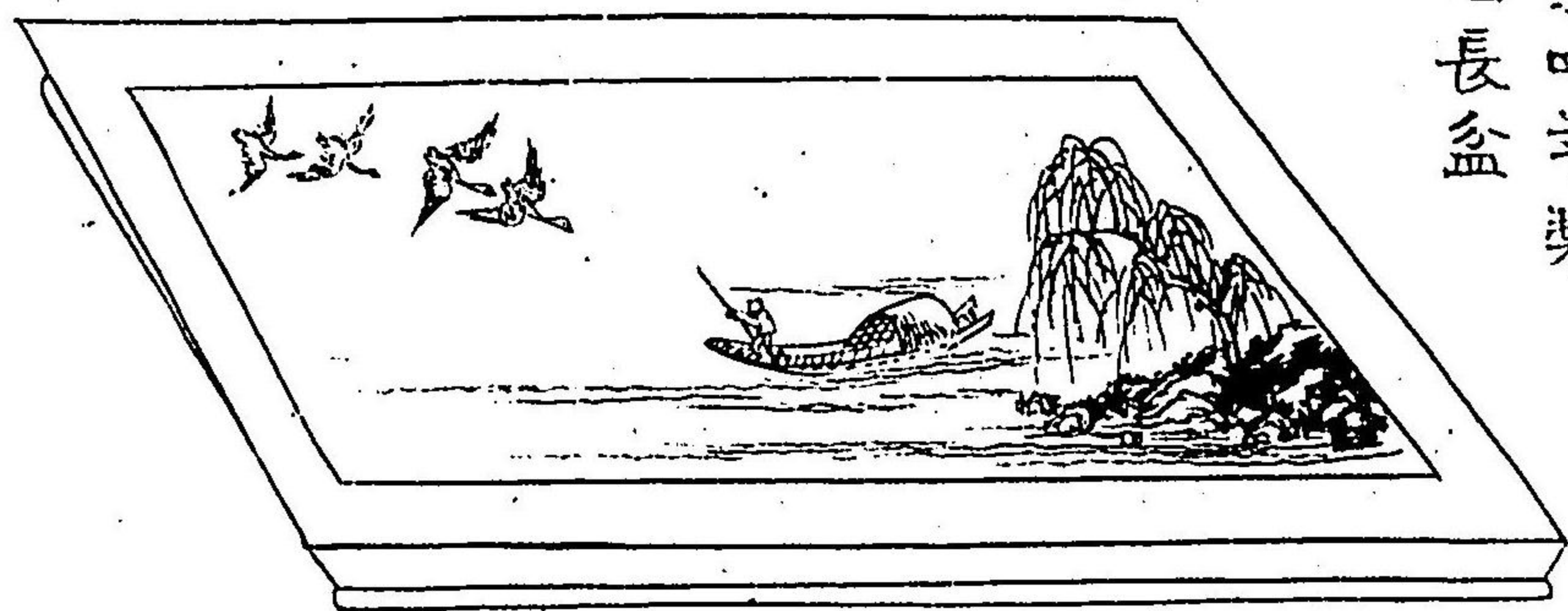
延享四年製貝摺中央卓



延享四年製
青貝摺脚



延享四年製
貝摺長盆



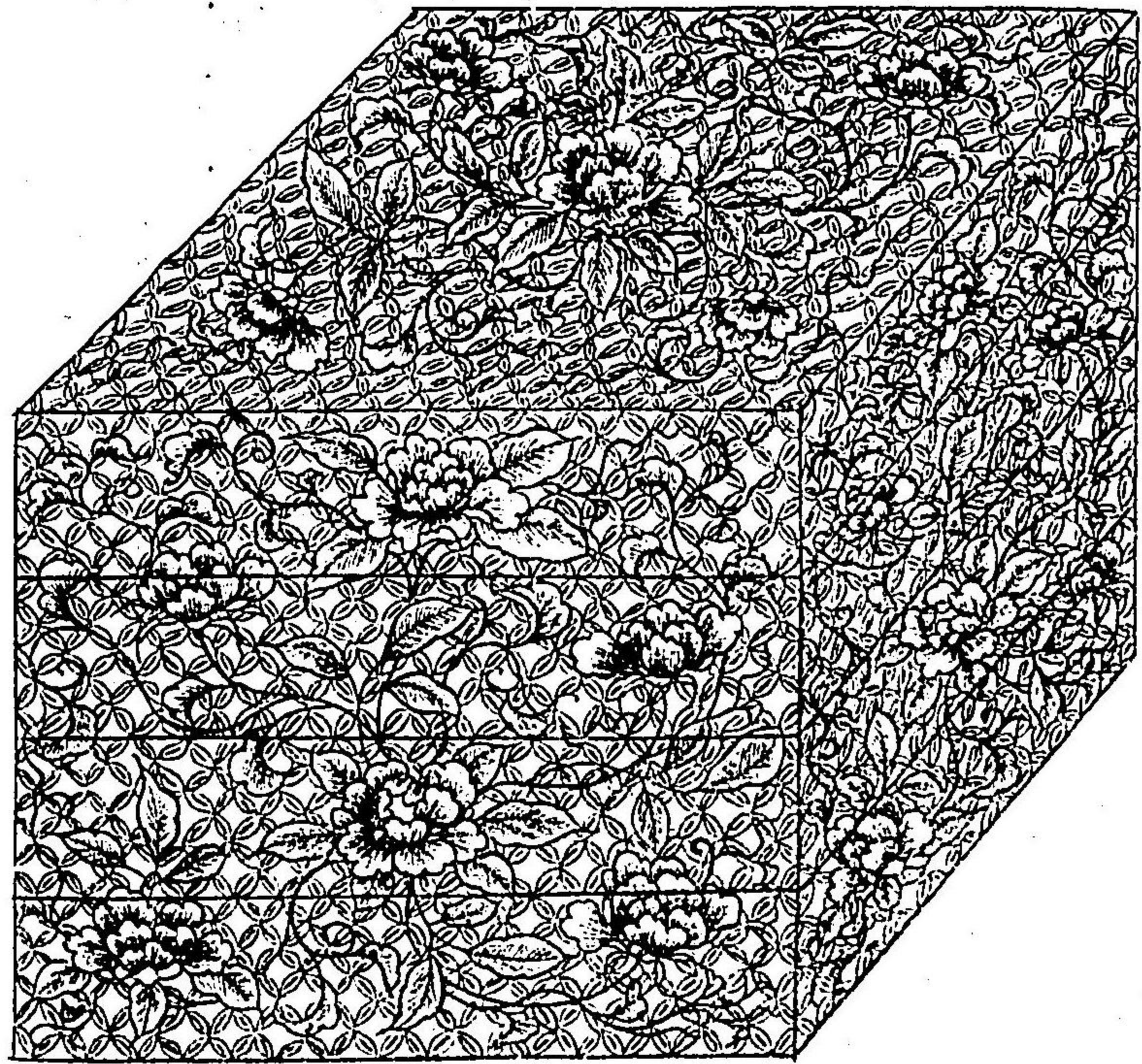
延享四年製
貝摺硯屏



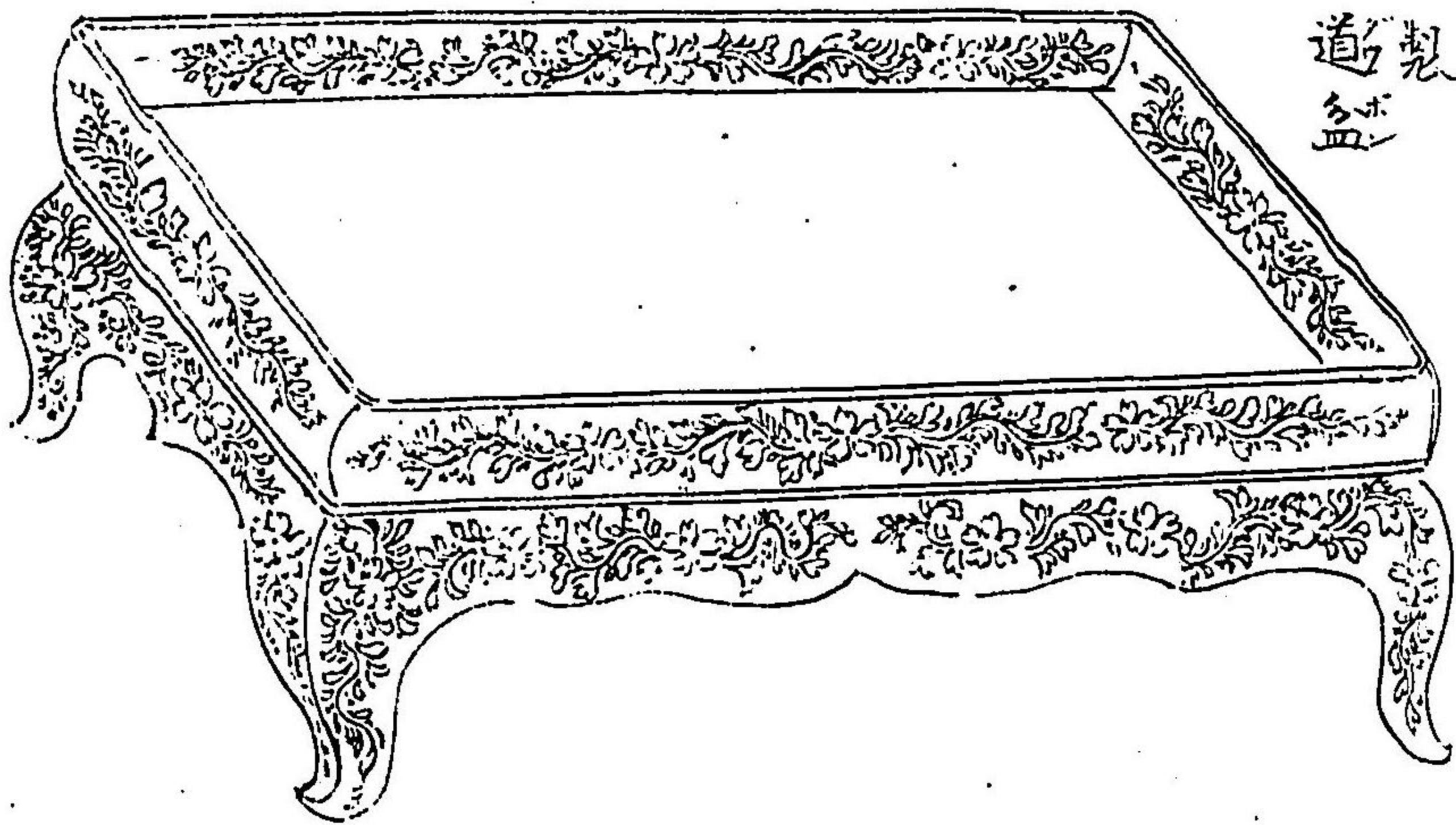
寶曆十年製
真室蠟色貝
摺燒耐臺

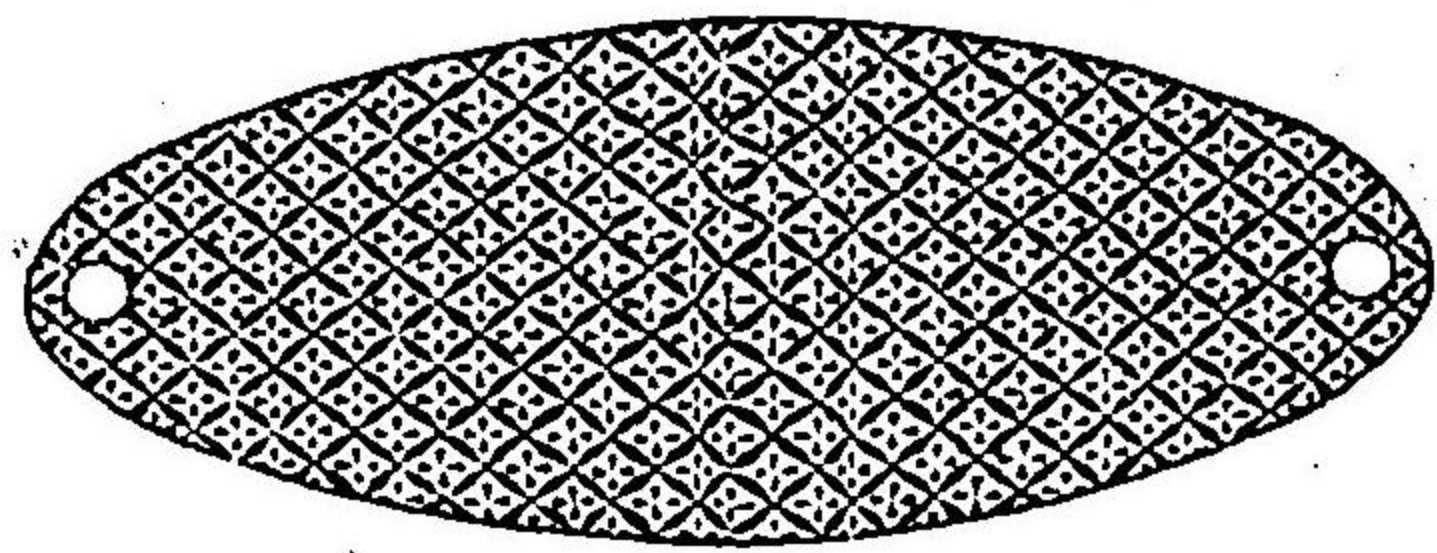
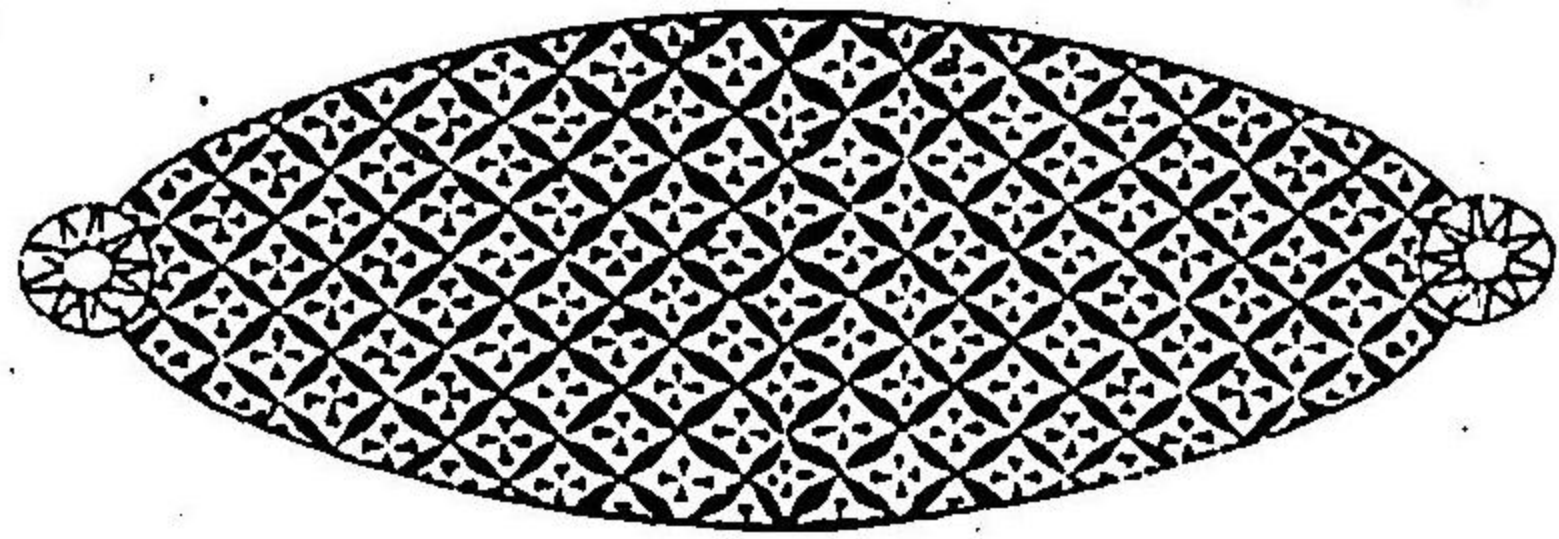


安永四年製貝摺沈金混清重箱



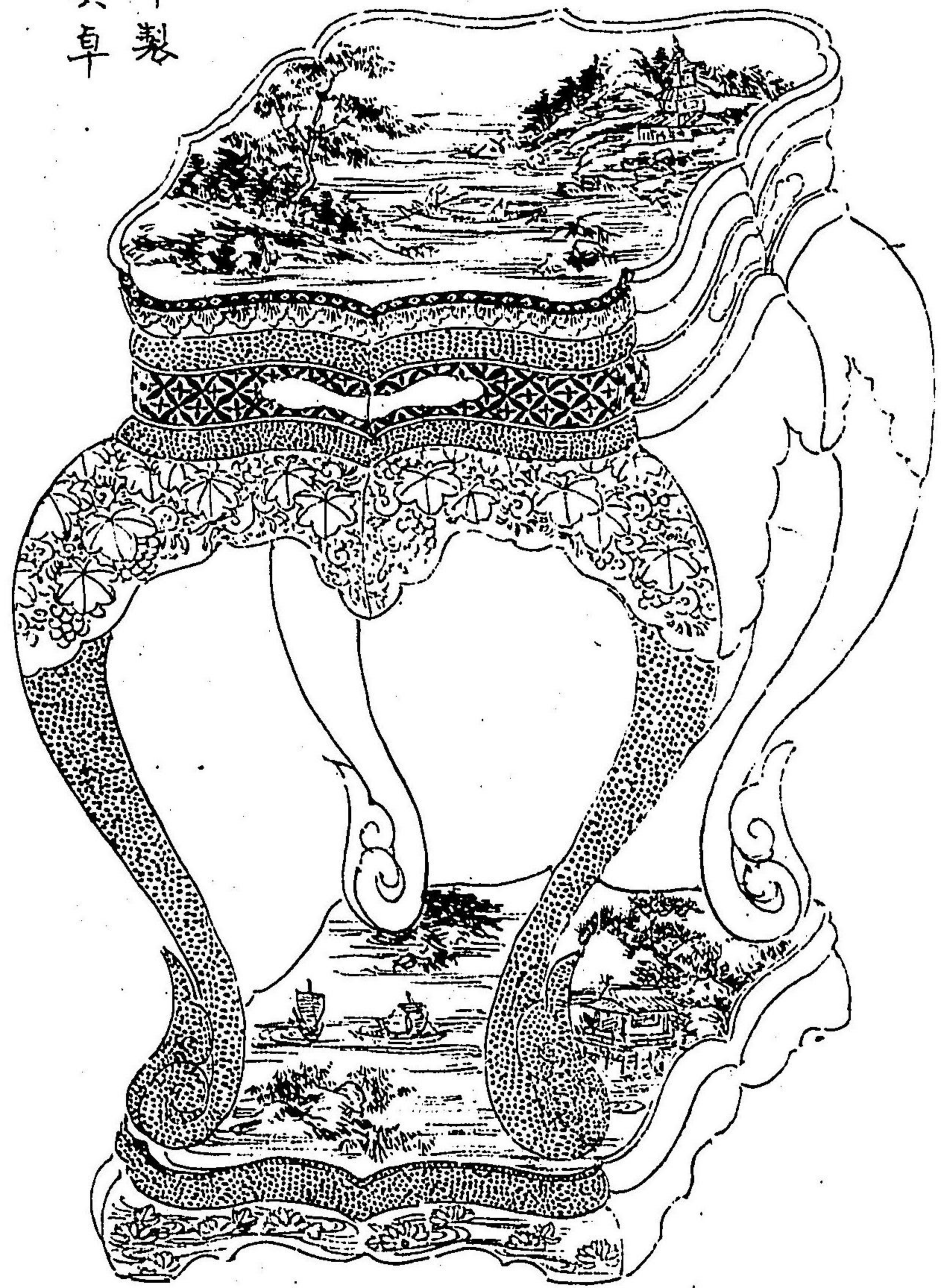
寬延元年製
青貝摺刺道盆



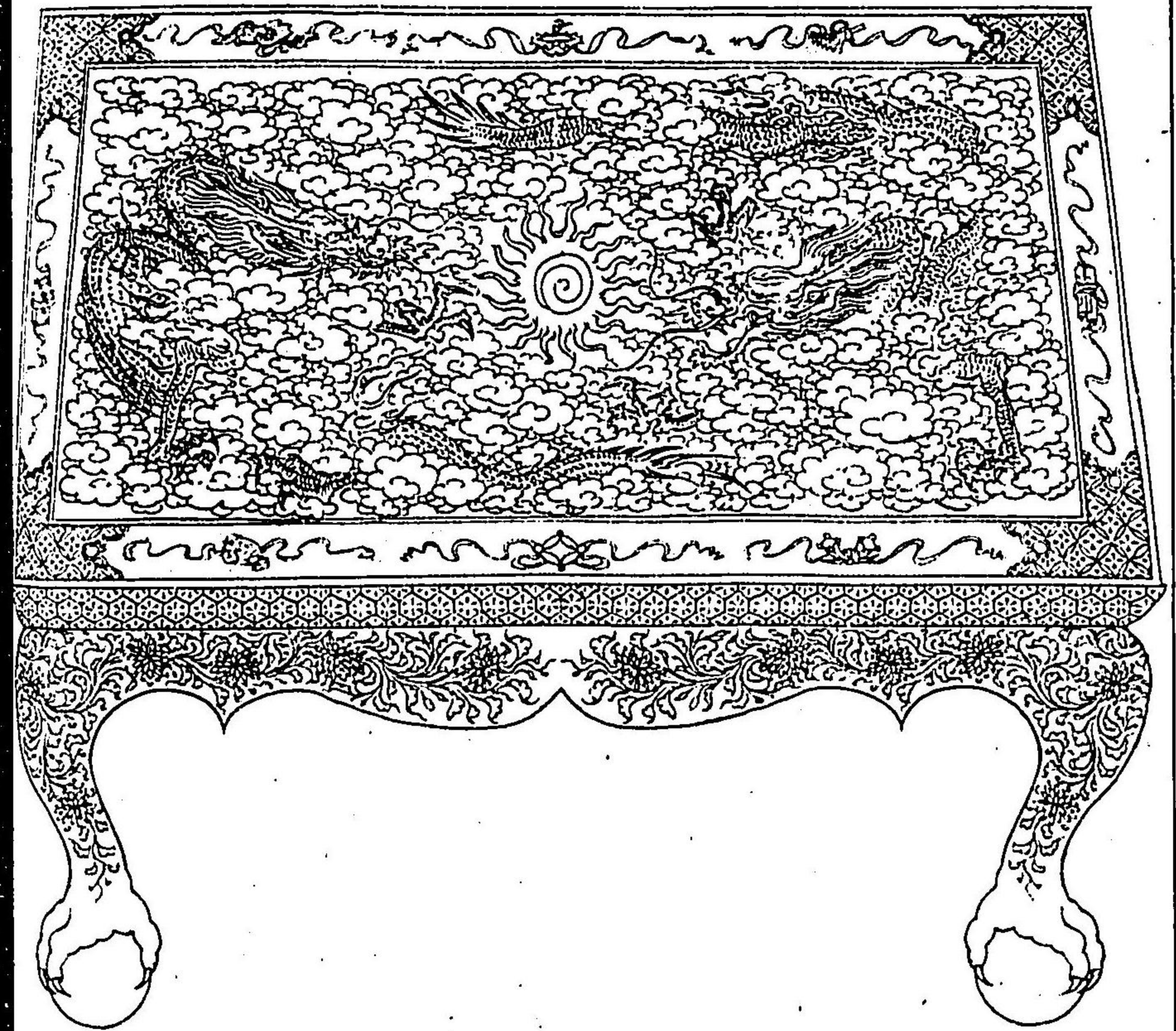


寬延九年製
貝摺

寬延九年製
貝摺中央卓



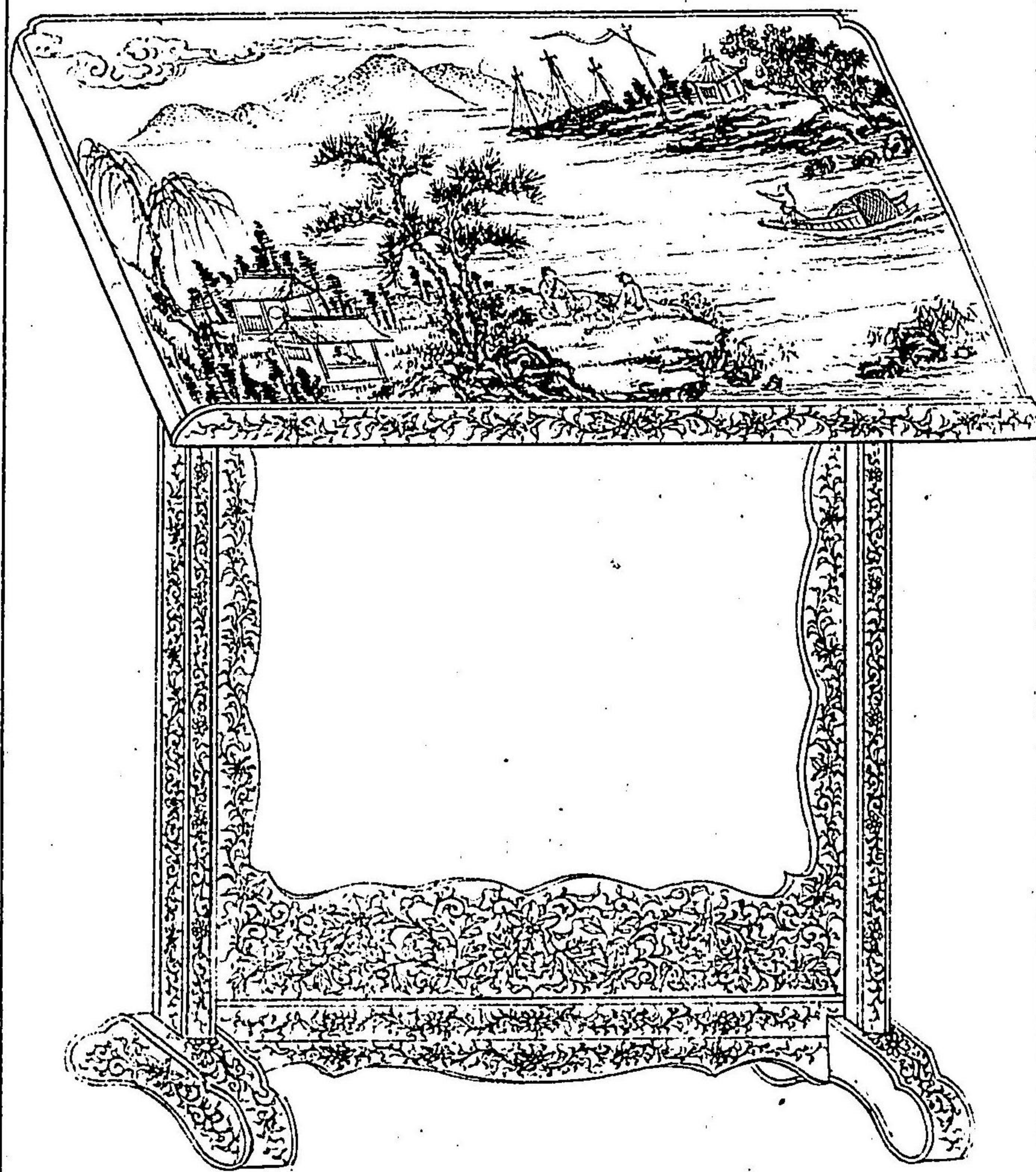
寬延元年製
貝摺沈金混淆



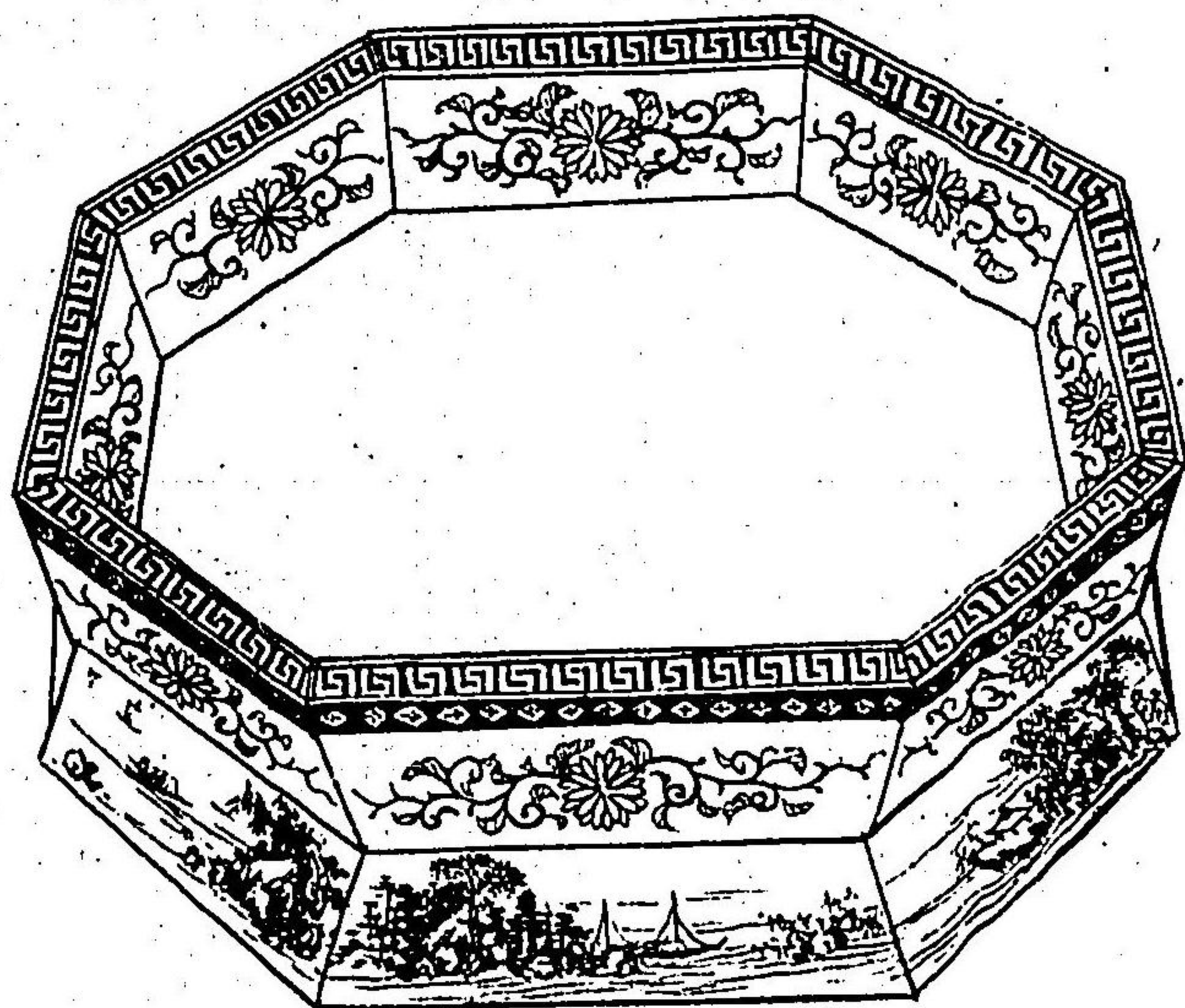
寬延元年製
堆朱硯屏



寬延元年
見臺

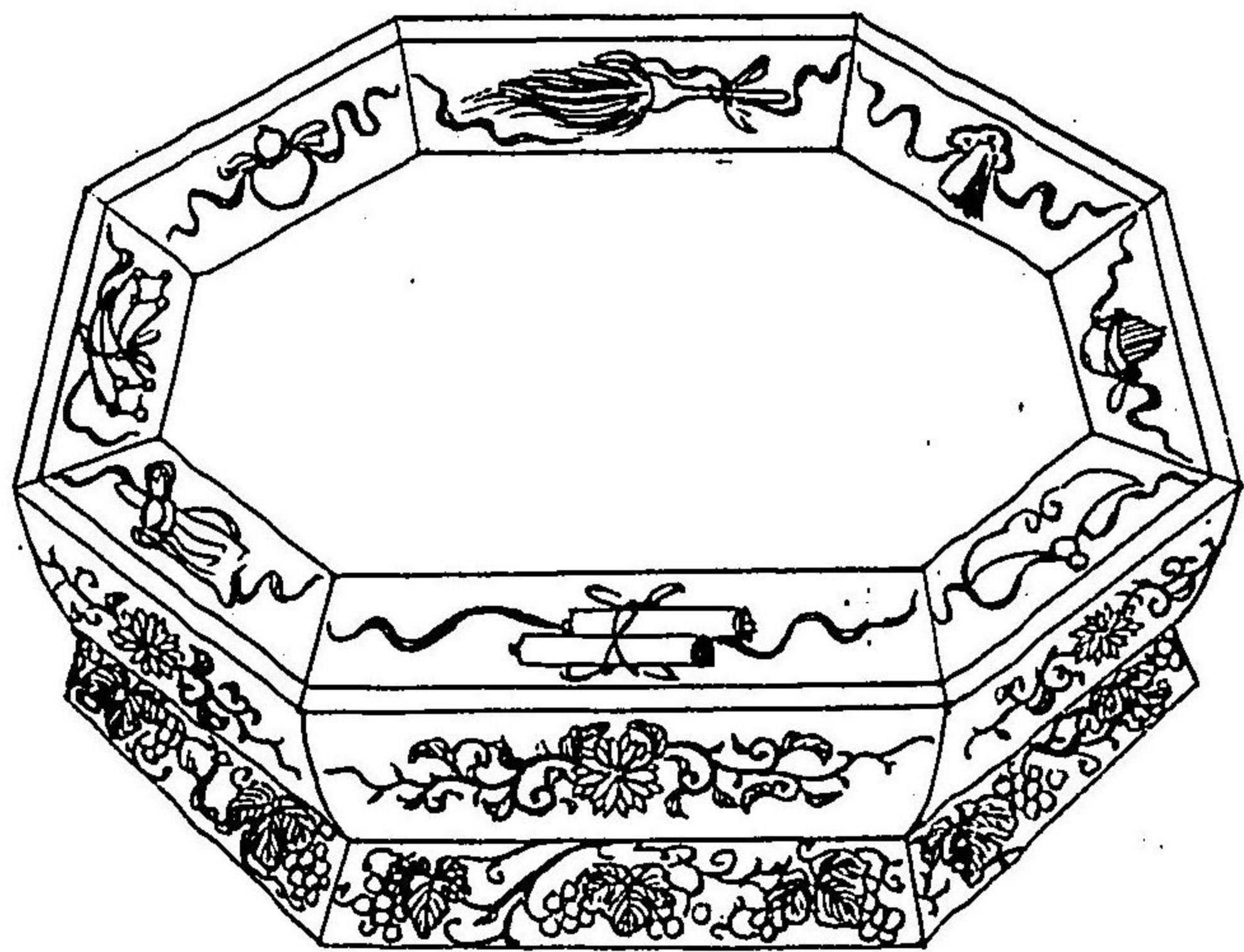


寬延元年製具摺八角食臺

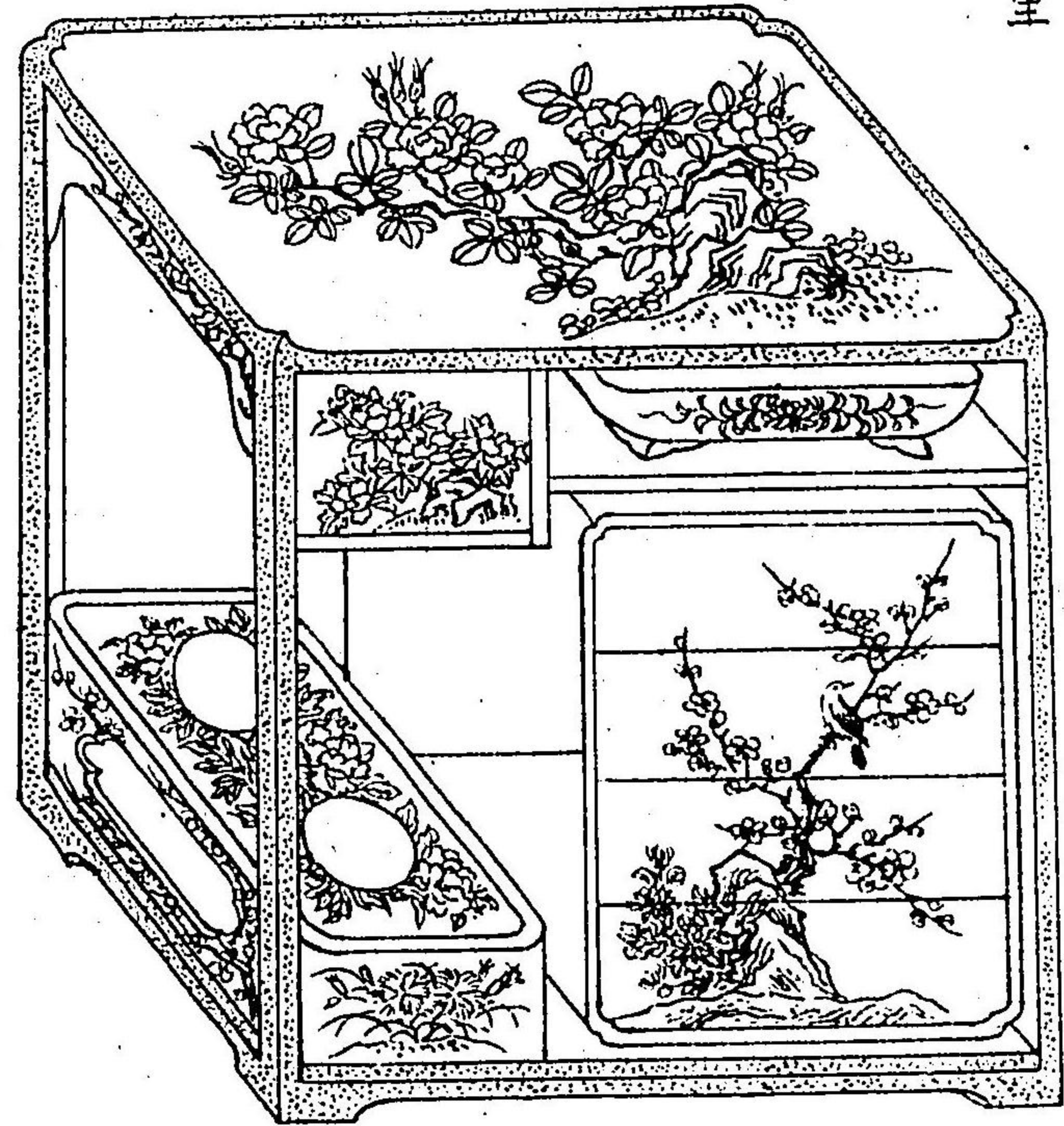


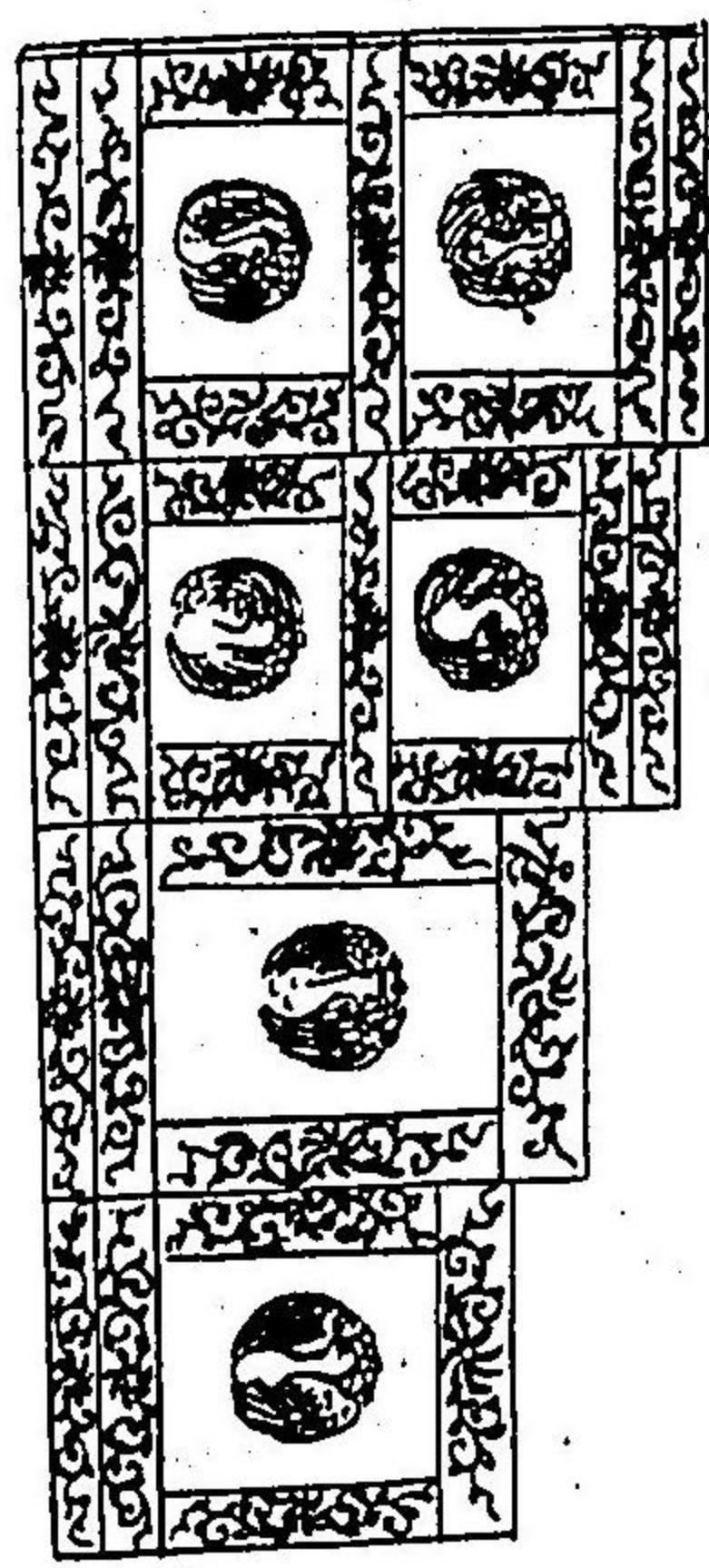


寬延二年製
貝摺食籠

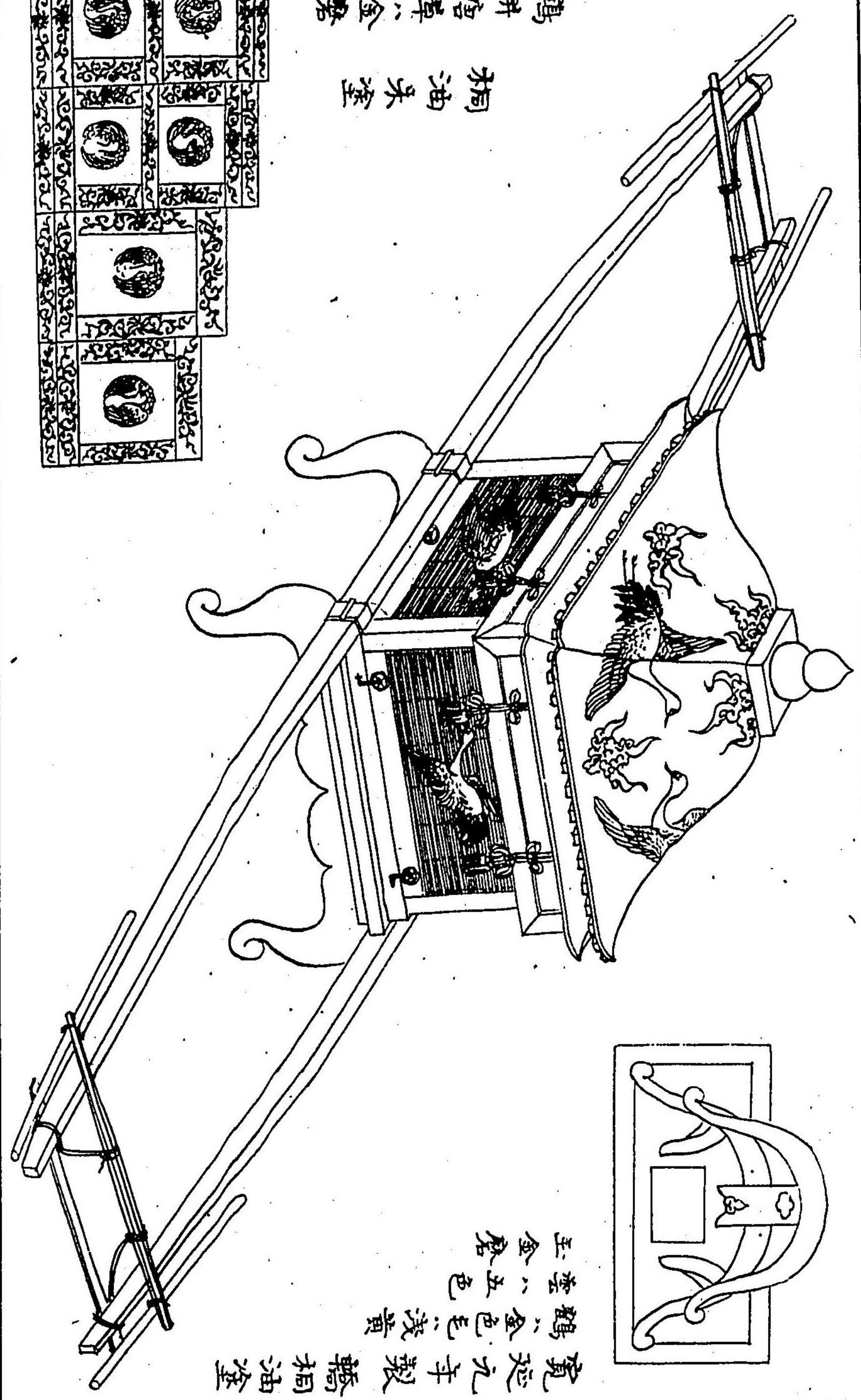


寬延二年製
貝摺提重

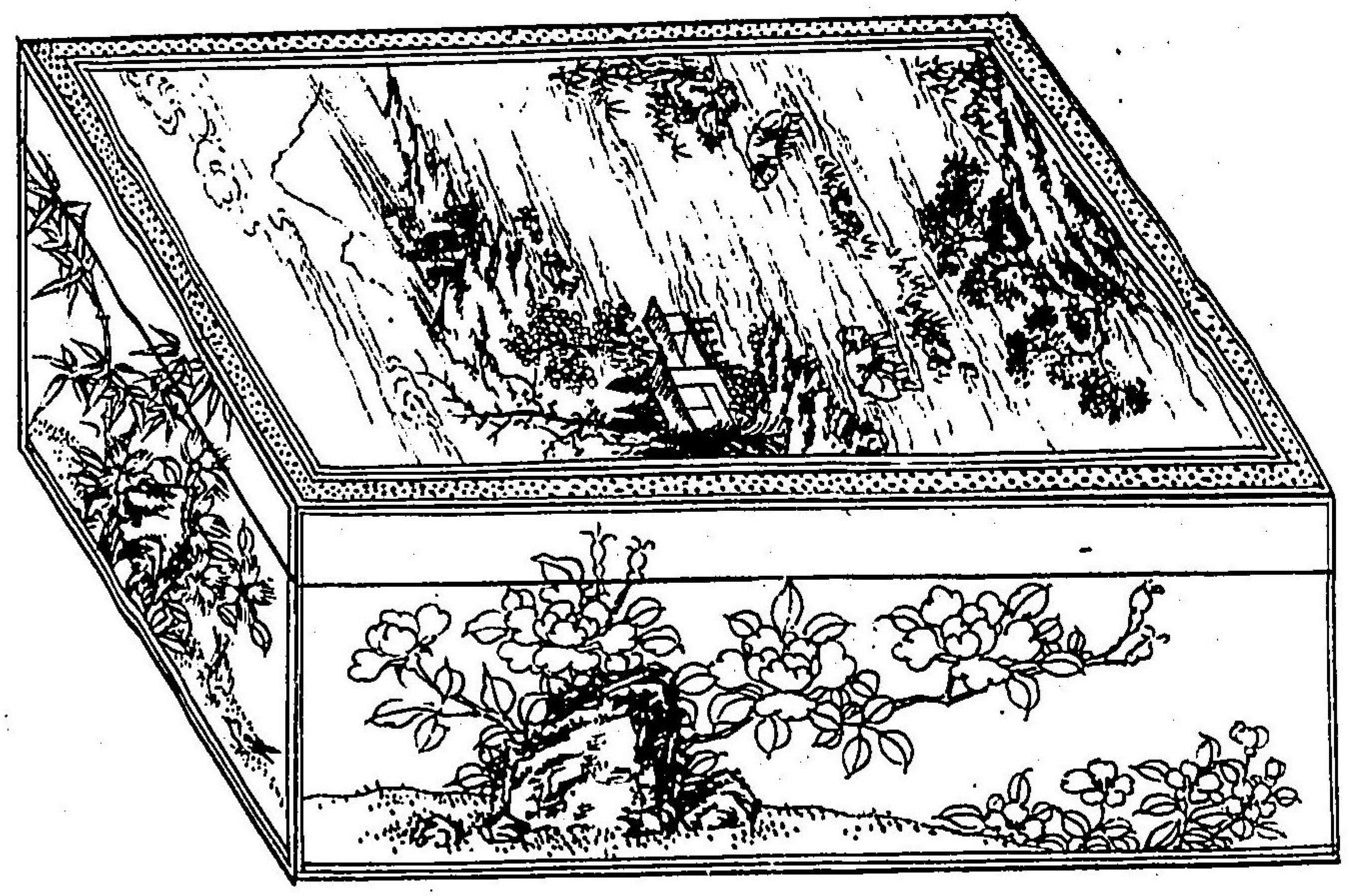
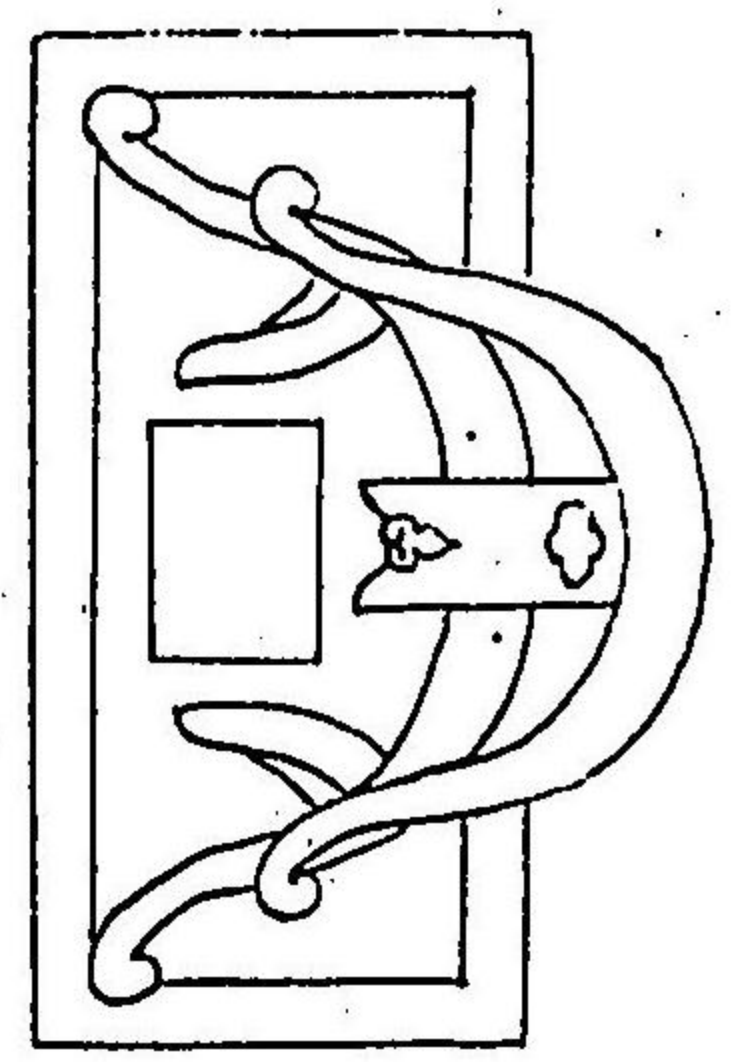




鶴井唐草ハ金磨
桐油朱塗

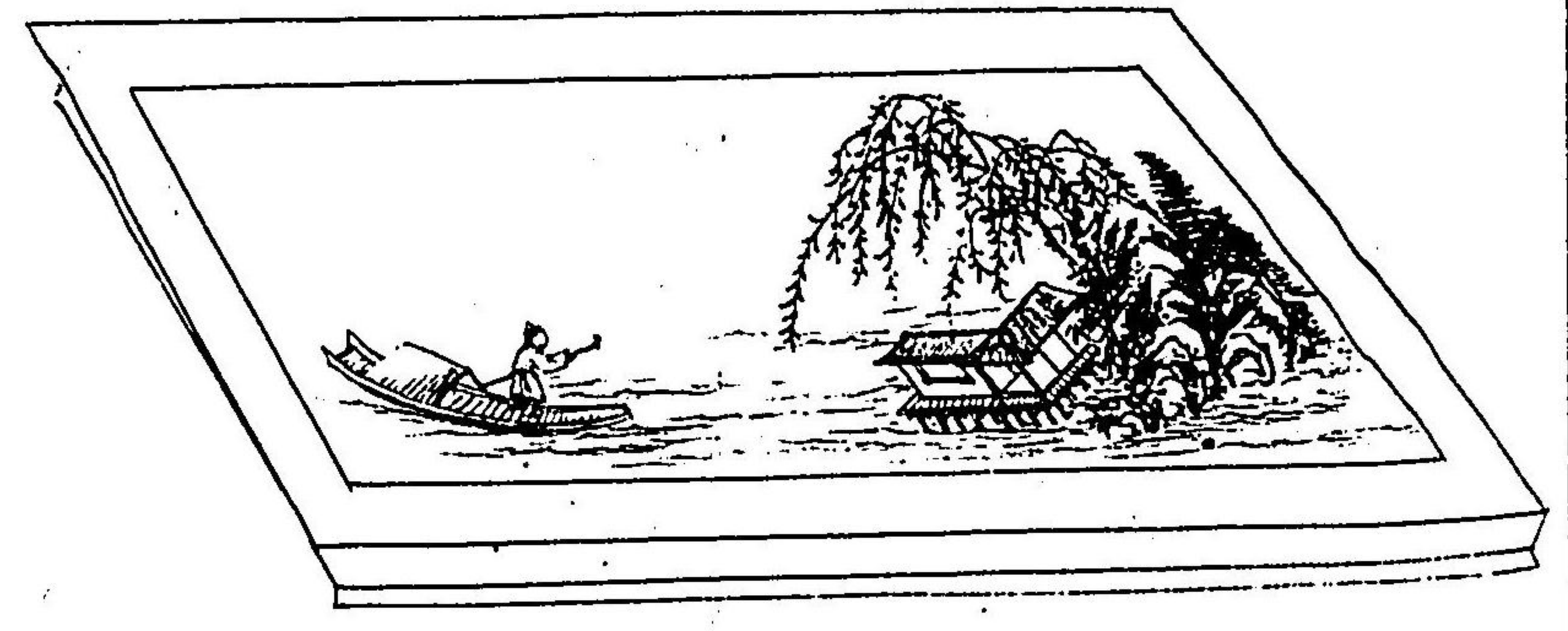


寛延元年製轆桐油塗
鶴ハ金色毛淺黄
壁ハ五色
五金磨

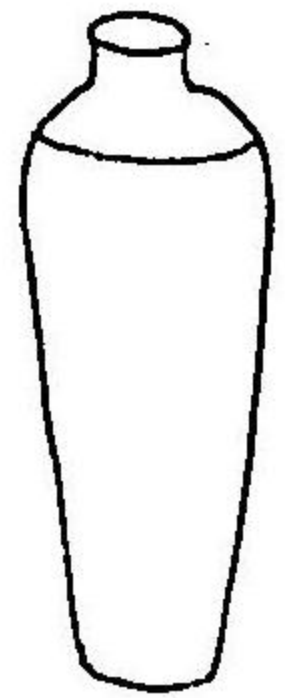
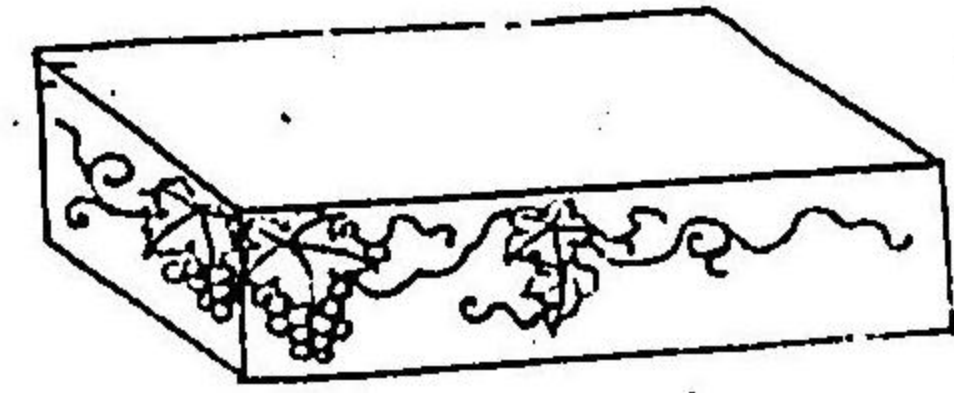
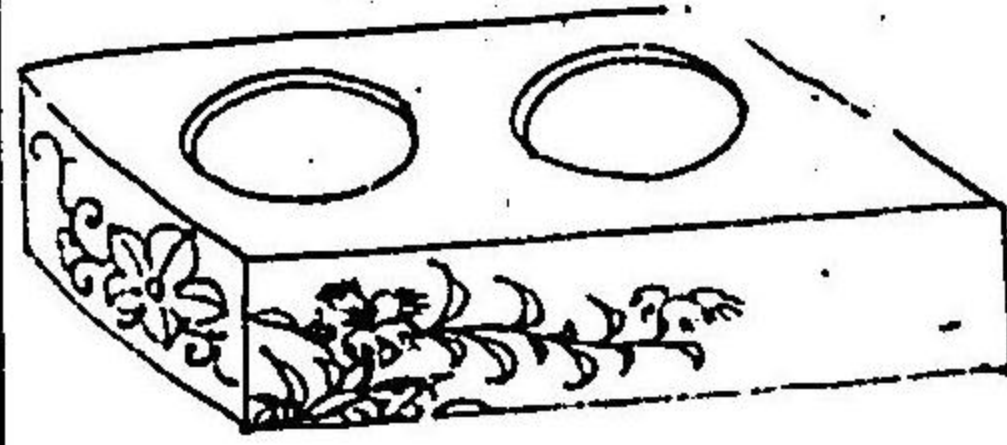
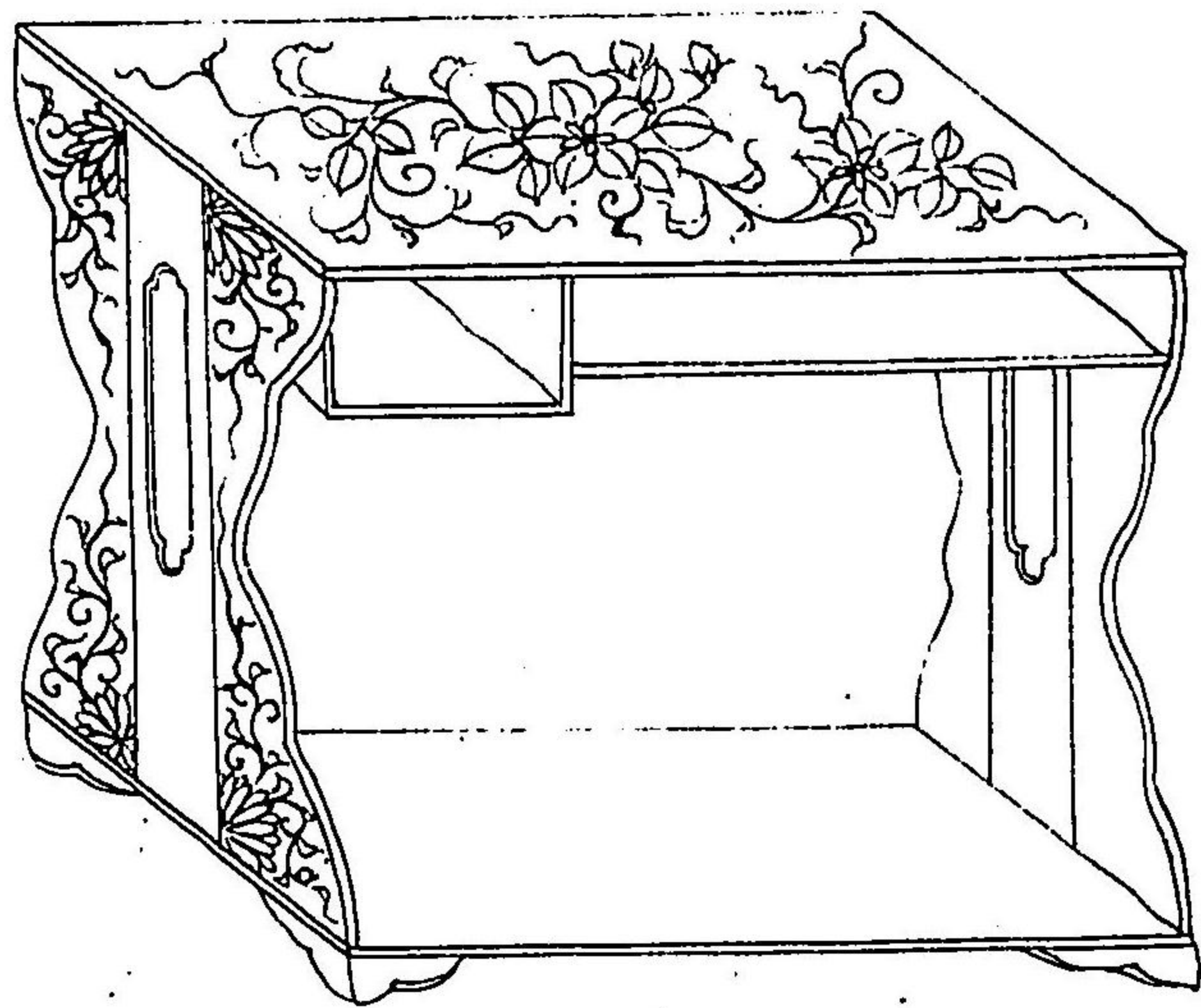
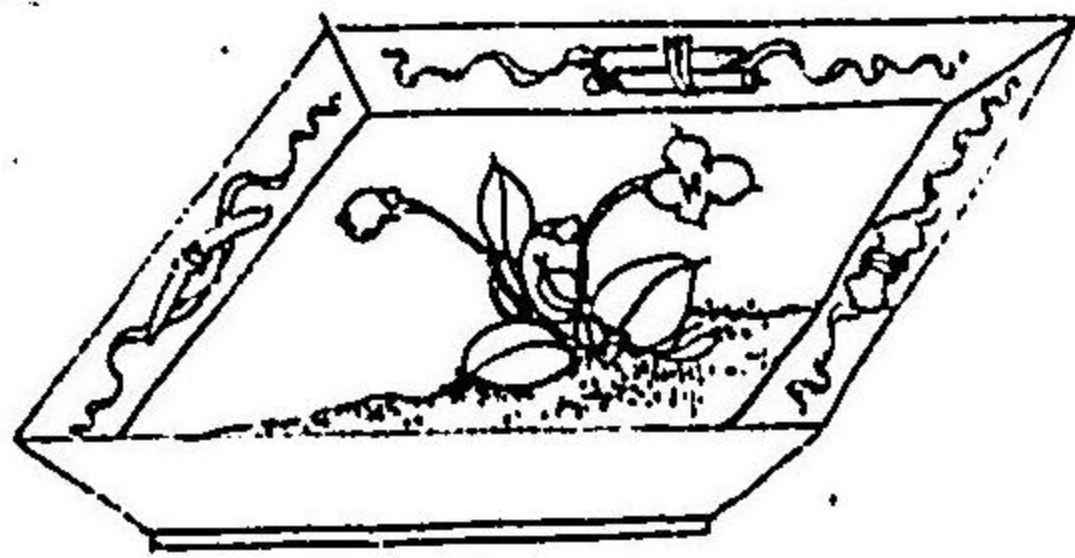
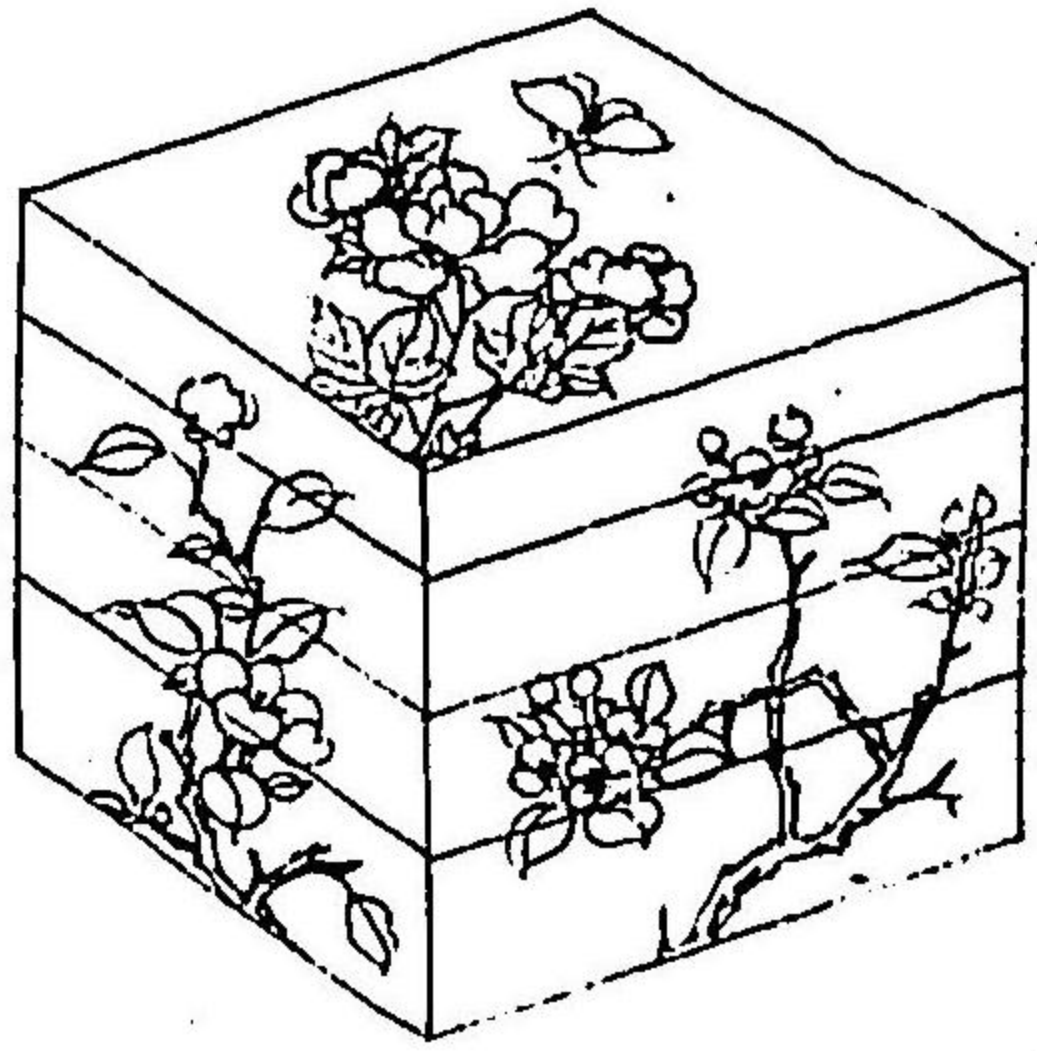
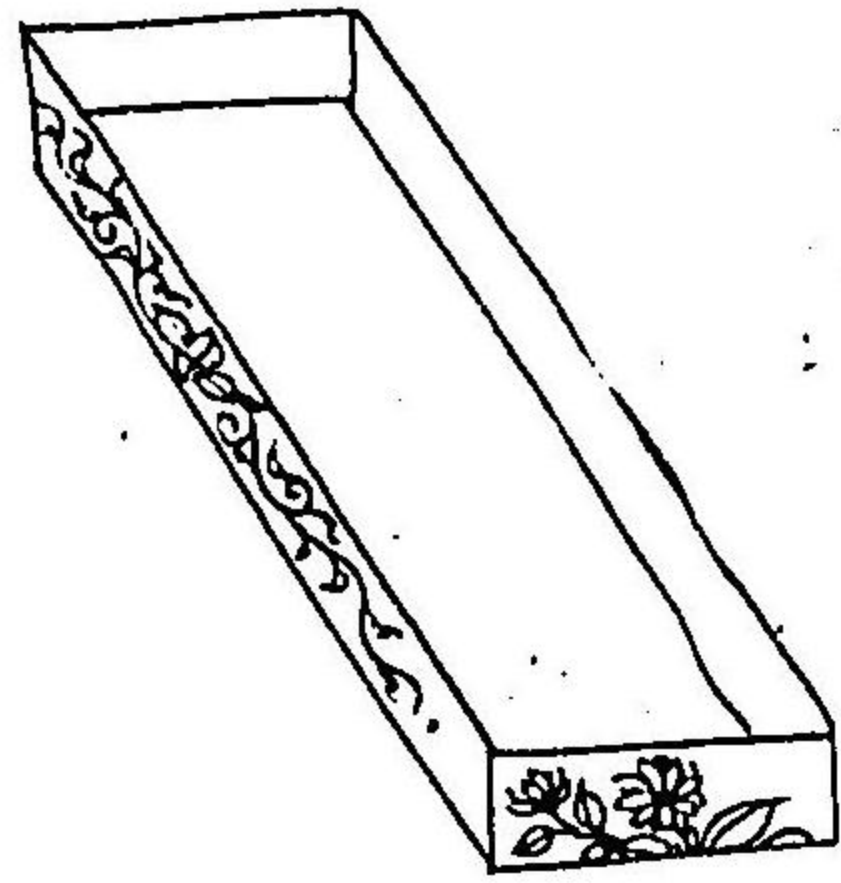
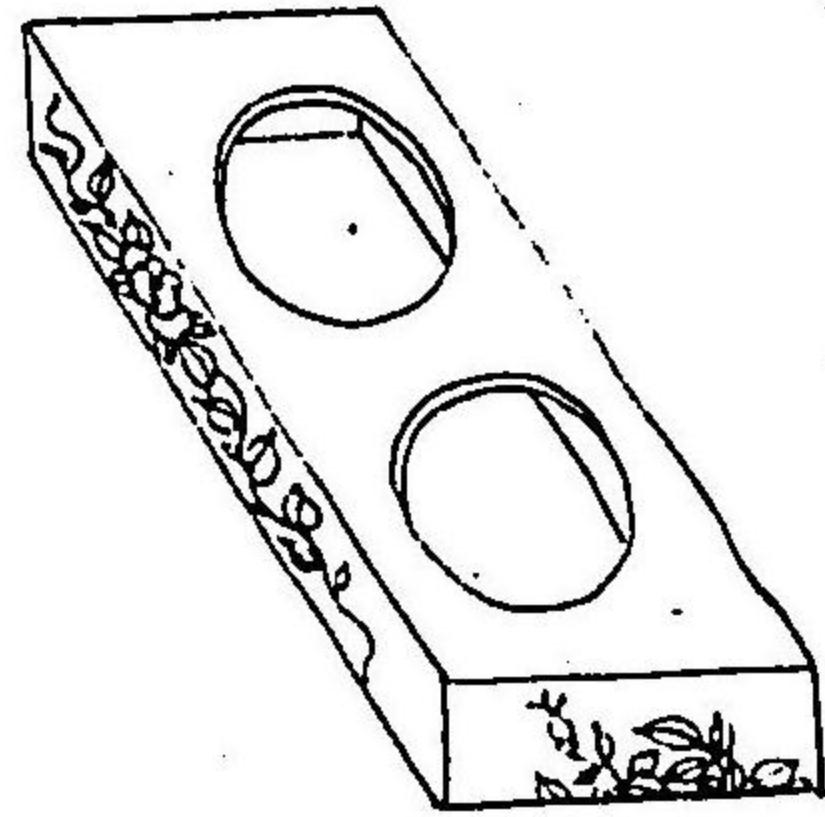


正徳四年製
真塗青貝摺
料紙箱

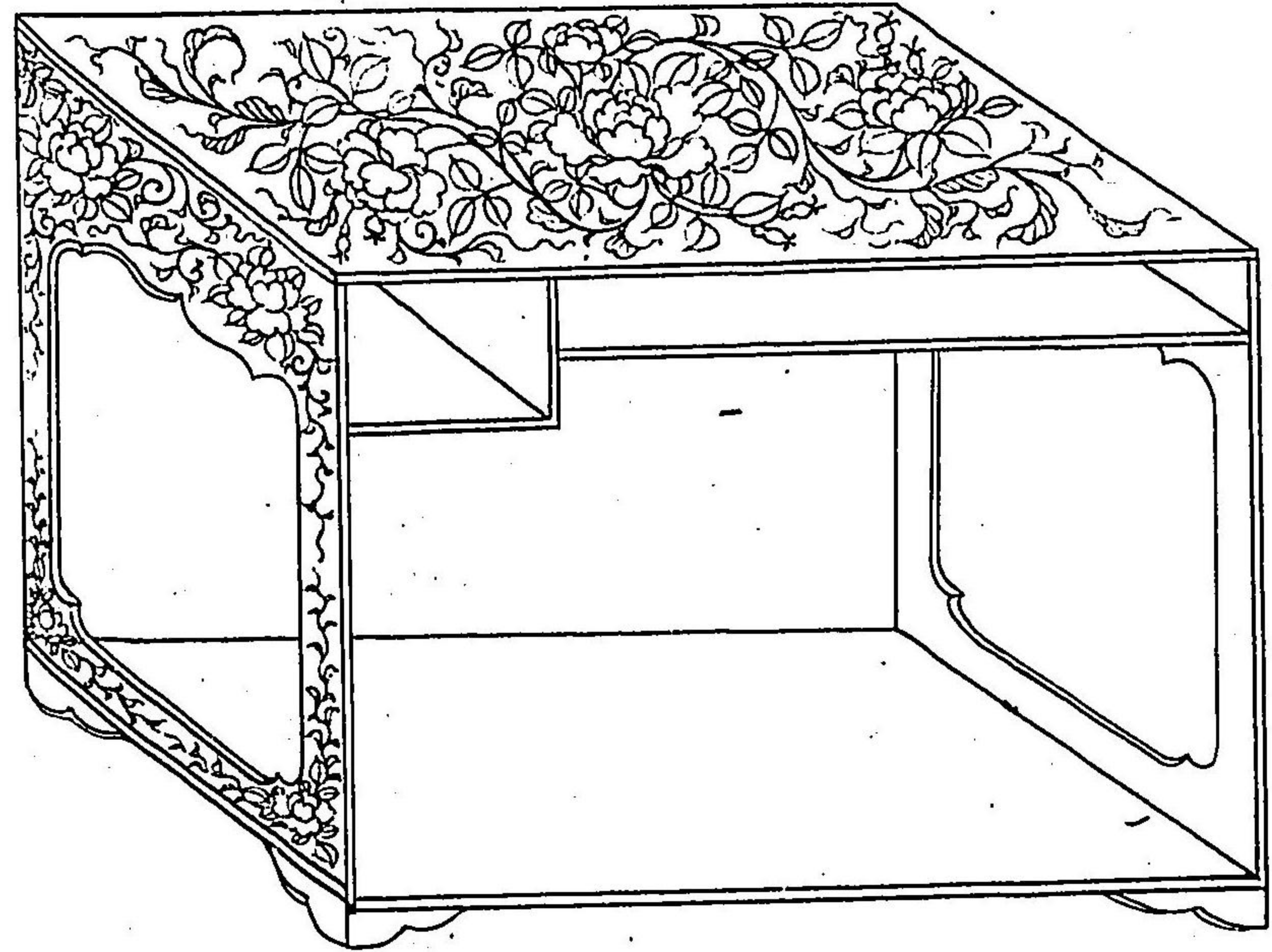
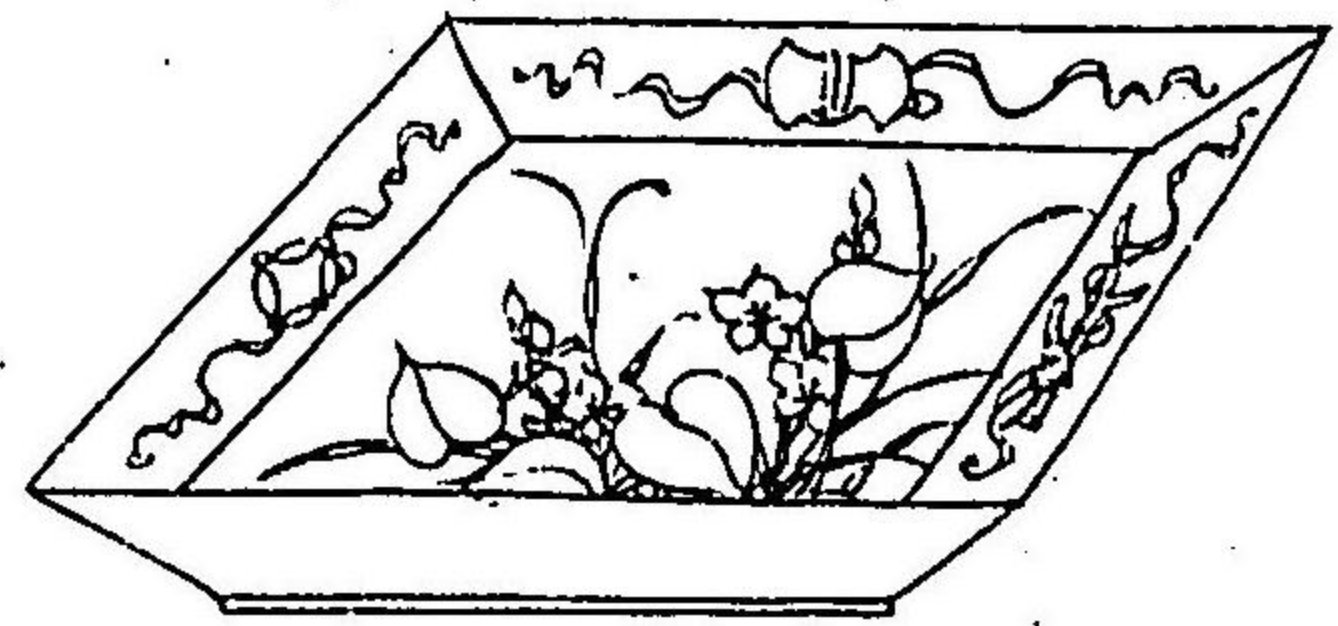
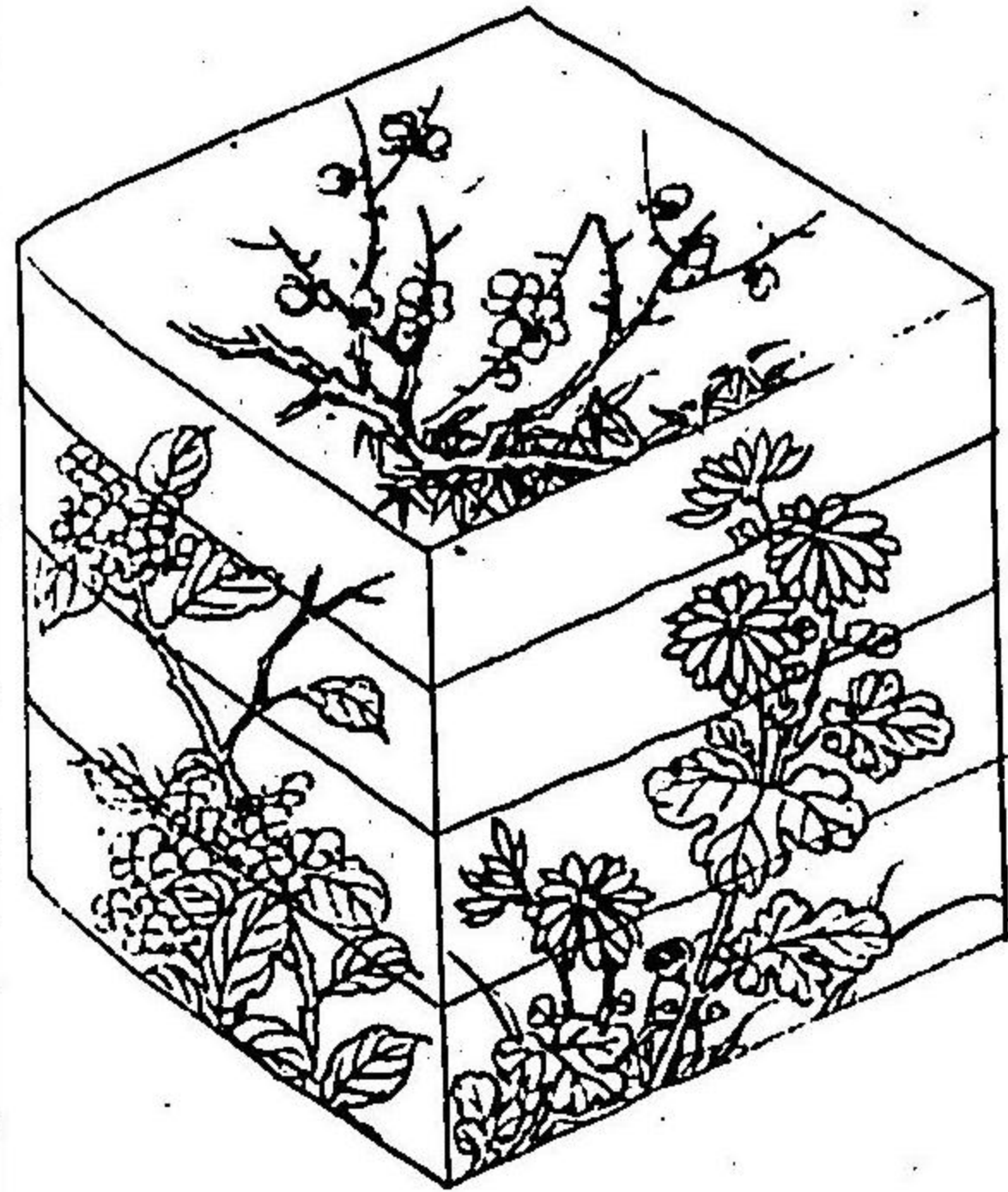
寛延元年製
長益堆米



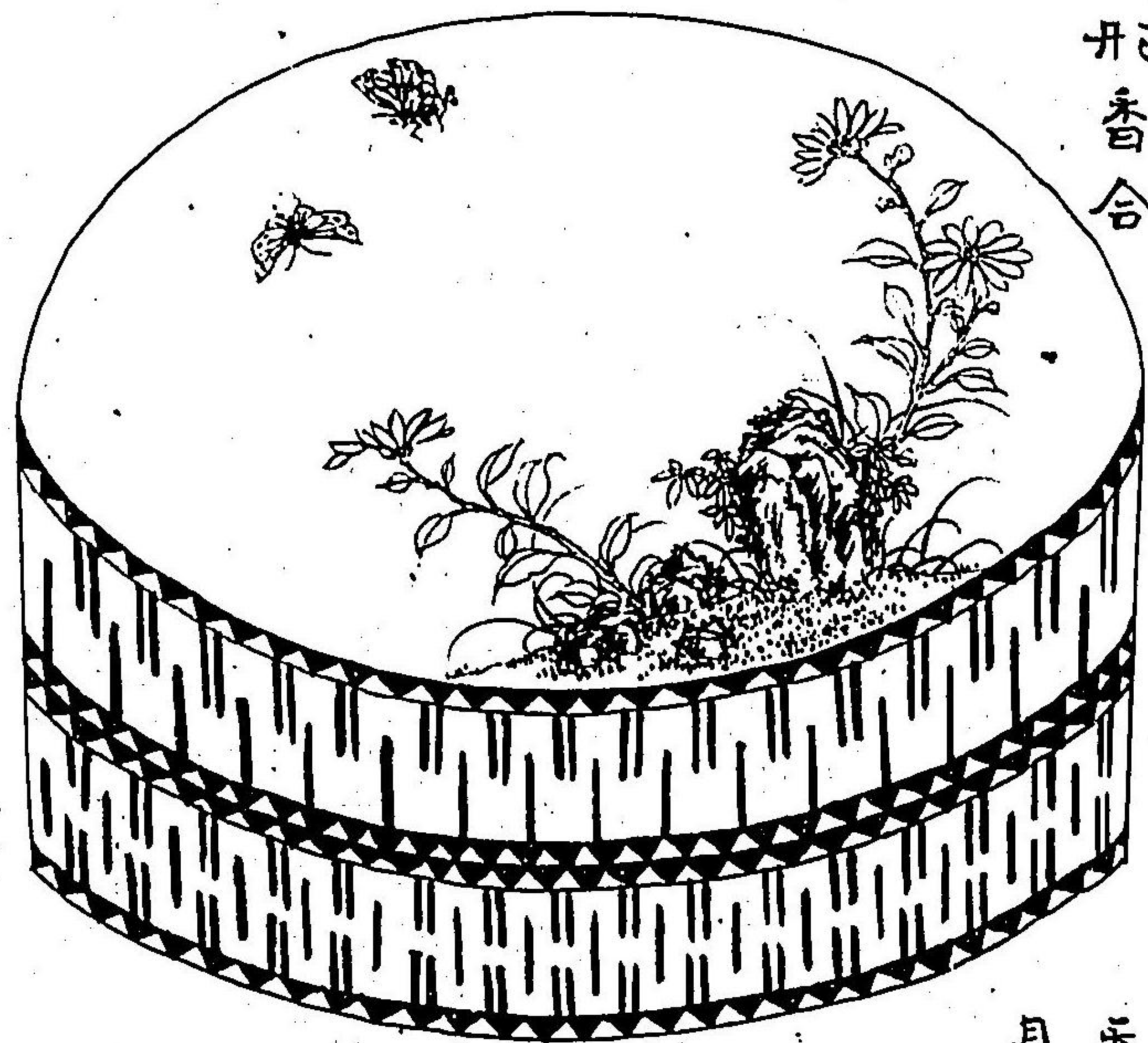
明和六年製
提重朱塗沈金



明和六年製
提重一式
朱塗沈金

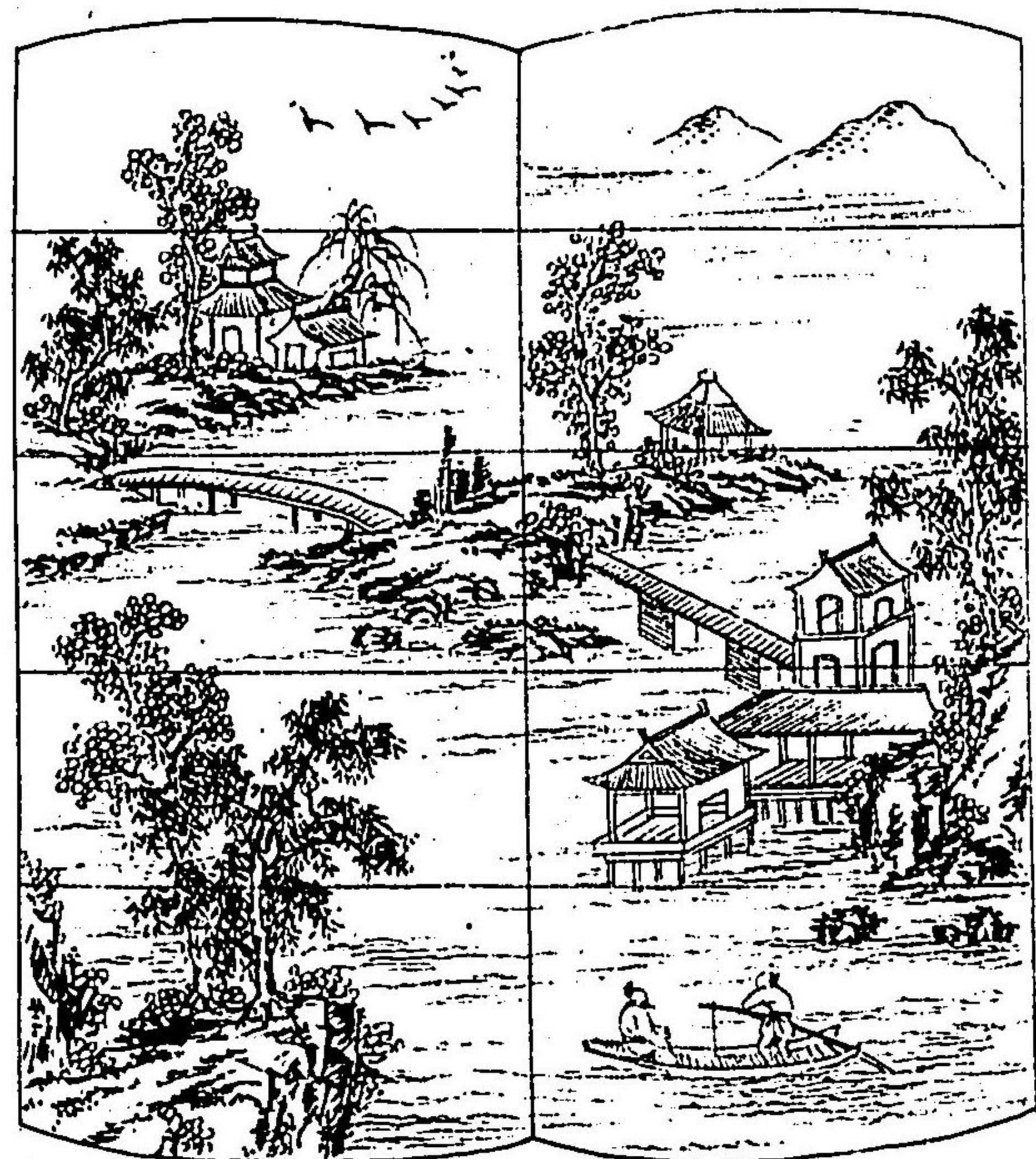
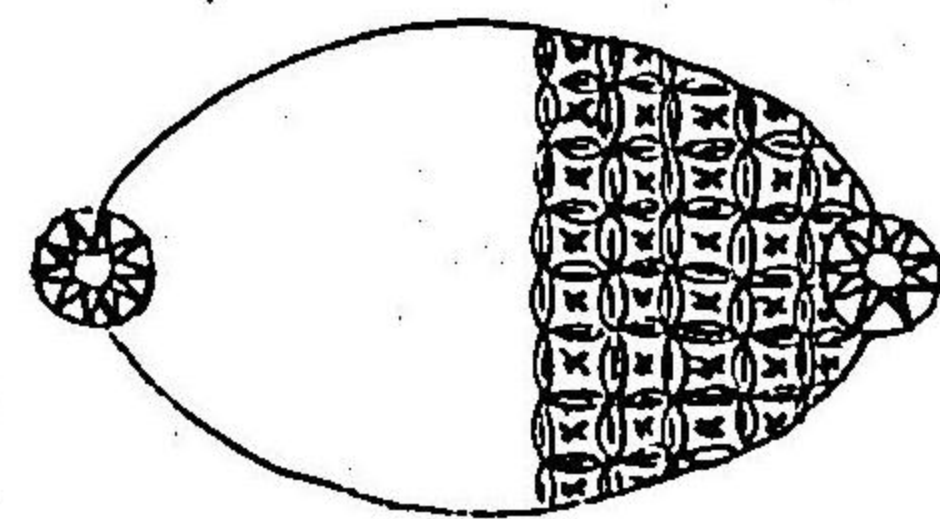


明和八年製
丸形香合



真塗蠟色青貝

天明六年製
貝摺印籠

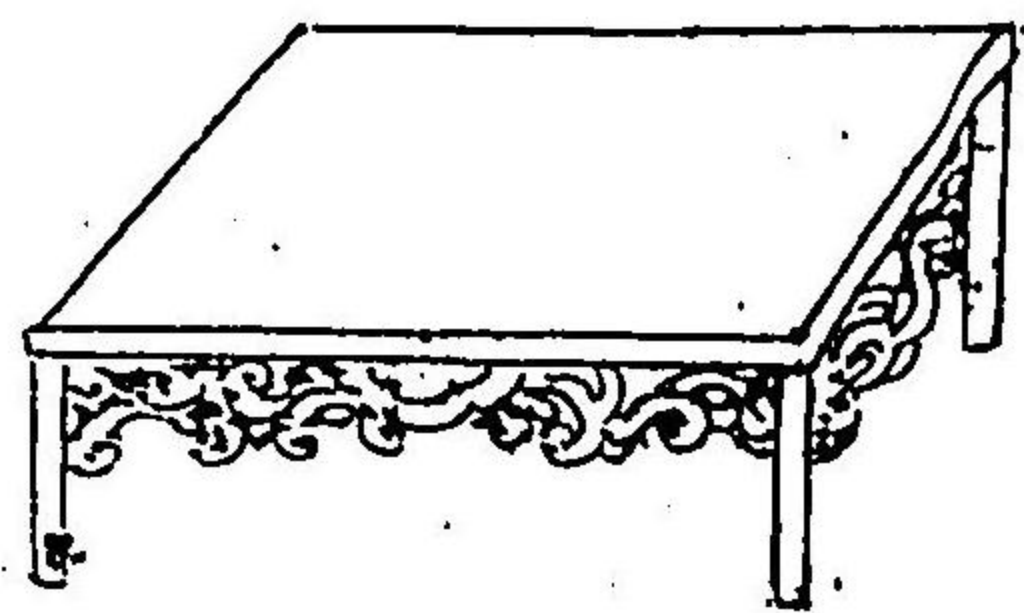
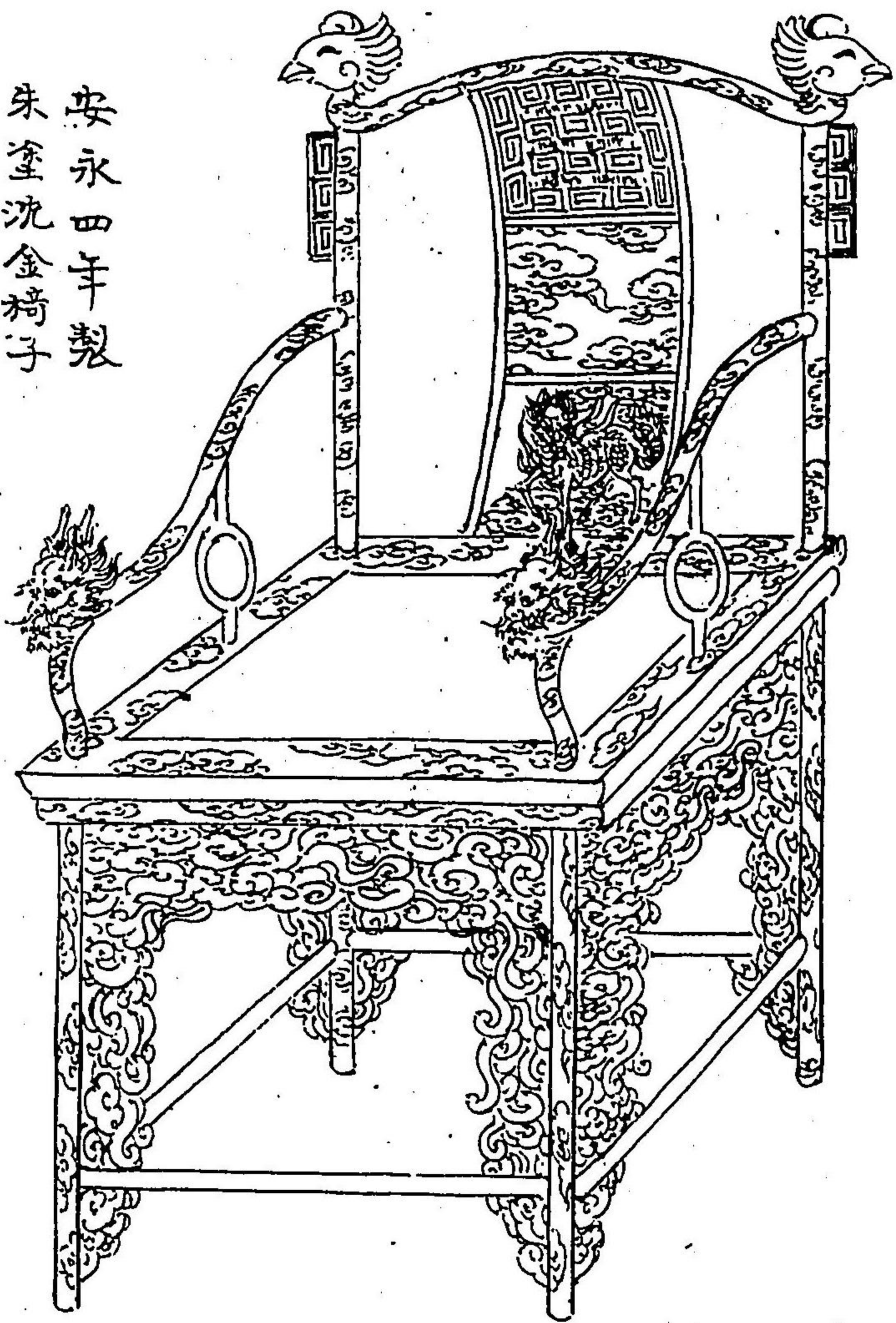


真塗蠟色青貝金貝入

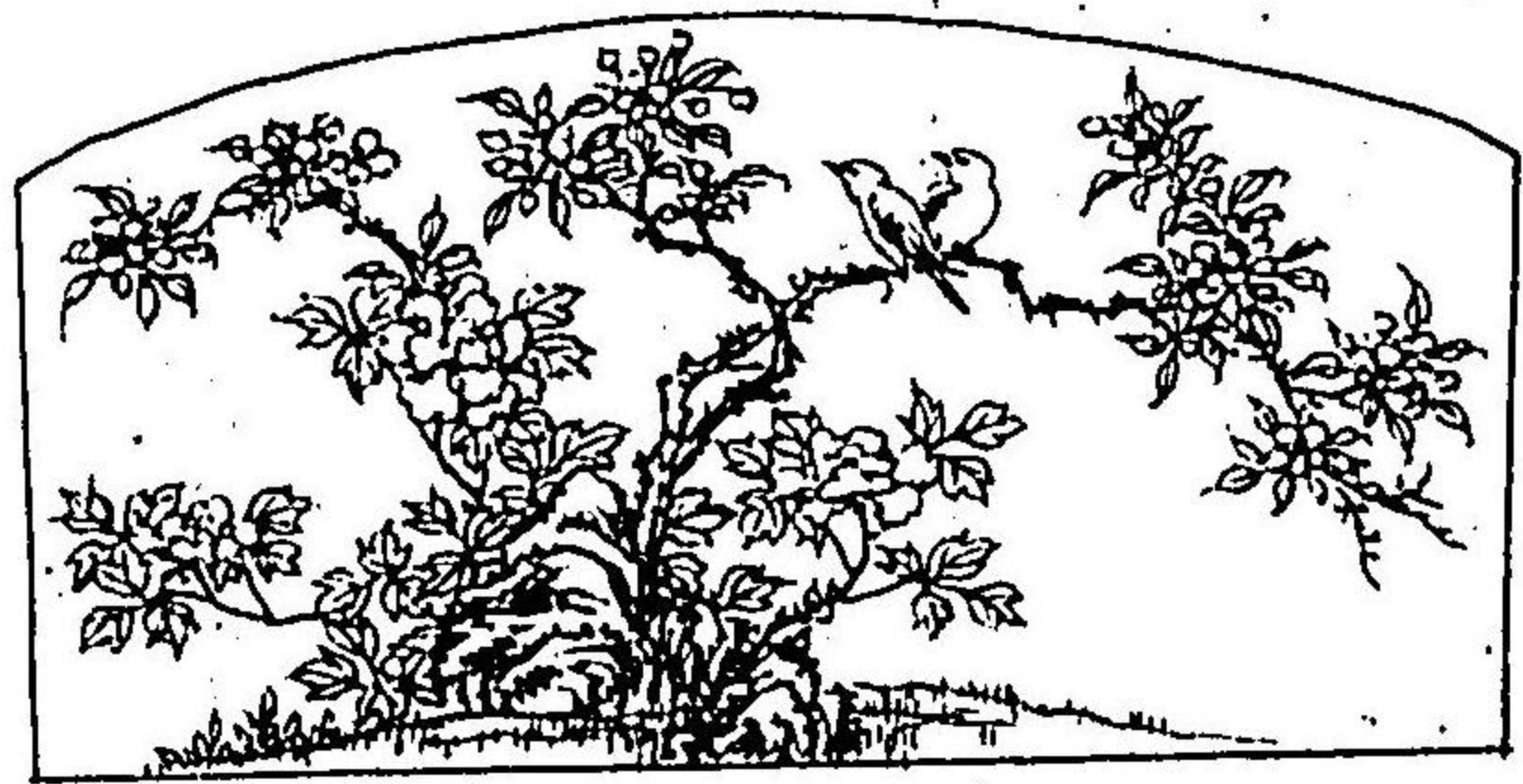
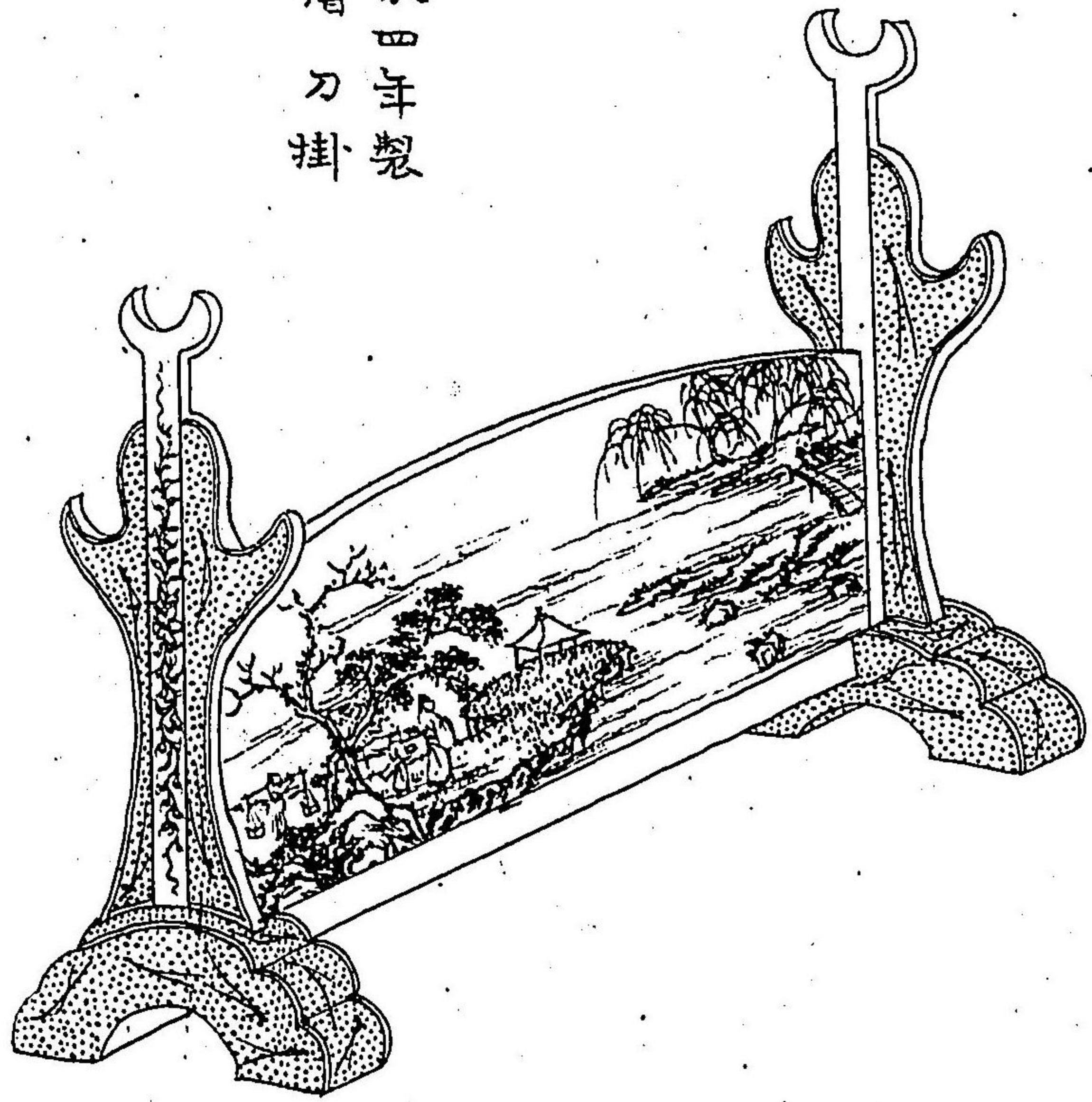
明和六年製
中形八角食籠
朱塗沉金

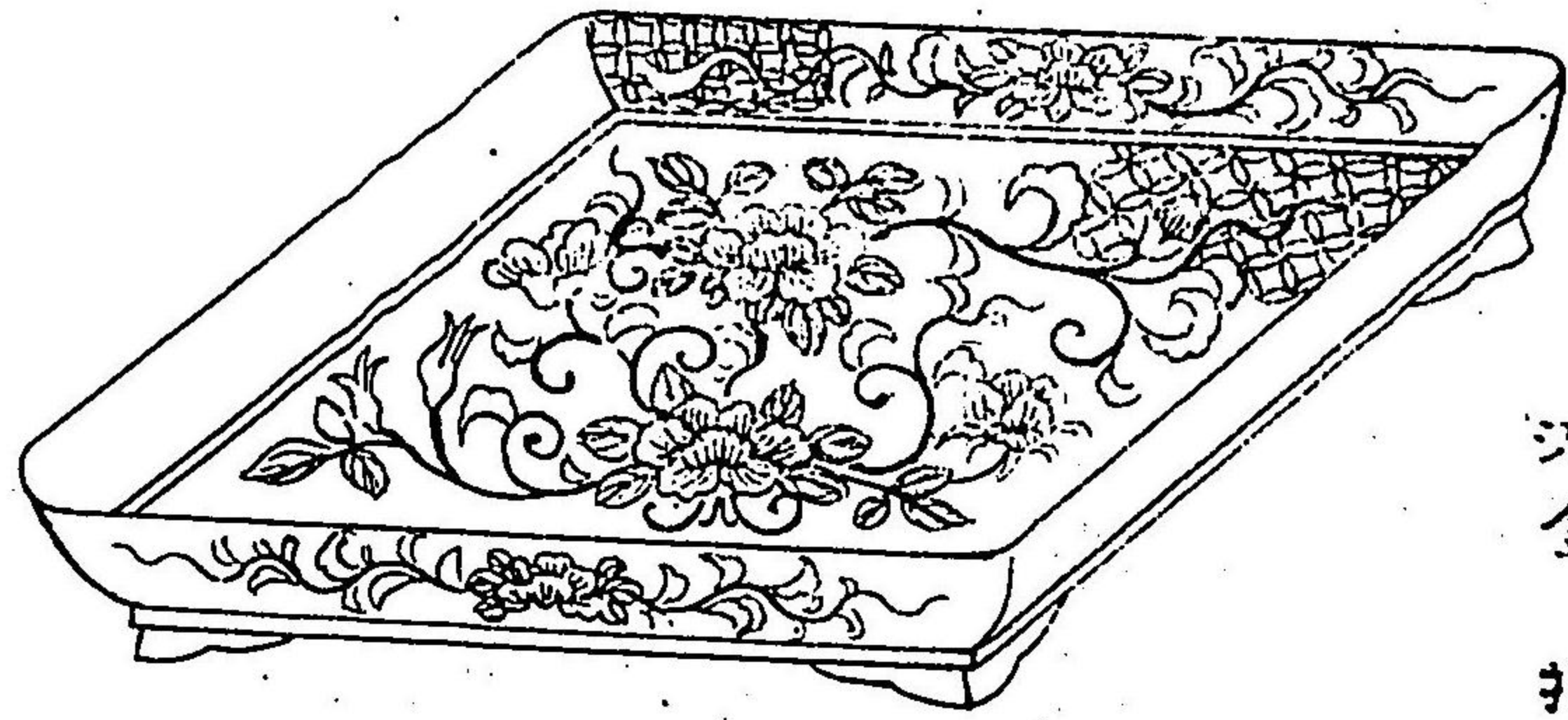


安永四年製
朱塗沈金椅子

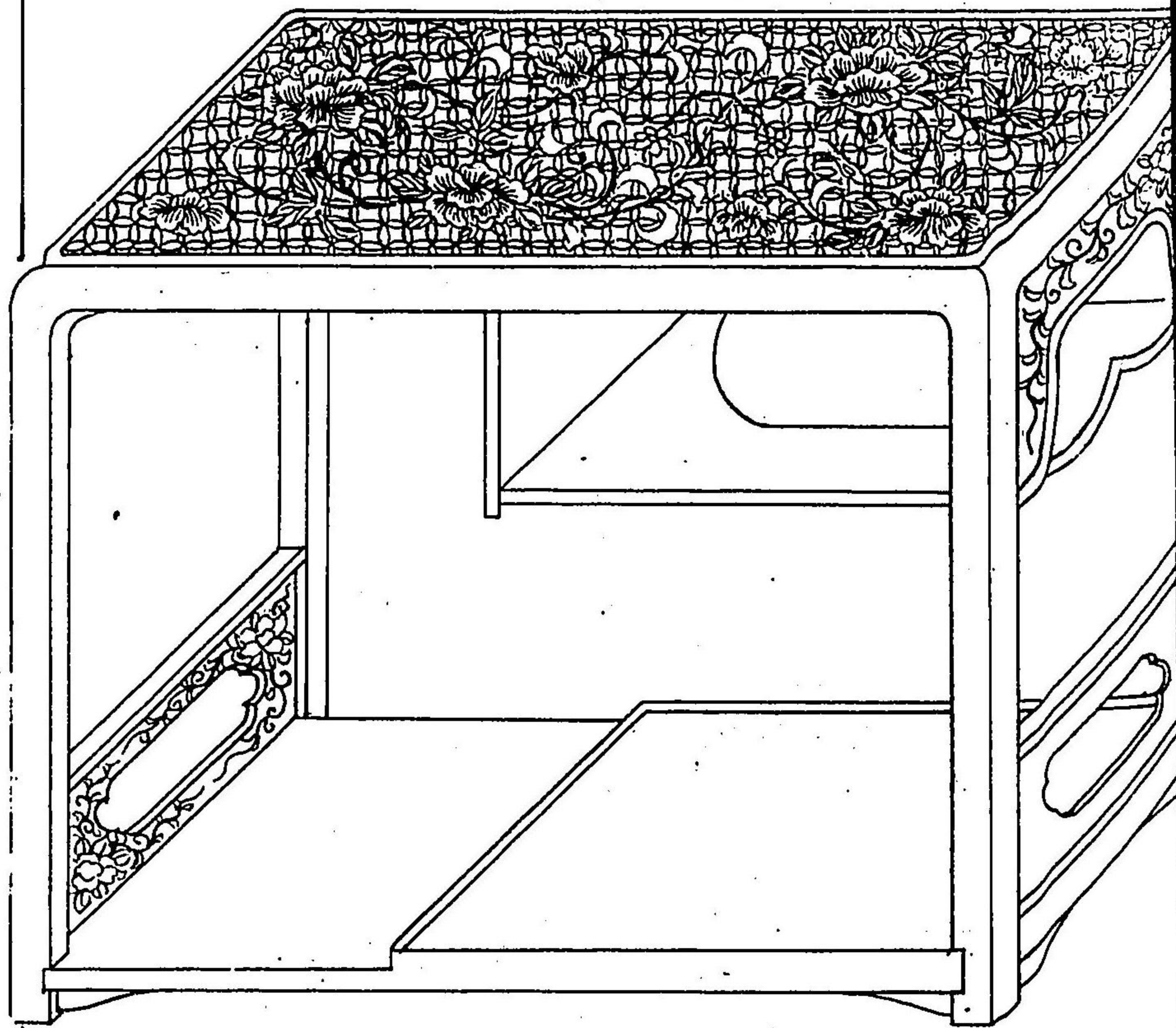


安永四年製
貝摺刀掛

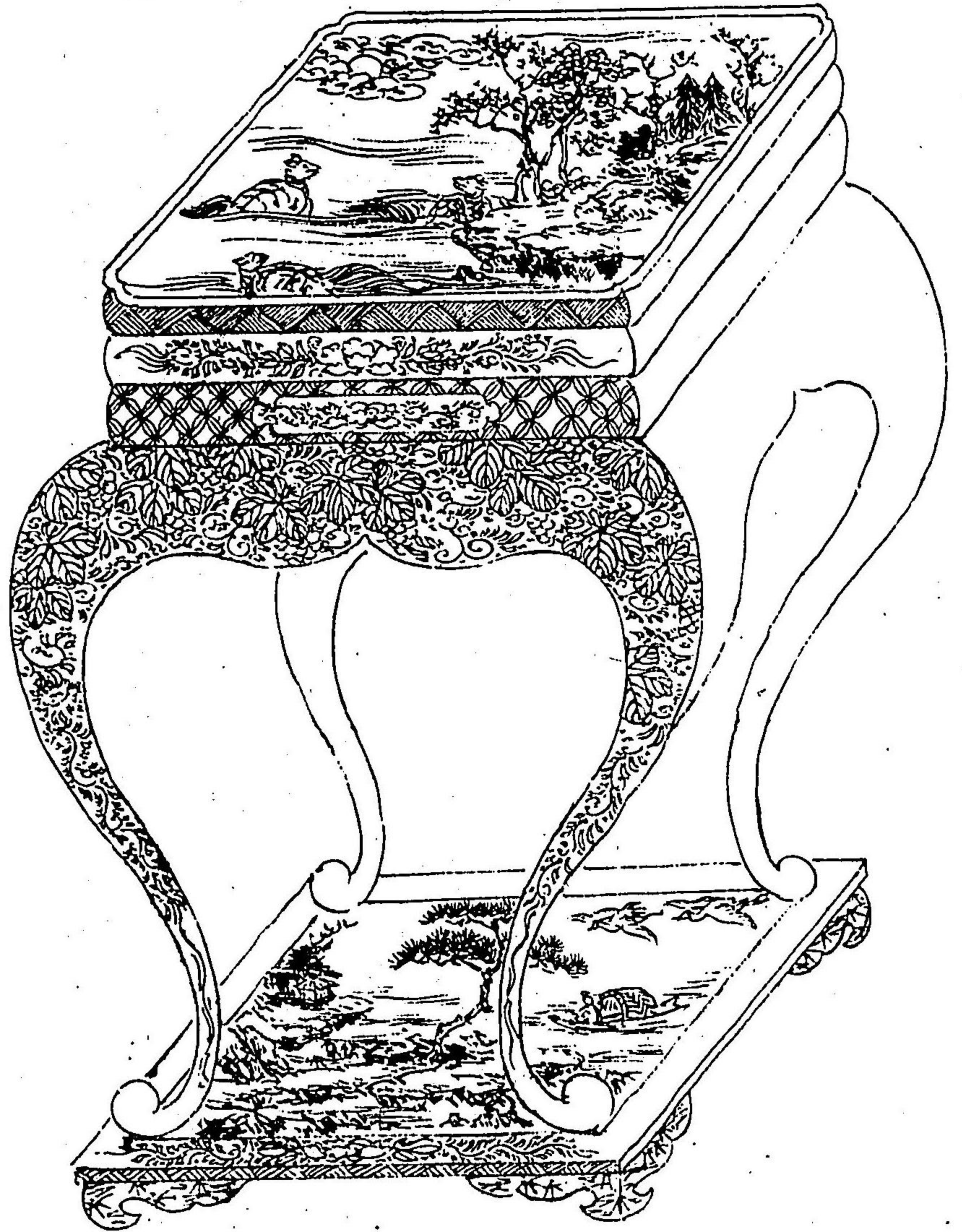


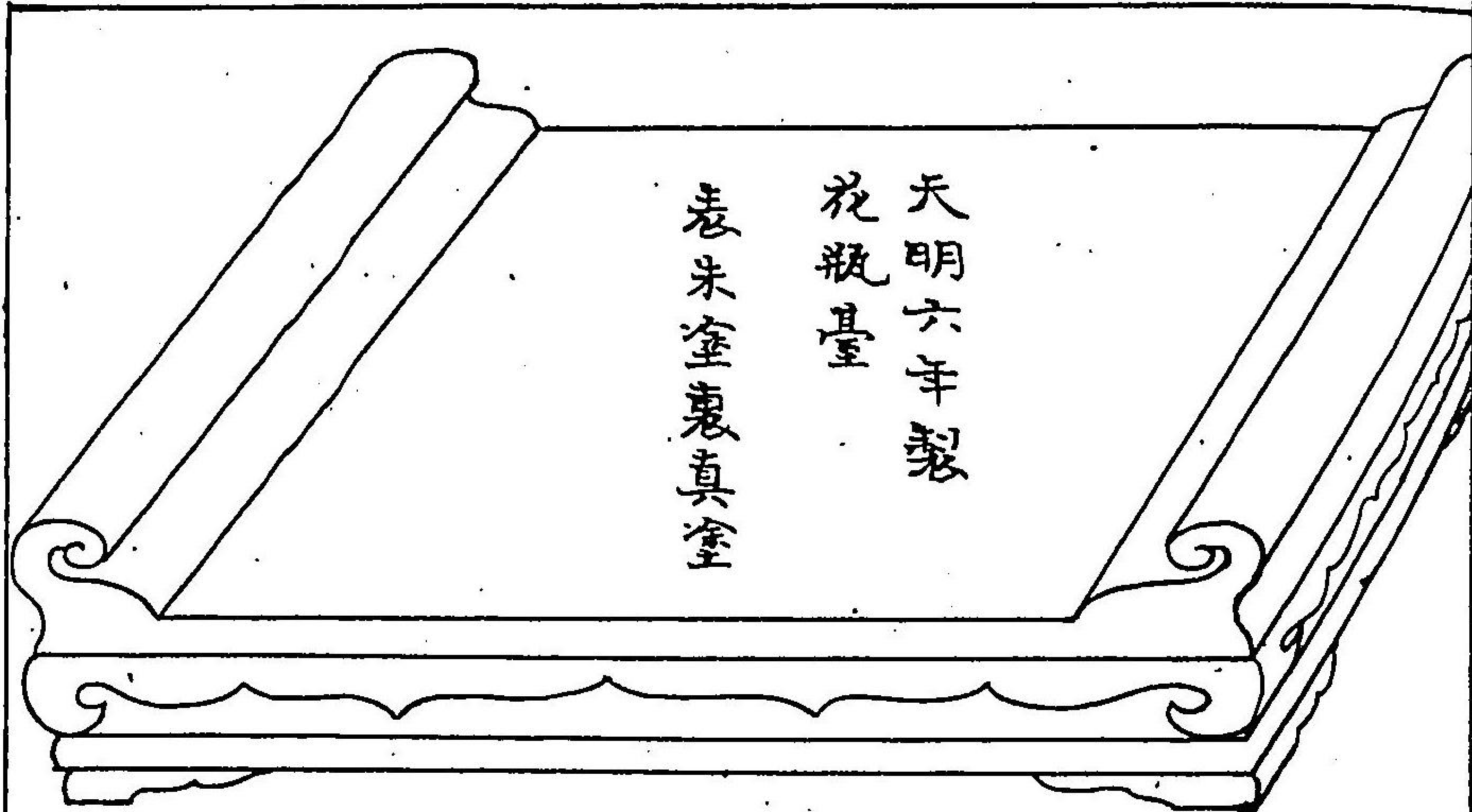


安永四年製
沉金提重

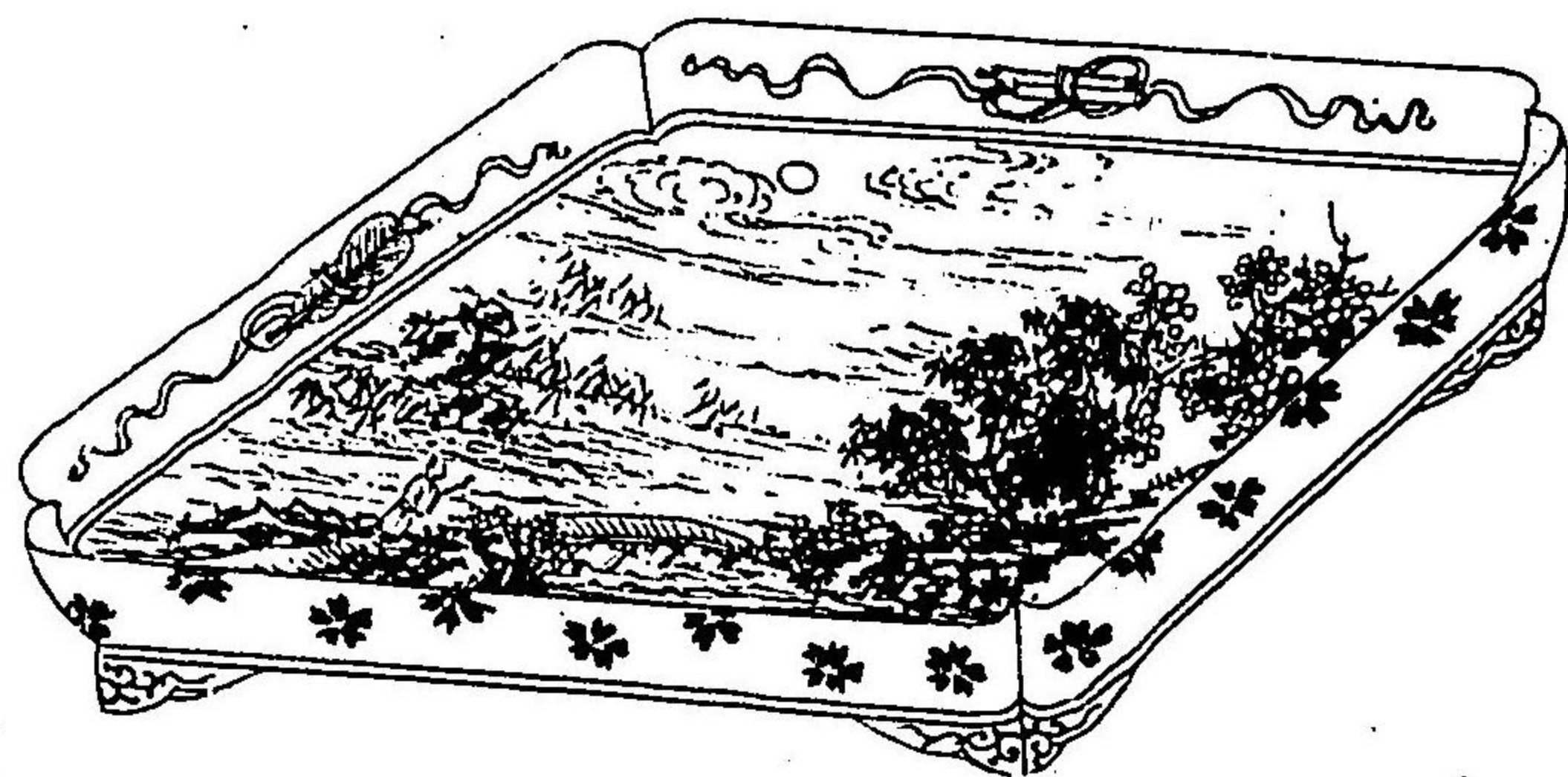


安永四年製
沈金中央卓



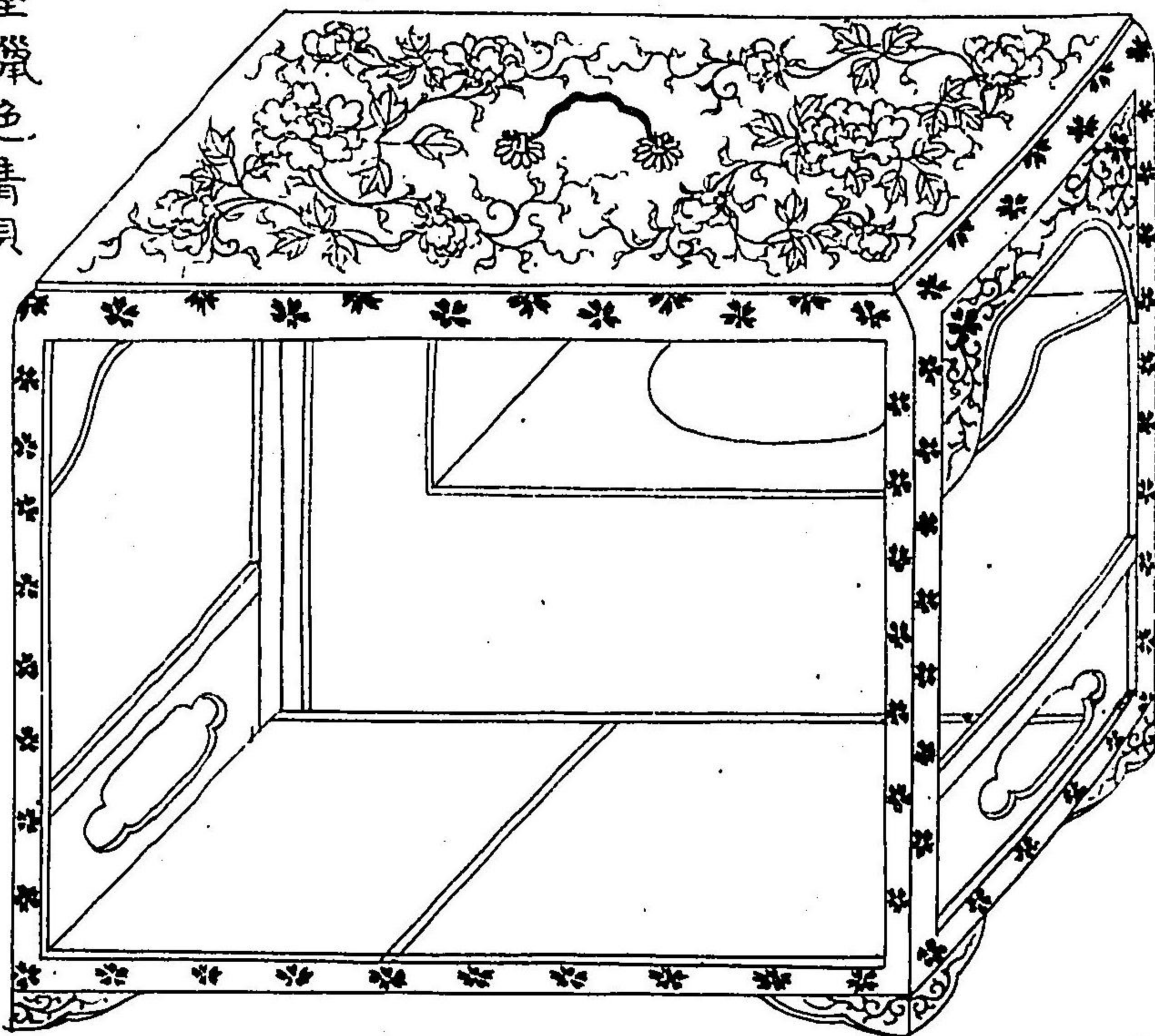


天明六年製
花瓶臺
表朱塗裏真塗



寛政三年製
提車

真塗蠟色青貝

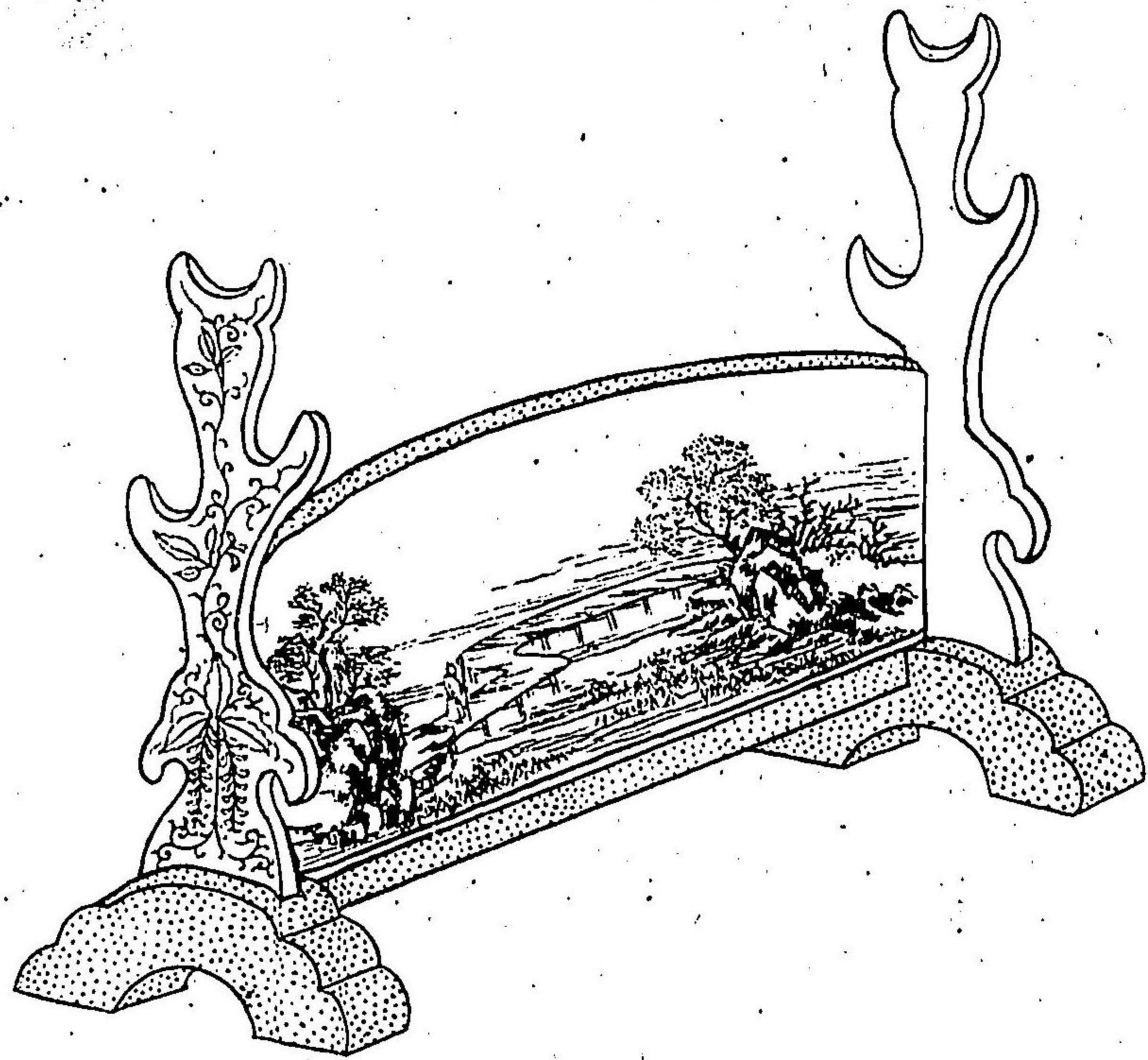


寛政三年製
太刀掛

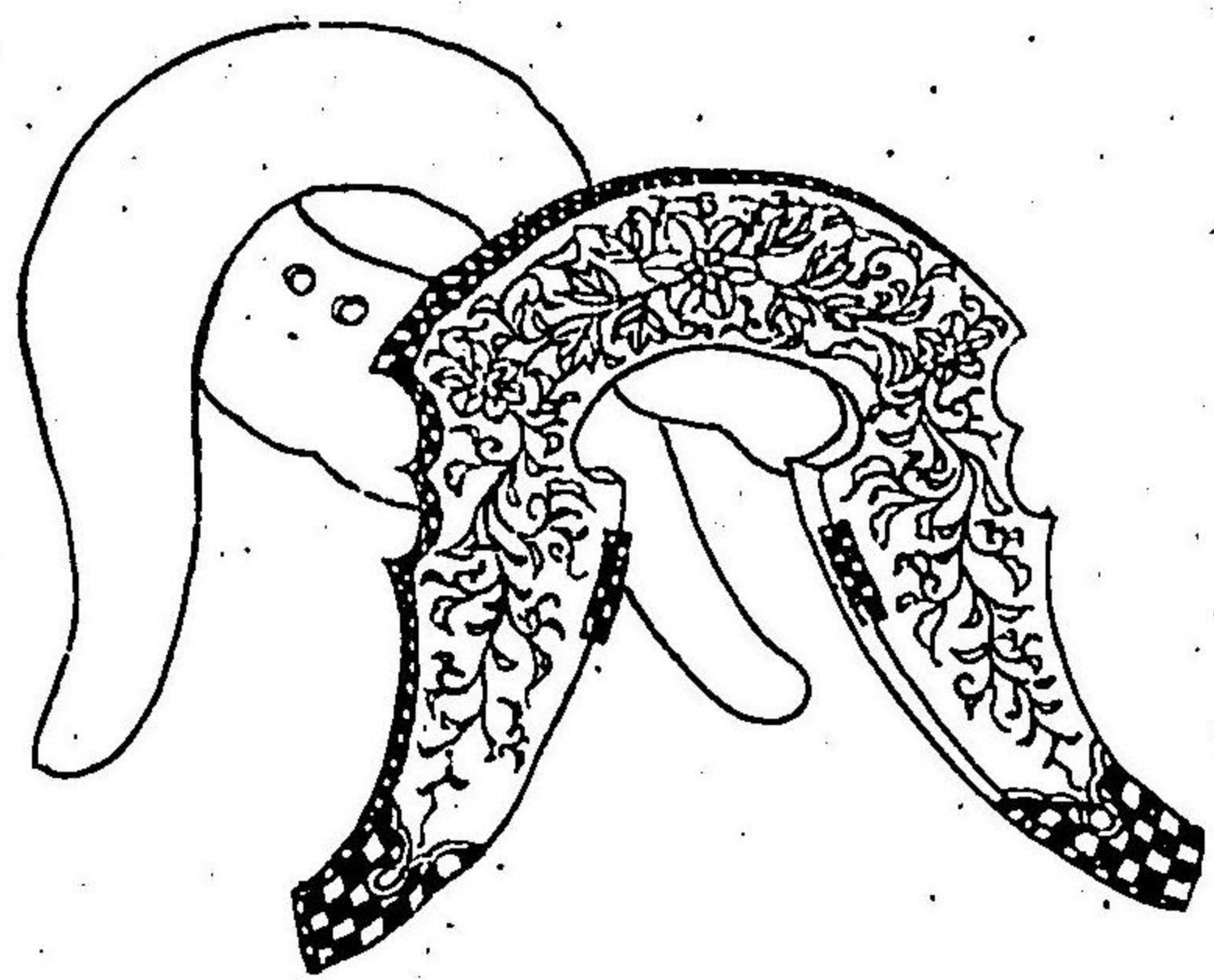
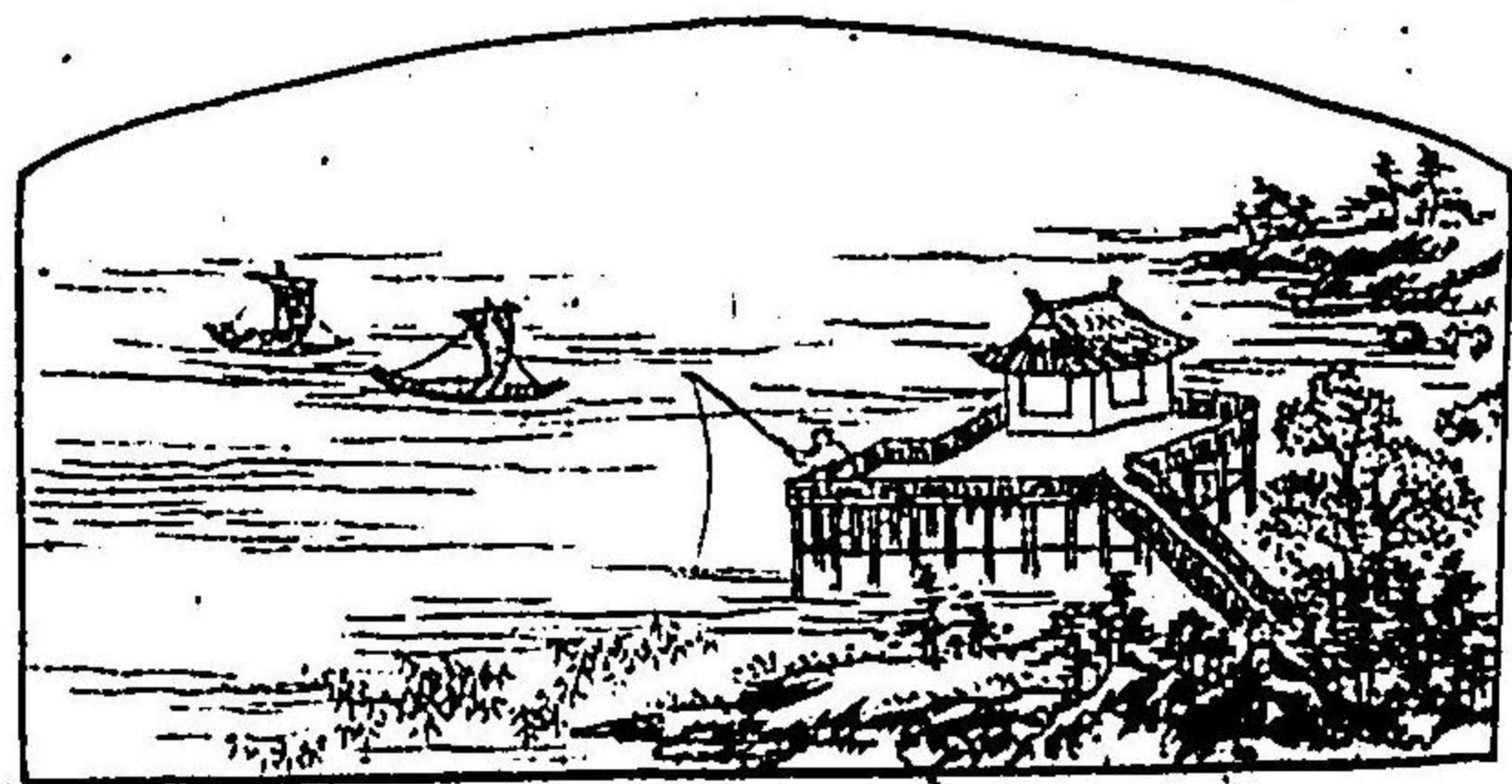


真塗蠟色青貝

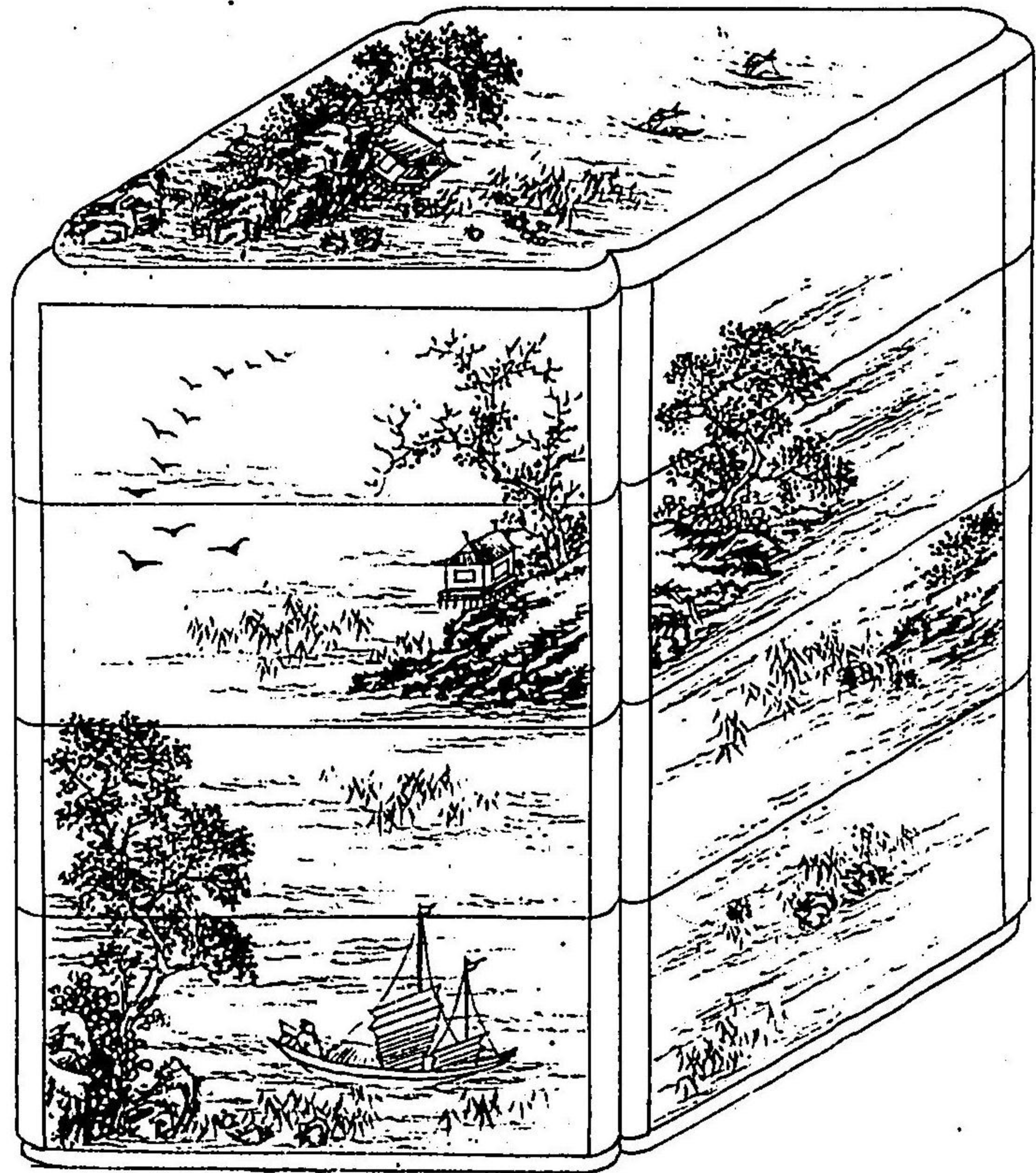
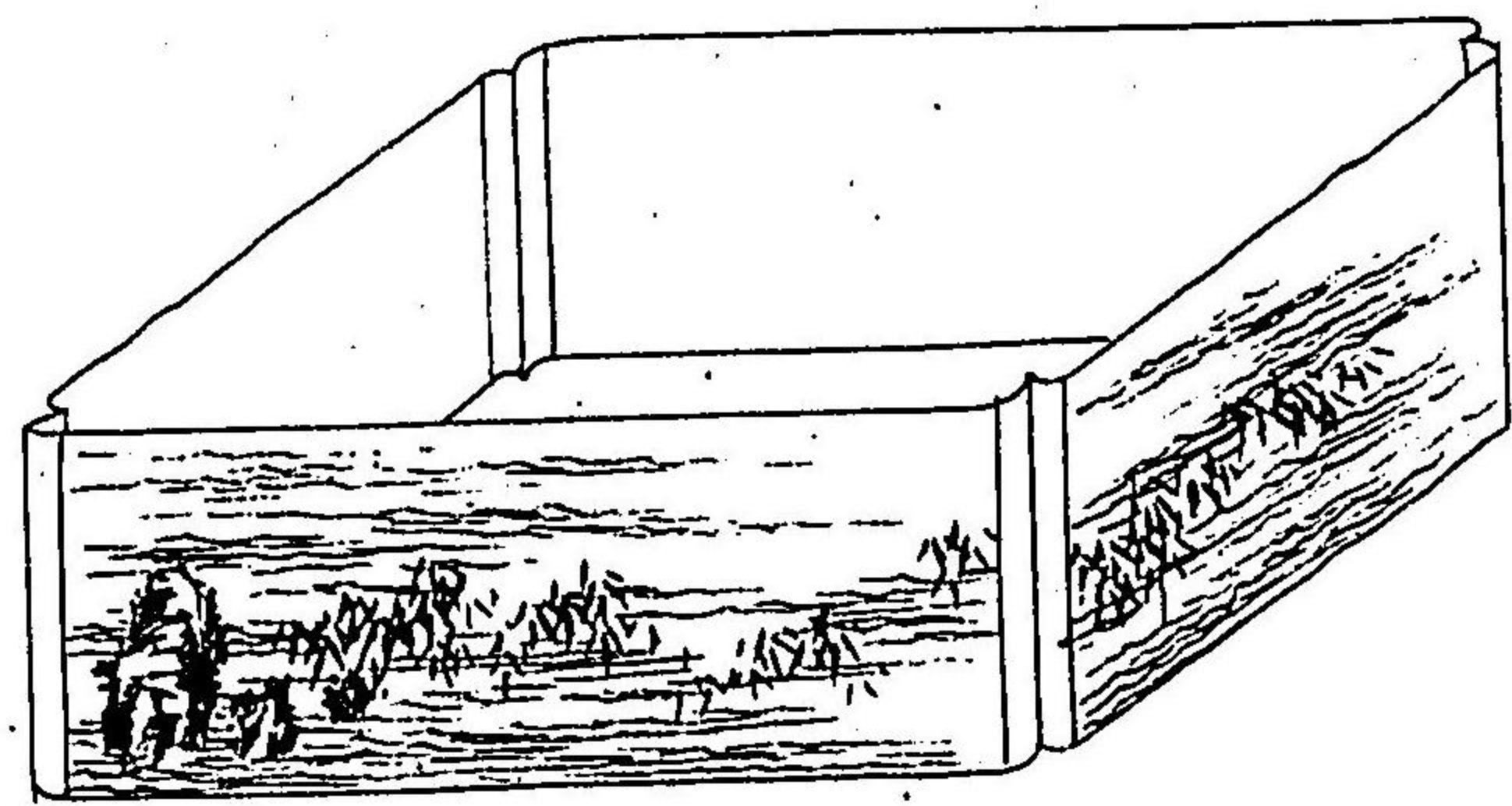




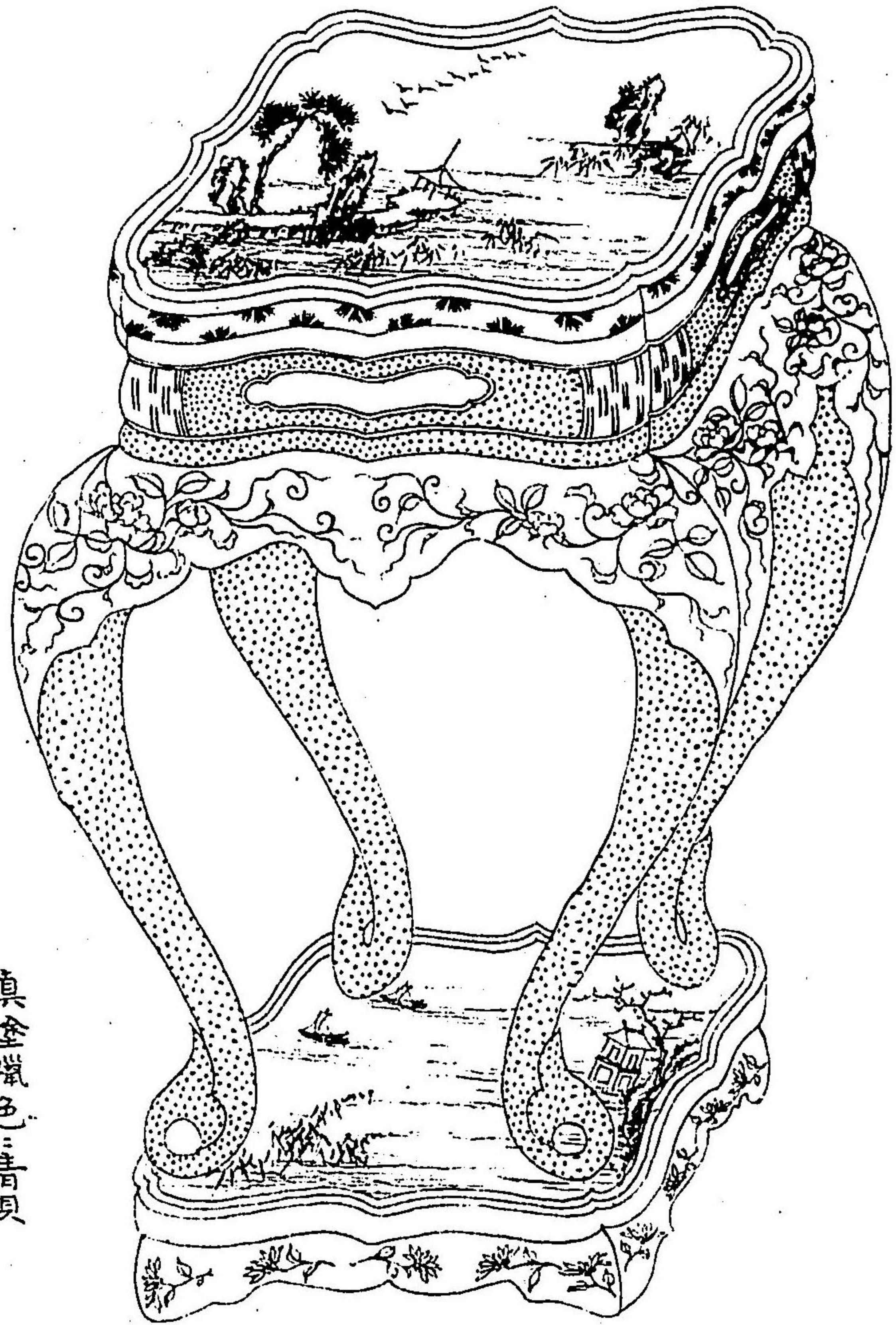
天保十三年製 貝摺刀掛



明治二年製
貝摺 鞍

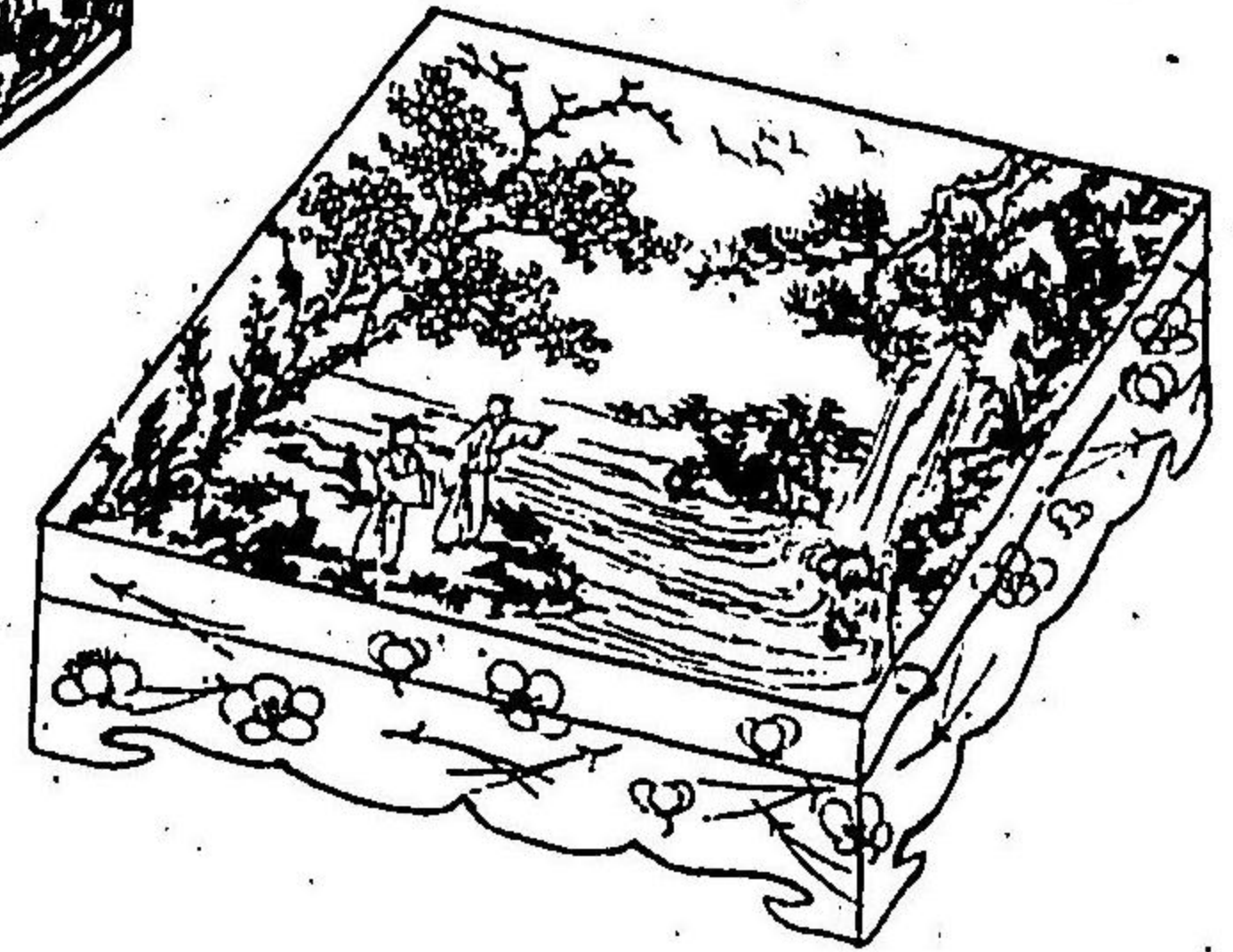


天保三年製
大形中央卓

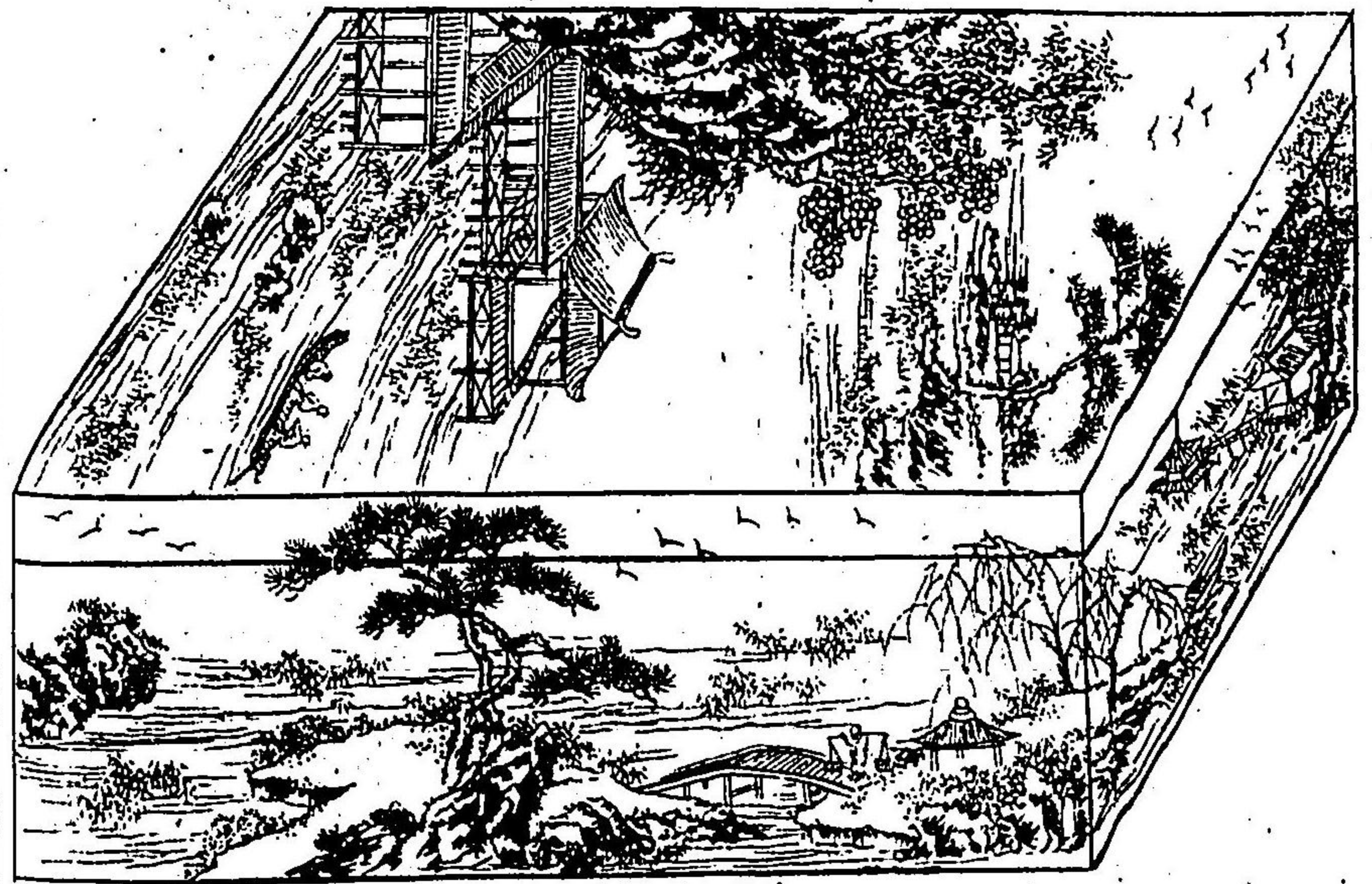


真塗蠟色青貝

天保十三年製
堆金香合



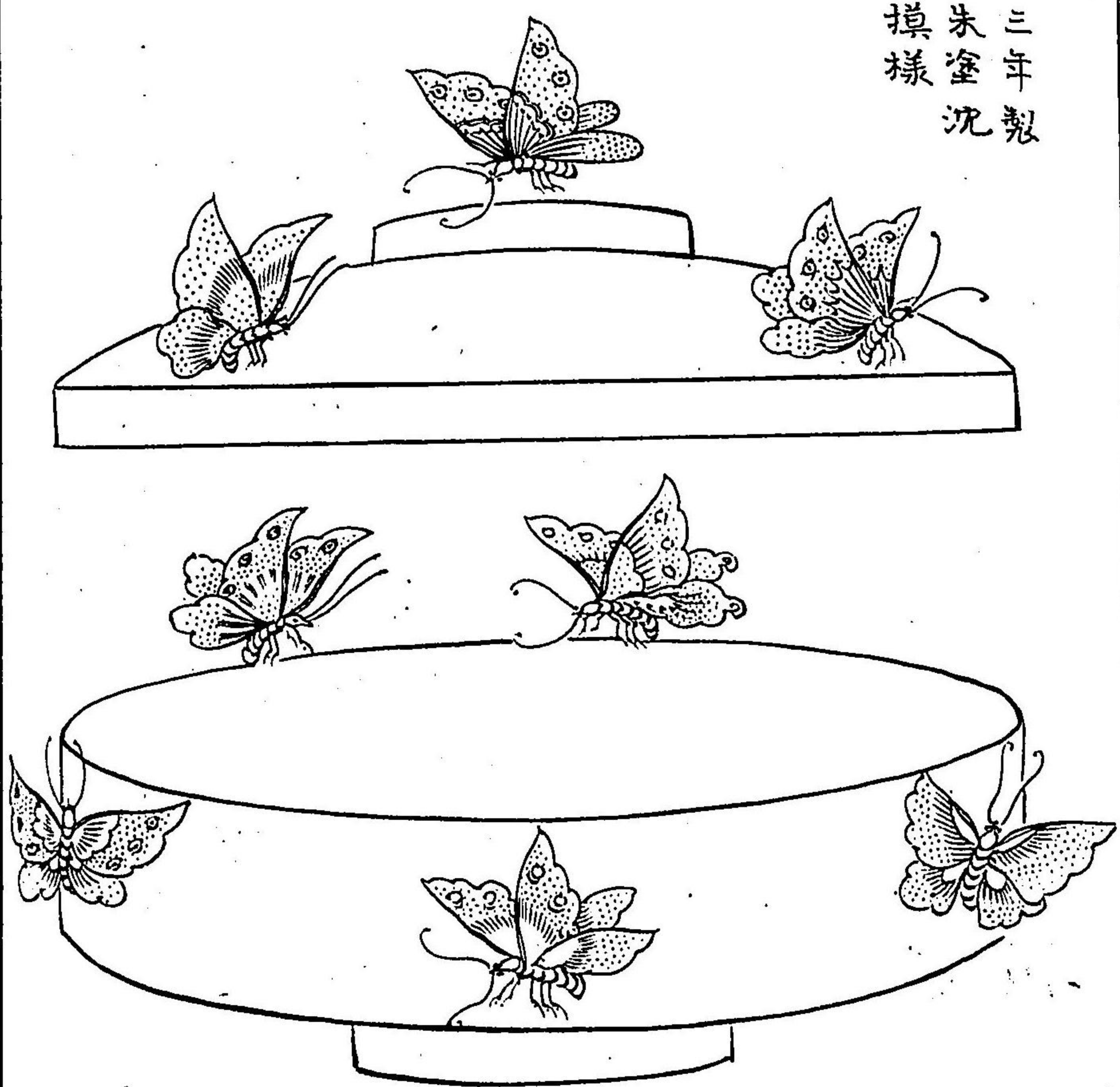
明治二年製
朱塗沈金料
紙箱



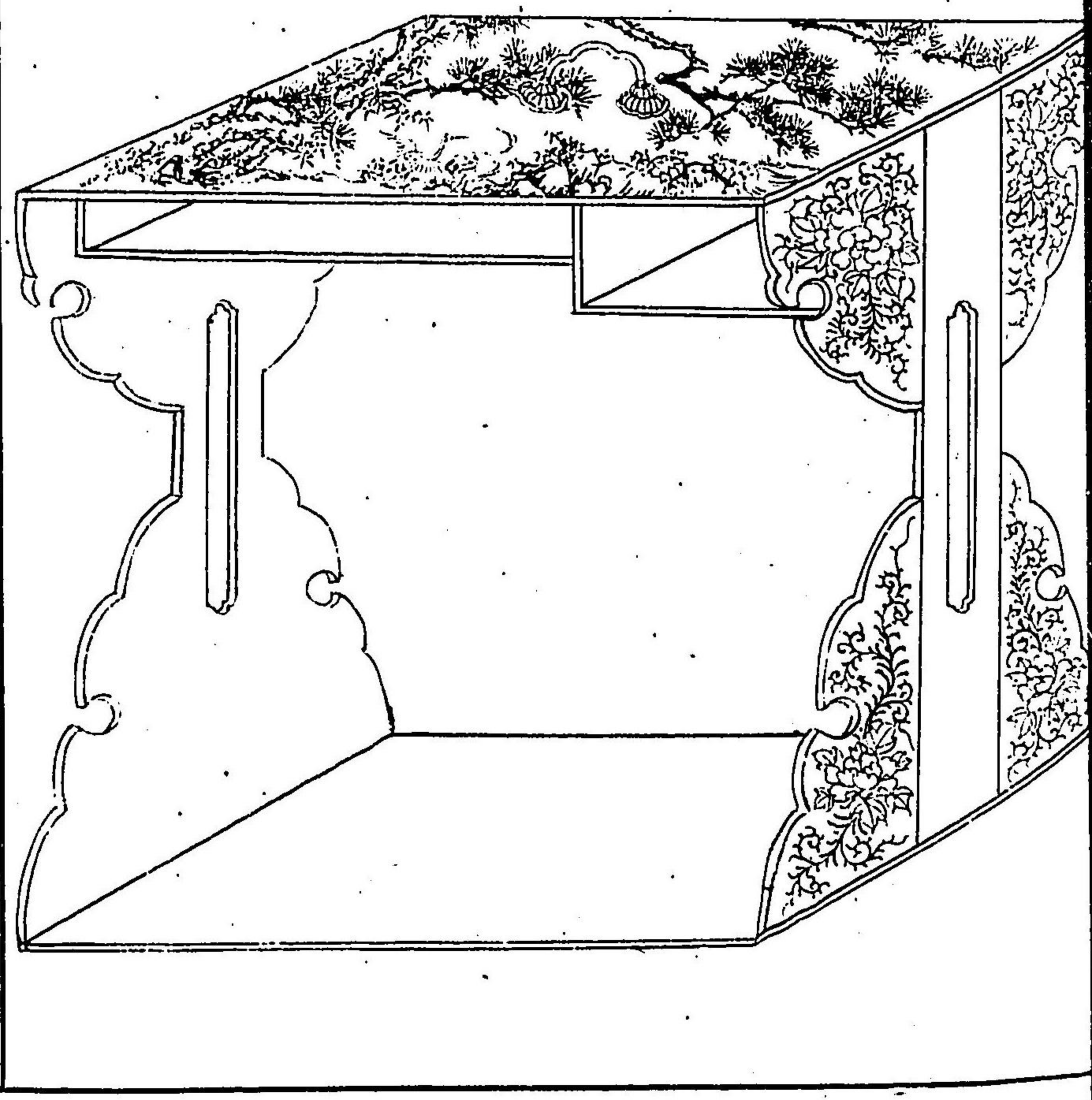
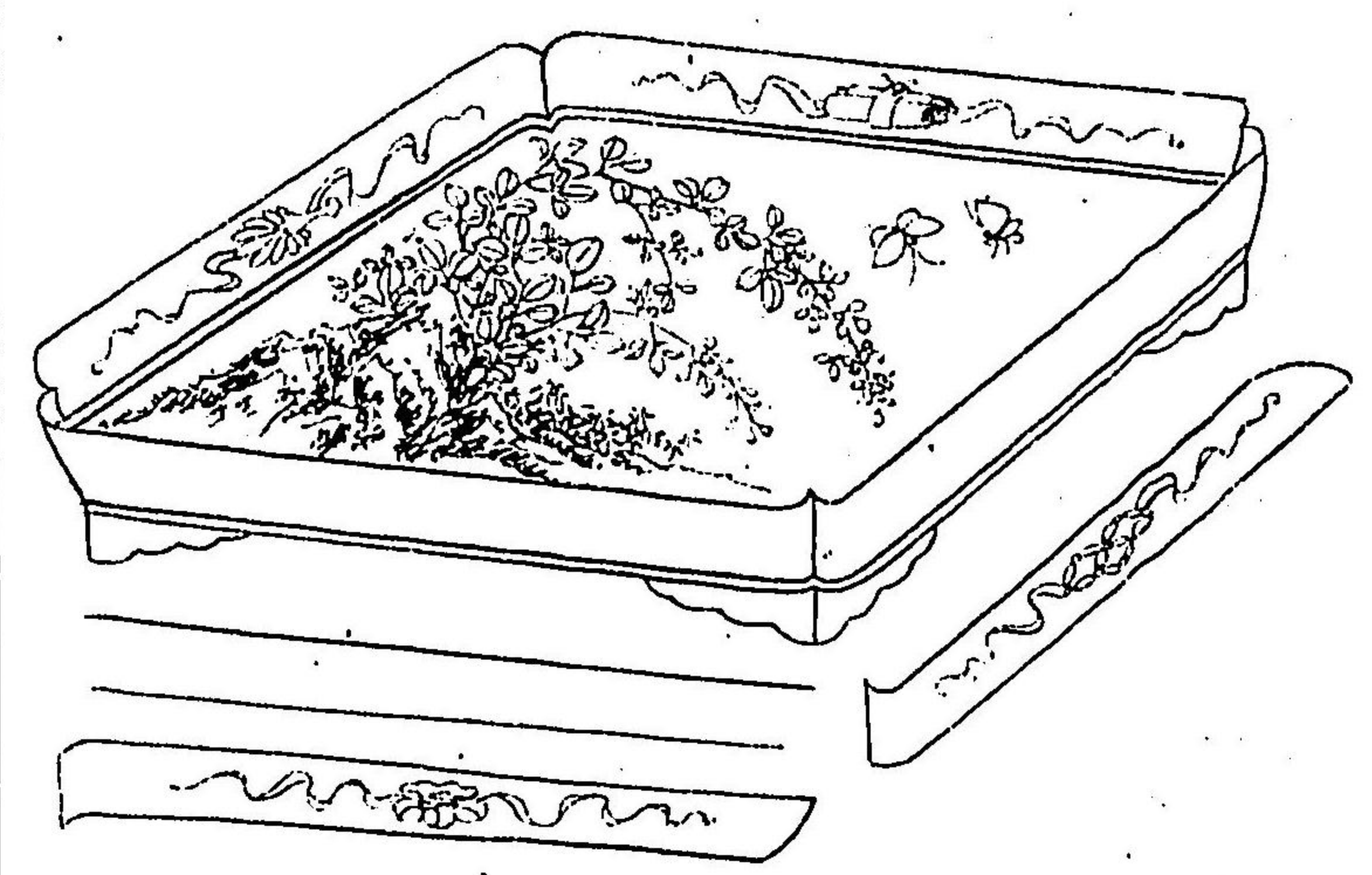
天保十三年製
貝摺燒香箱



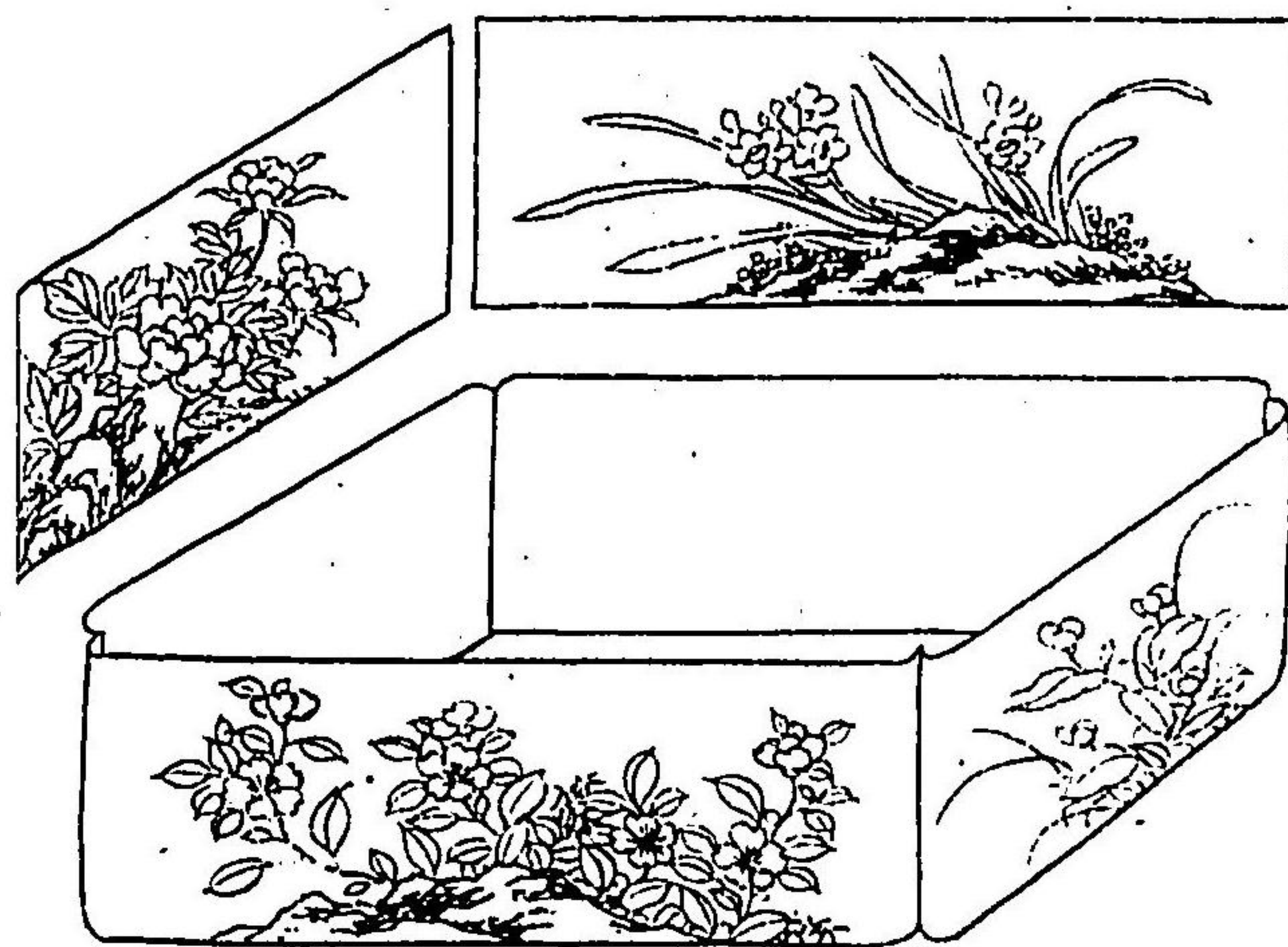
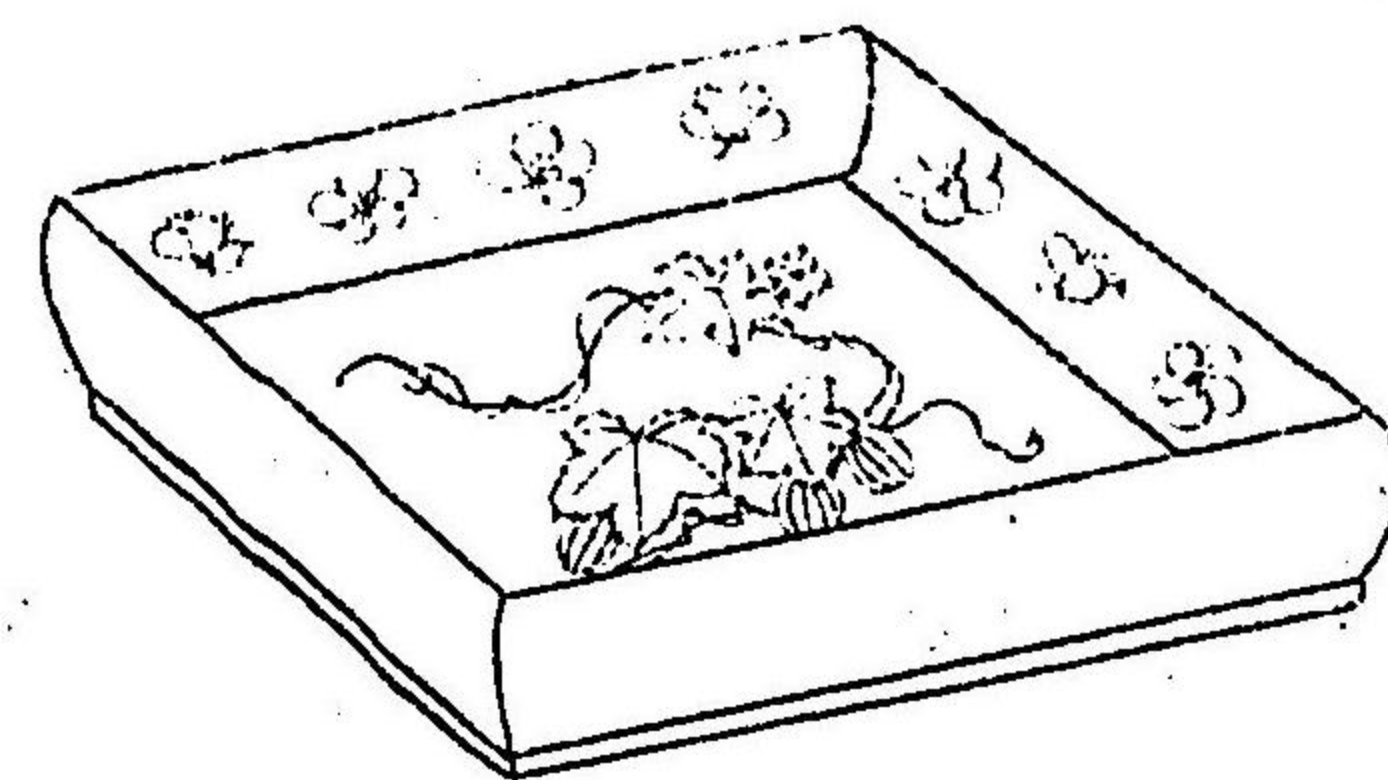
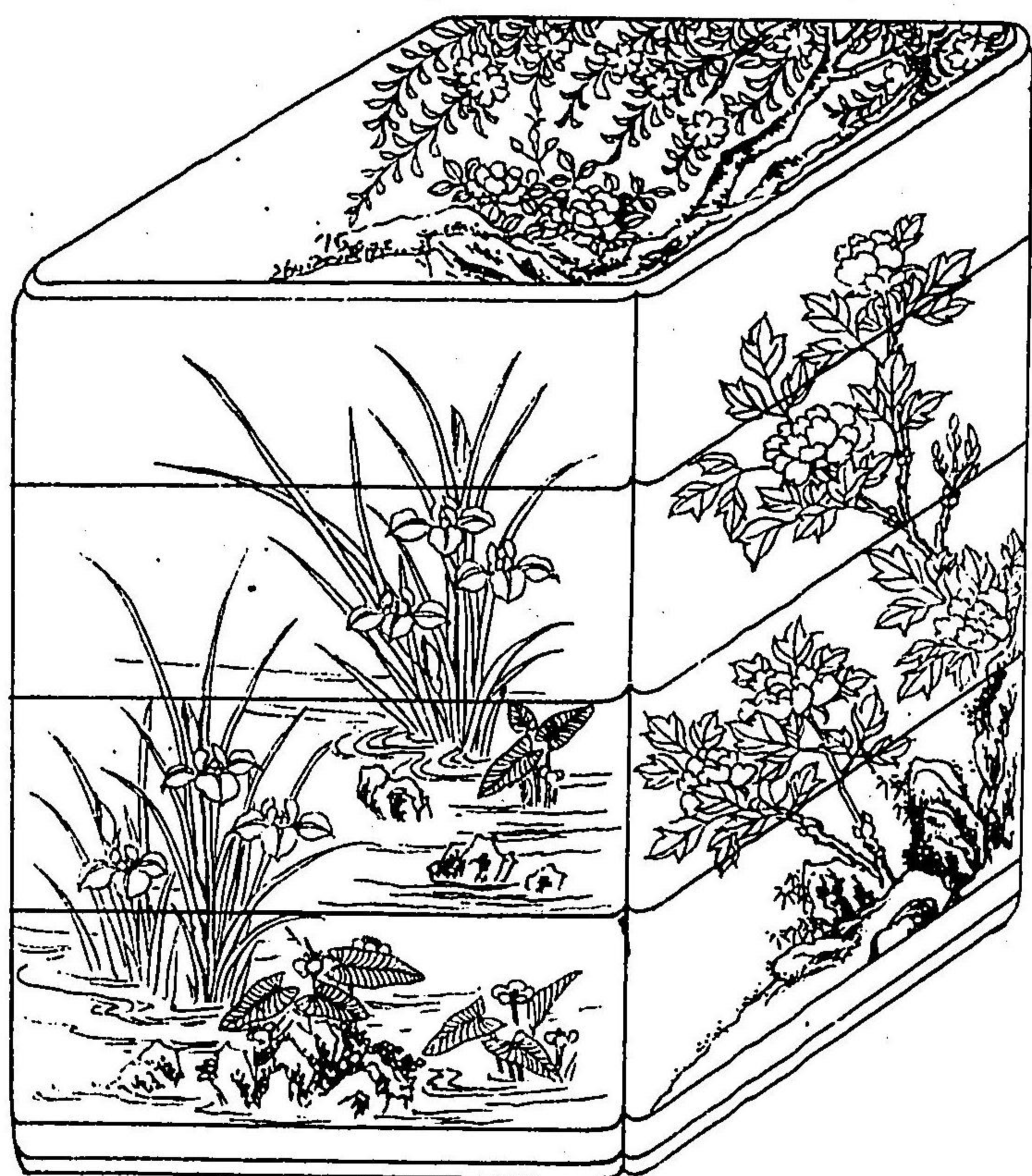
弘化三年製
天平朱塗
金蝶模様



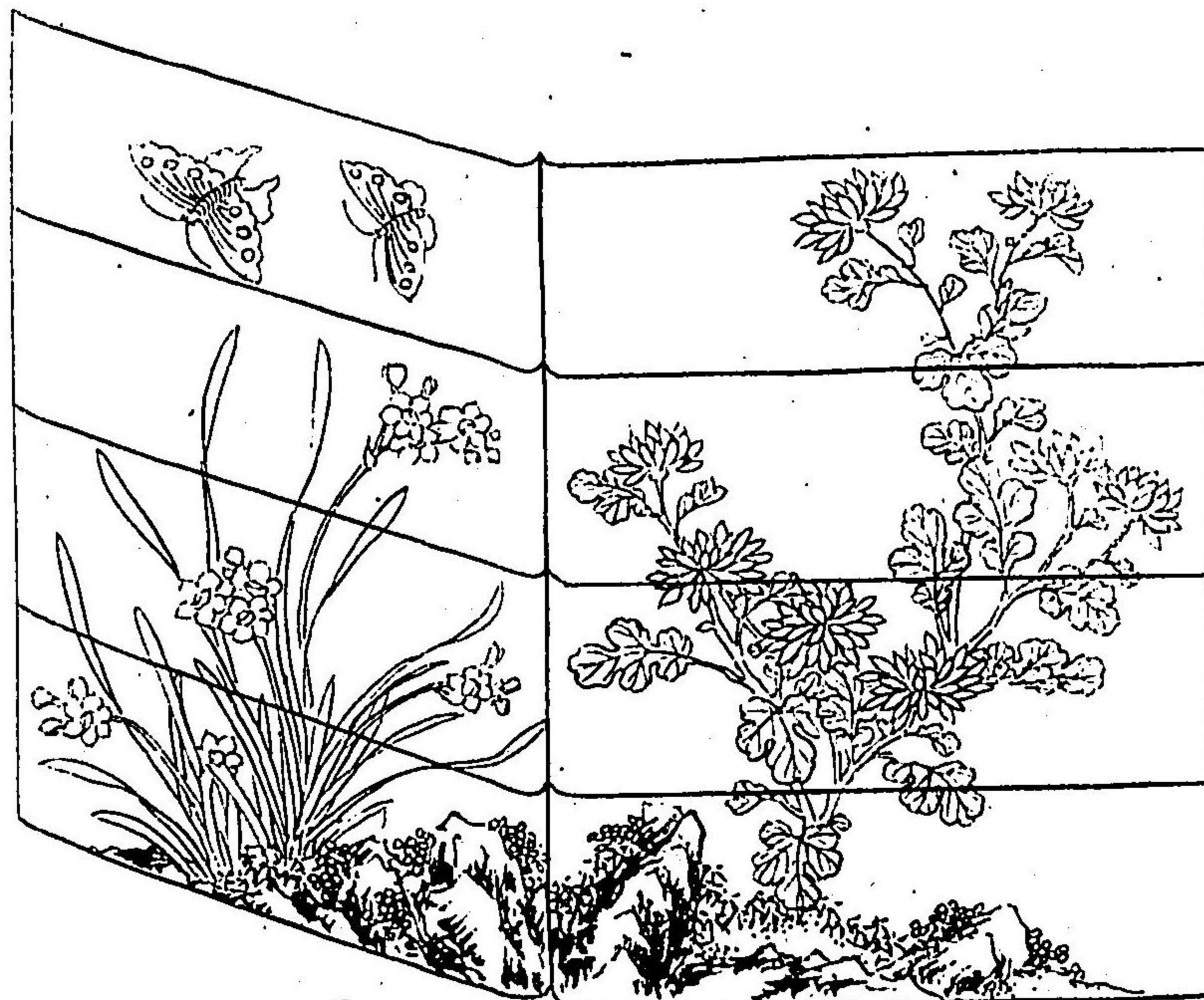
天保十三年製
真塗青貝摺重



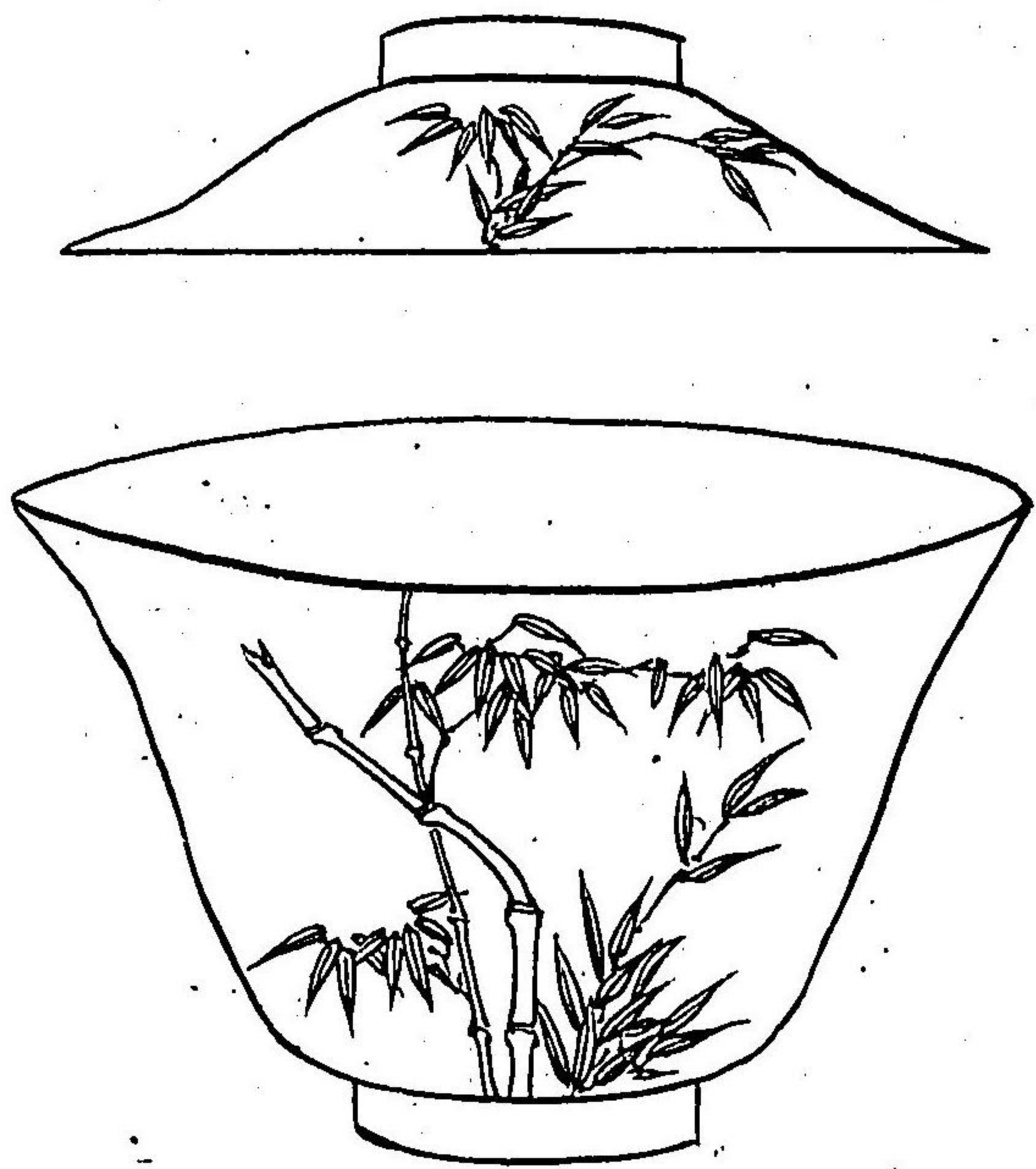
其三



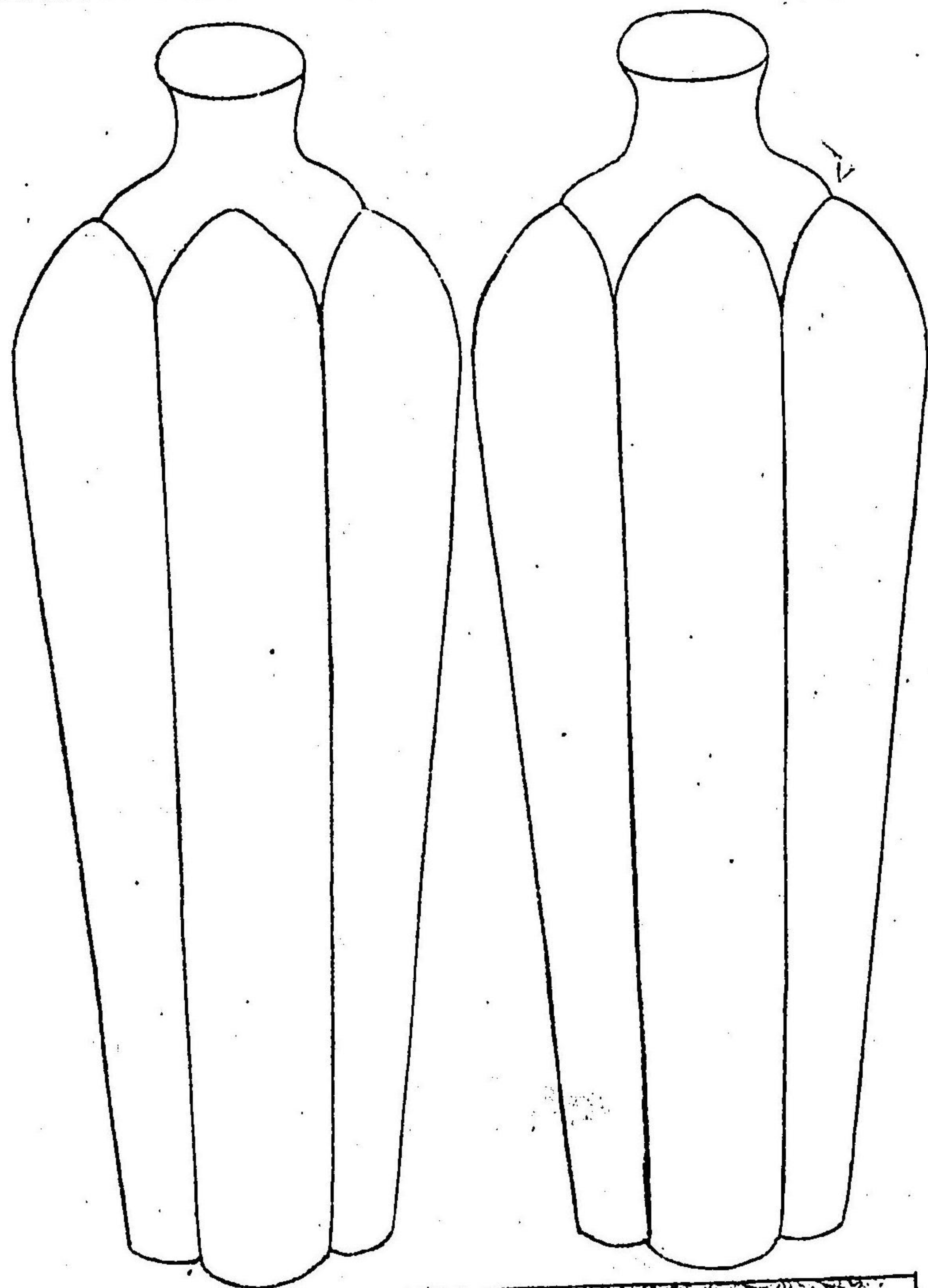
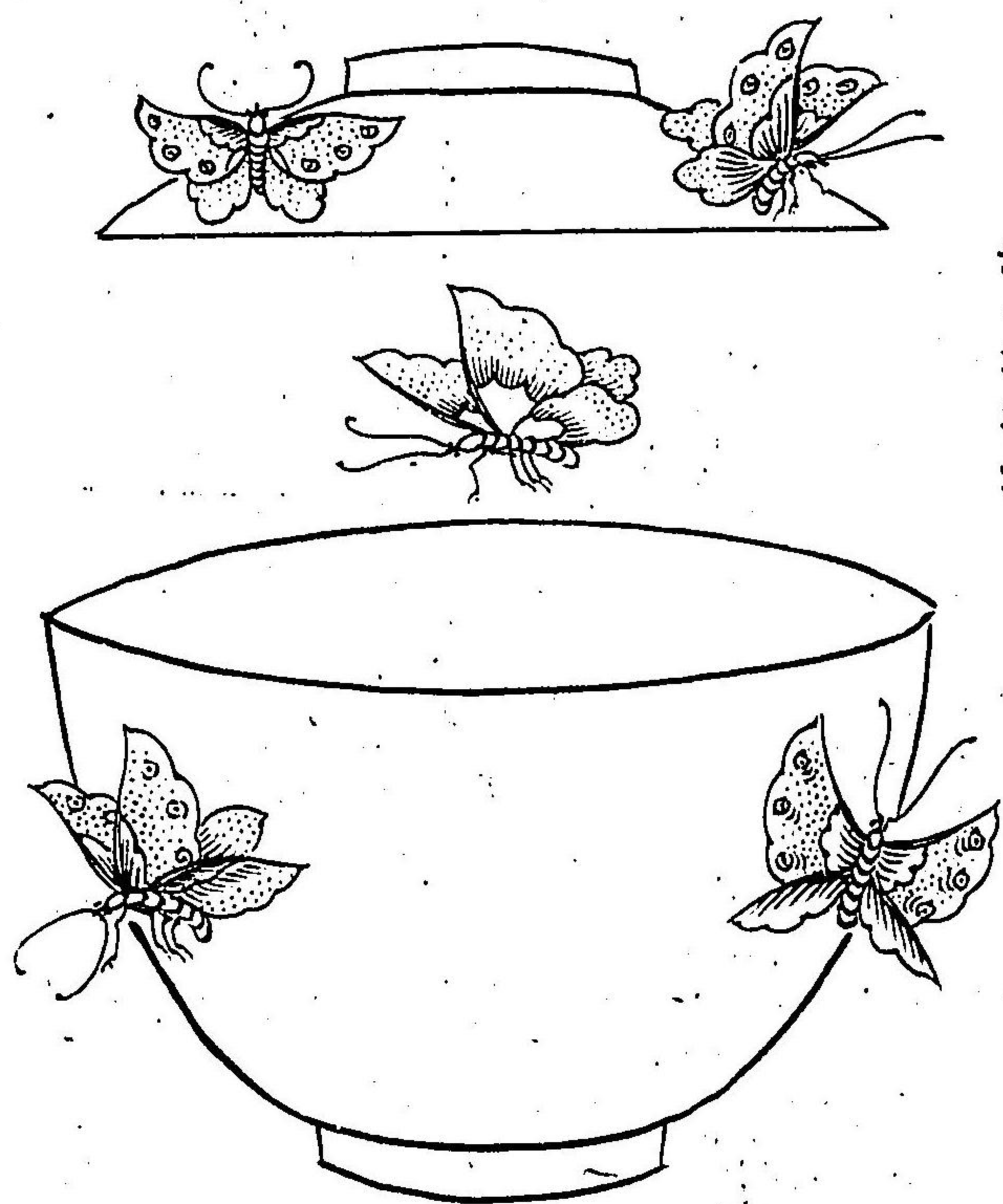
其二



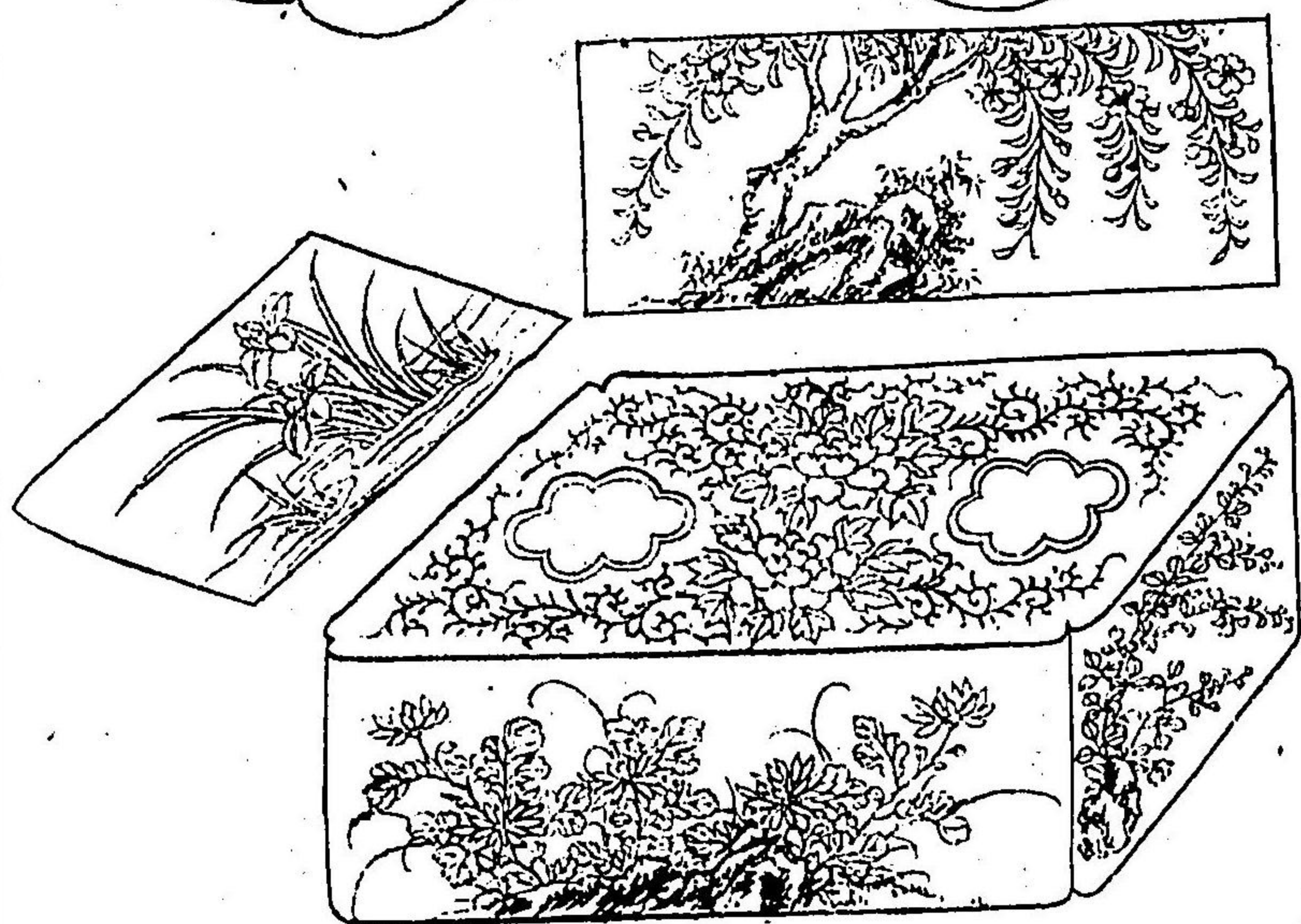
弘化三年製
吸物椀朱塗
沉金竹模様



弘化三年製
吸物椀朱塗
沉金蝶模様



其四





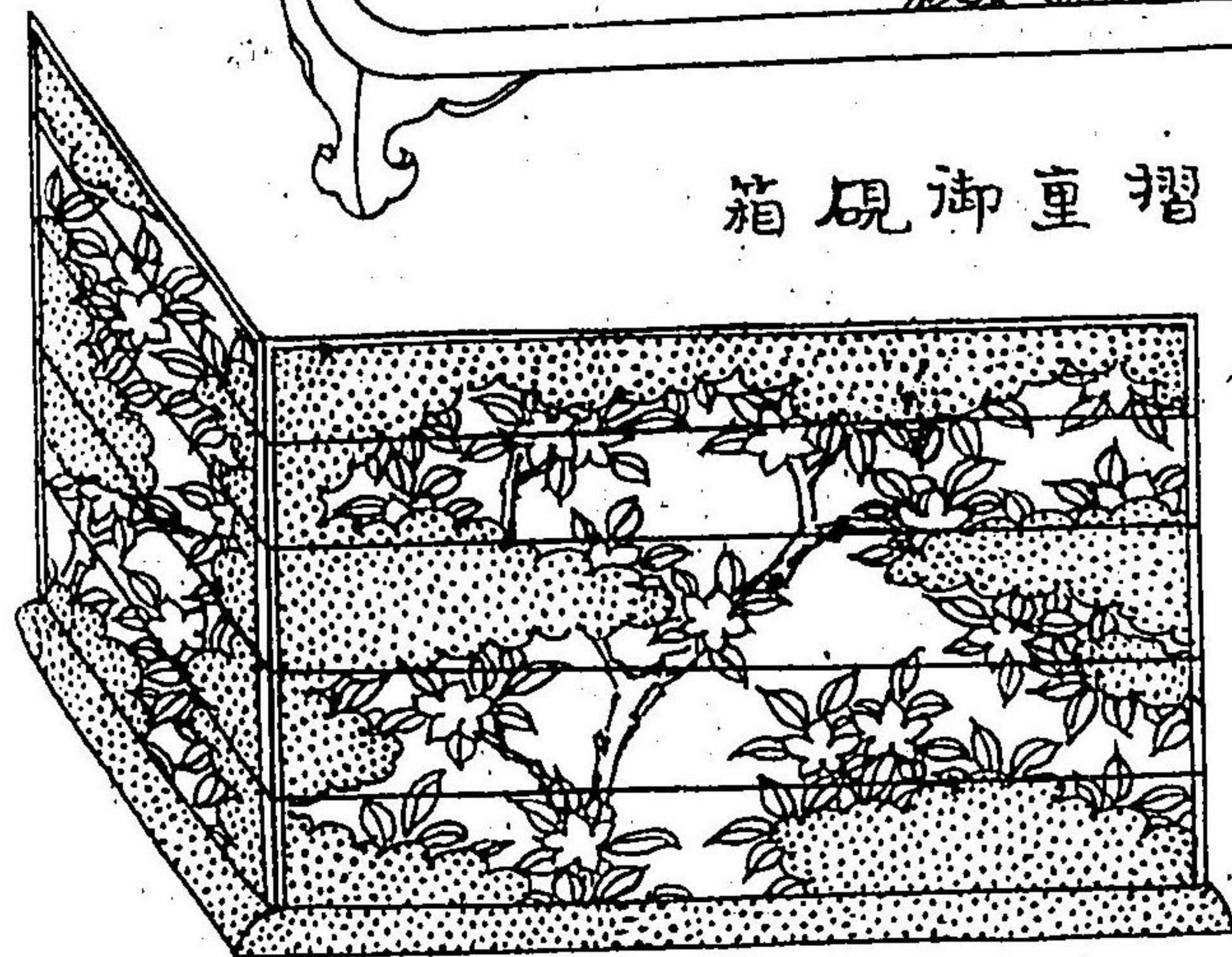
弘化四年製
堆朱大硯屏



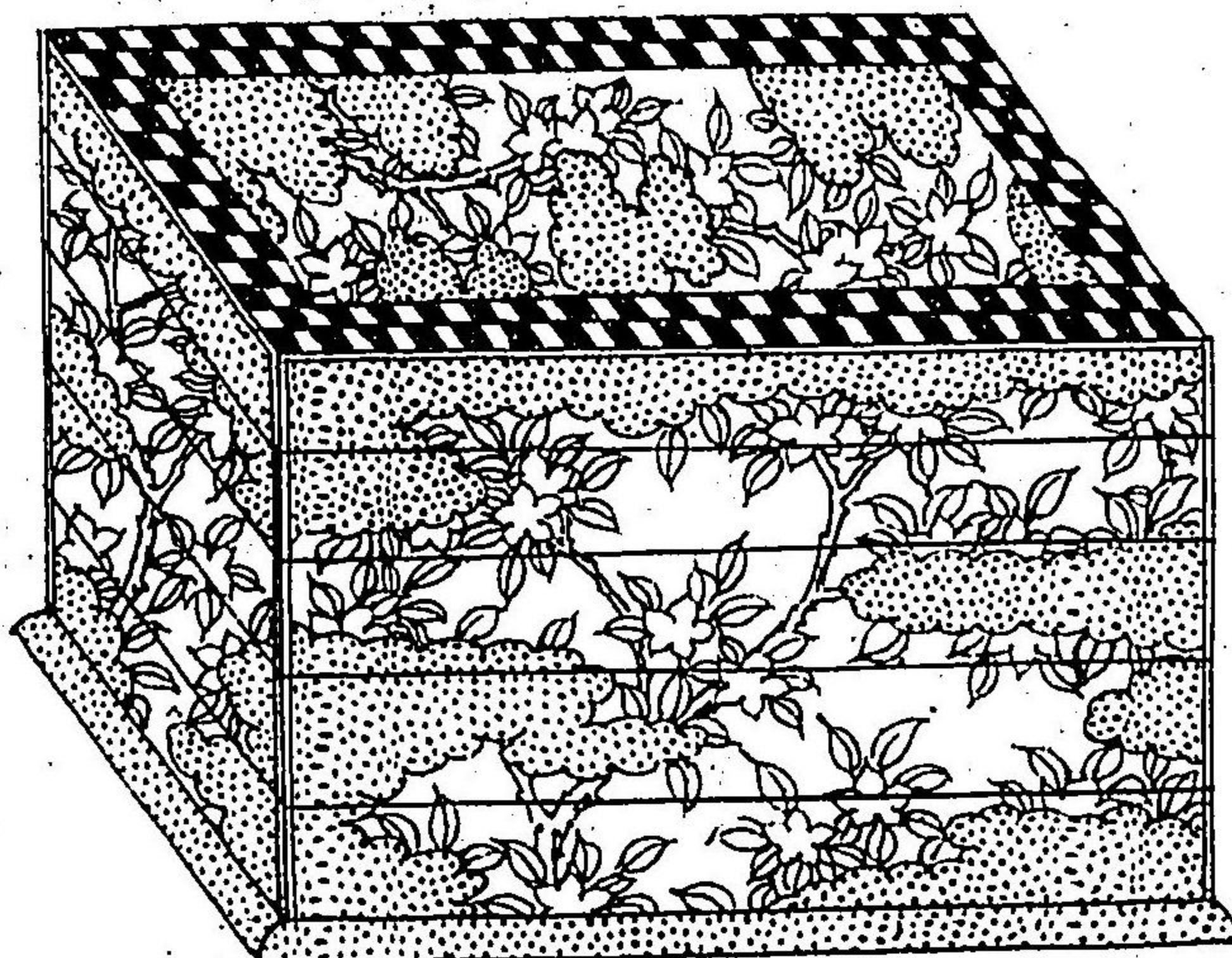
弘化三年製
吸物膳朱塗
沉金竹模様



箱硯御重摺具

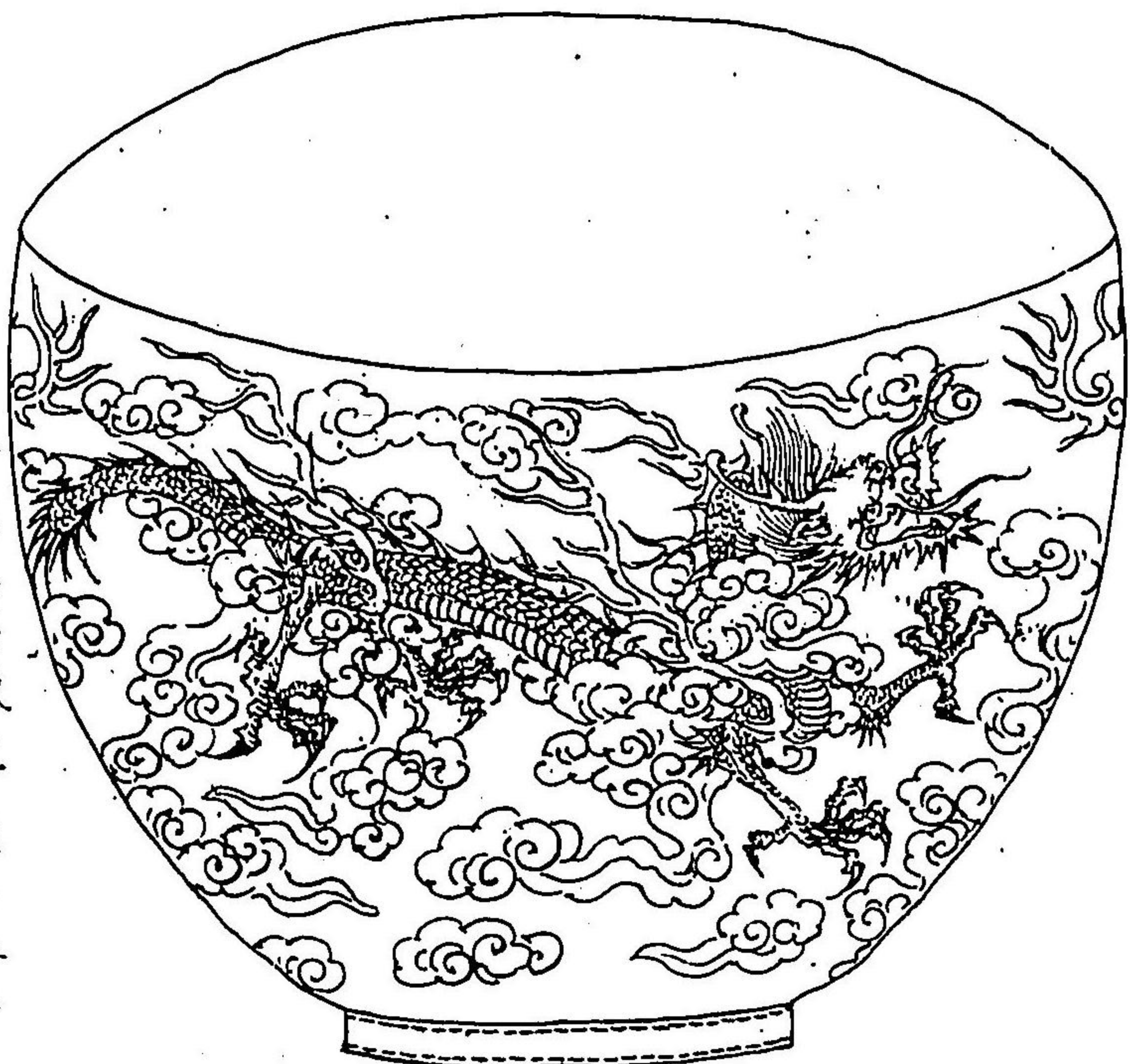
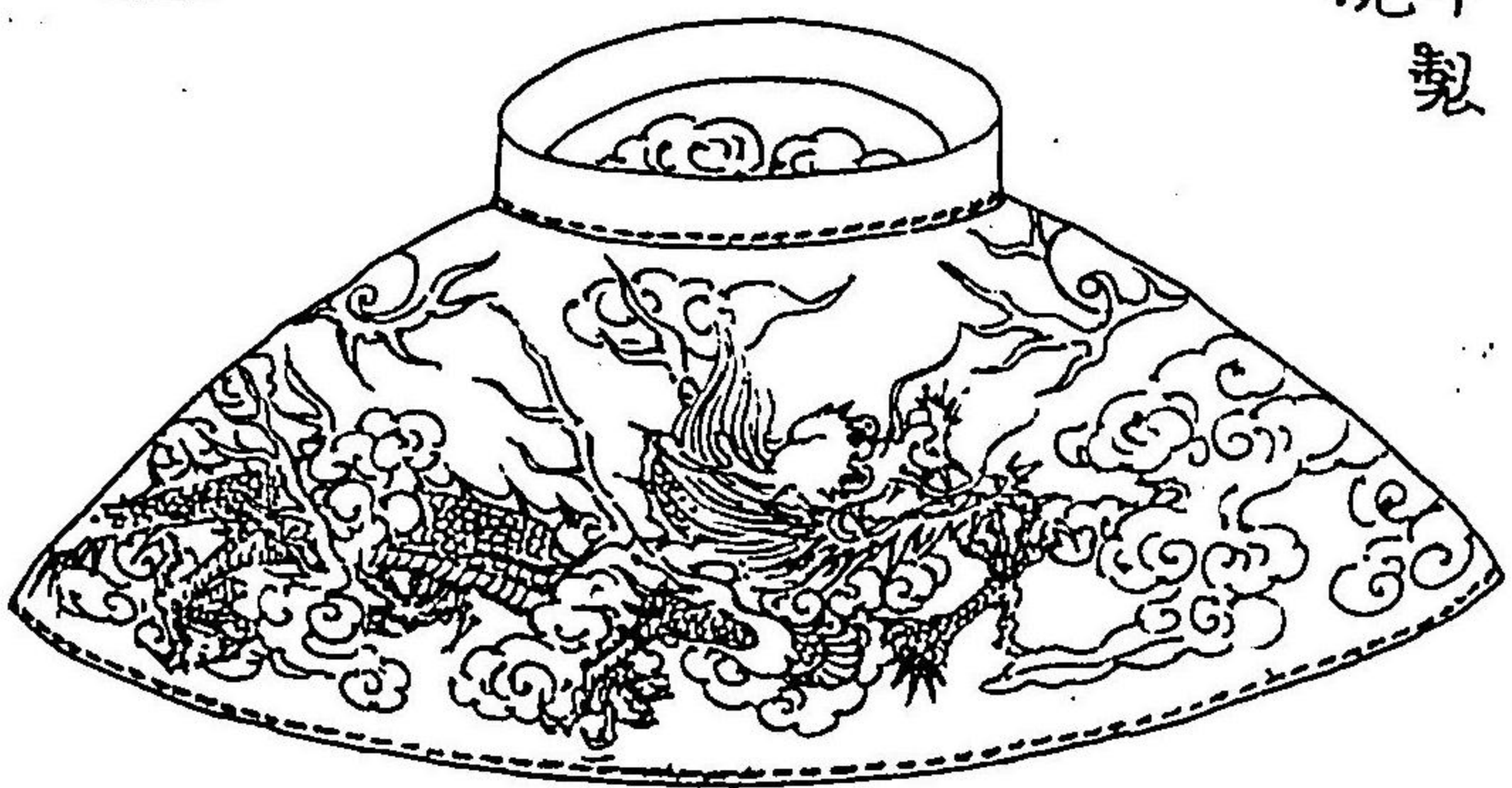


弘化三年製



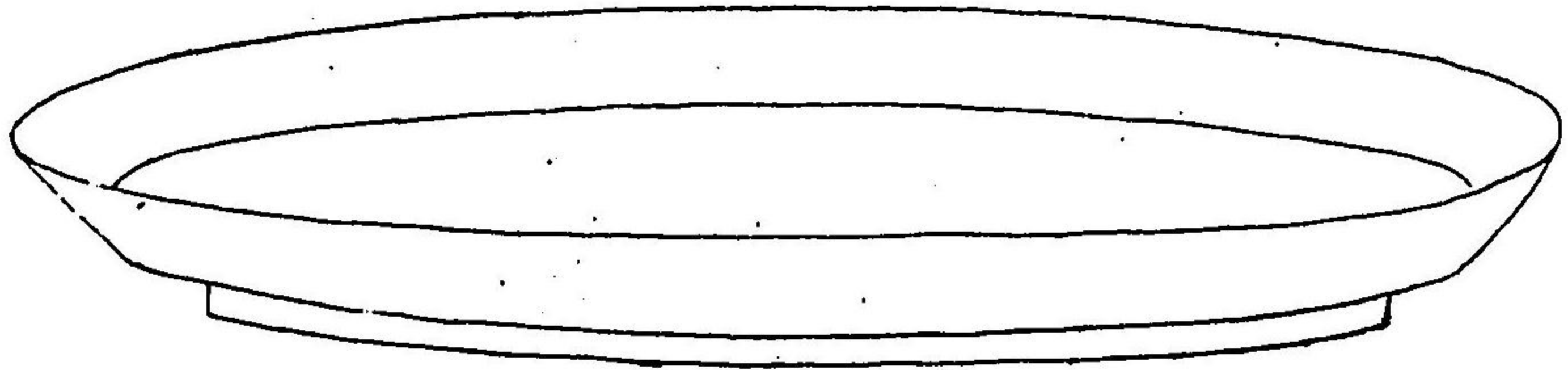
外真塗蠟色三青具并下司
板真塗蠟色三青具

嘉永元年製
木地茶碗



外厚真塗蠟色、具、五爪、雲龍繪
内厚金、薄、唐

嘉永元年製
茶盆



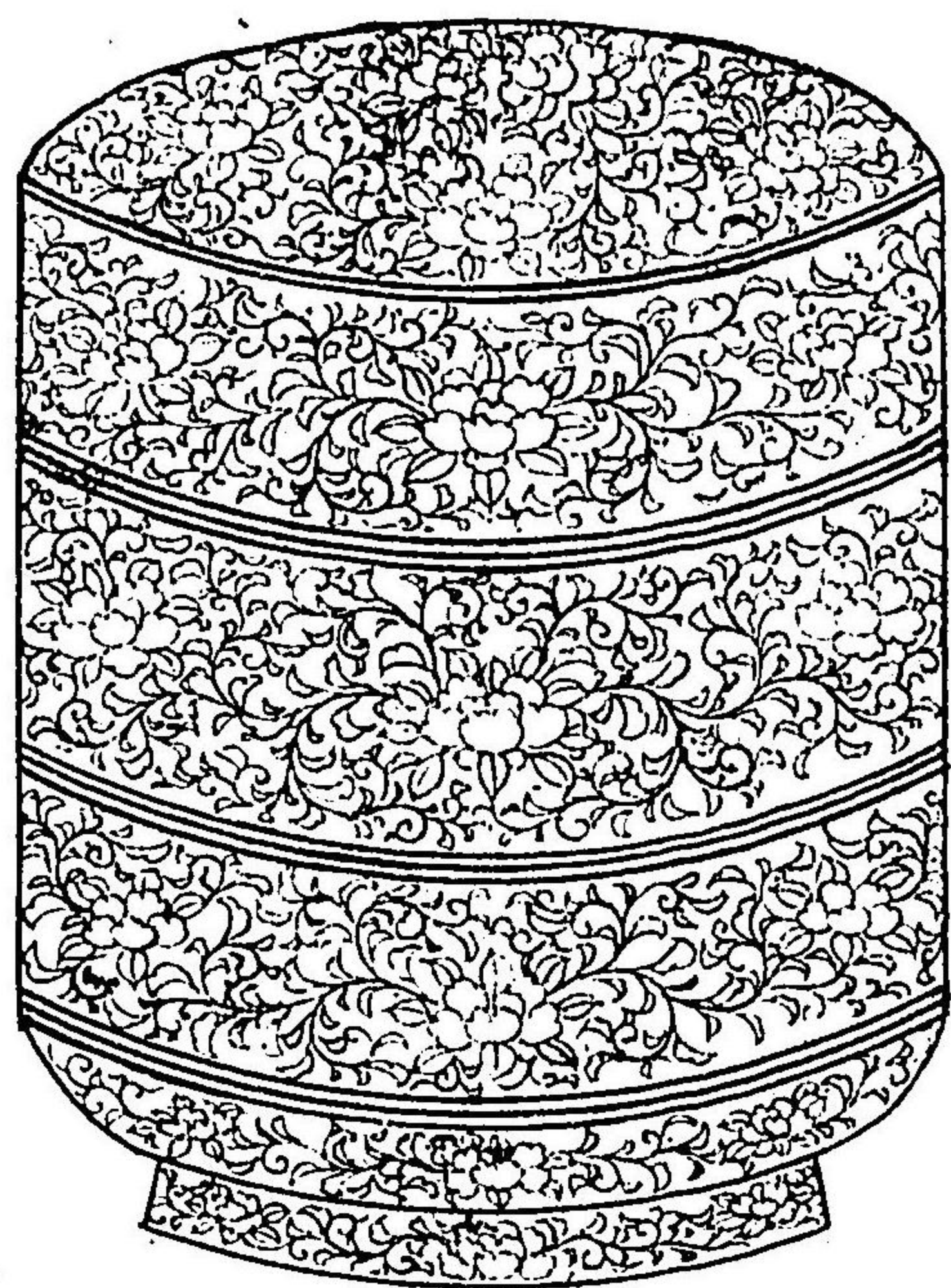
鏡真塗蠟色具、五爪、雲龍繪
内右全、三、龜甲、空、外真塗

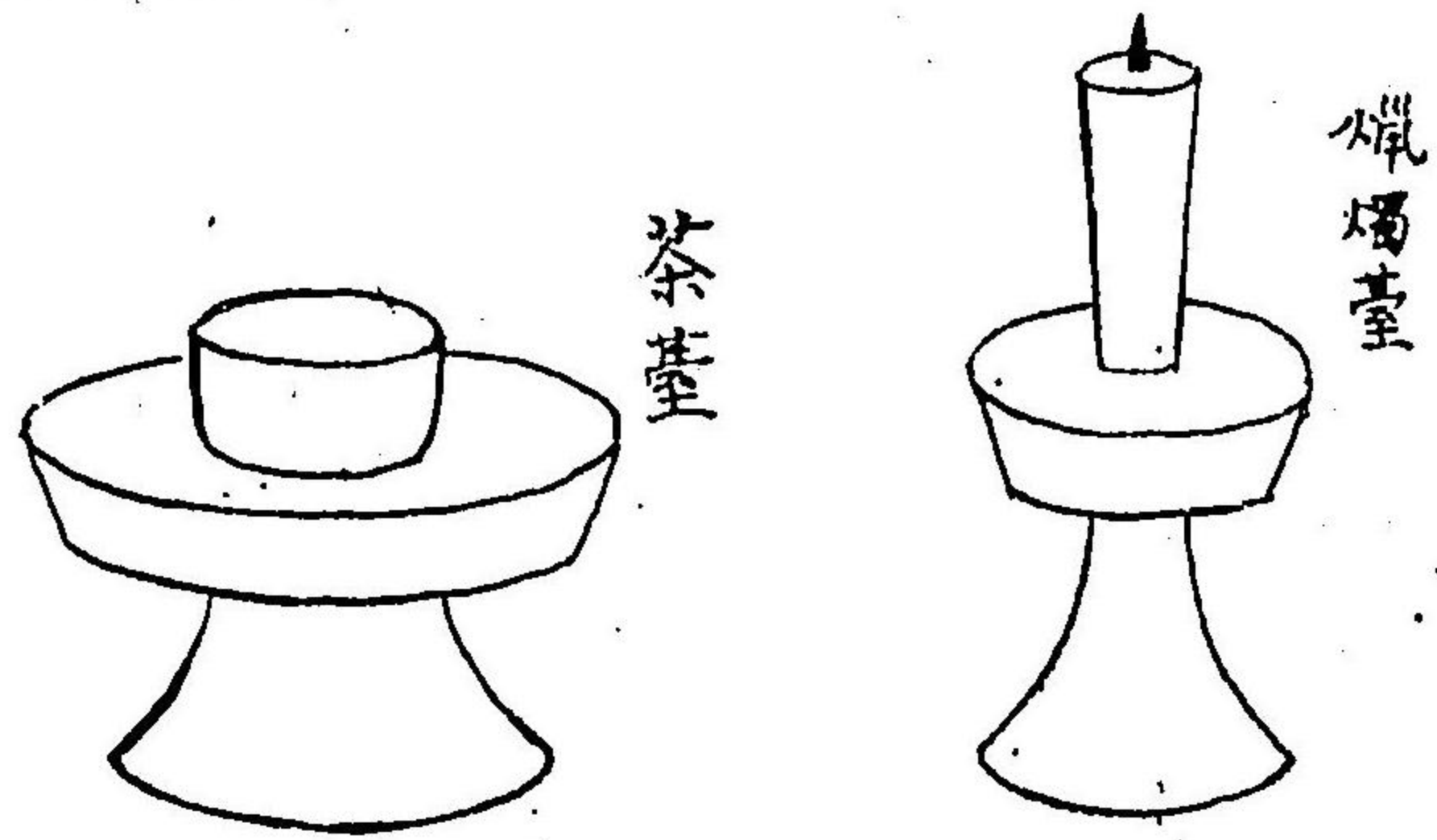
嘉永元年製
丸形東道盆

内裏掛子真塗外朱塗二堆錦



明治二年製
朱塗沈金食菴





茶臺

燭臺

文政八年製
白木製



茶入

香爐

香合

燭臺

天蓋之玉

珠教玉

坪皿

ちやん

合籠之玉

花入

茶臺取蓋

小平鉢

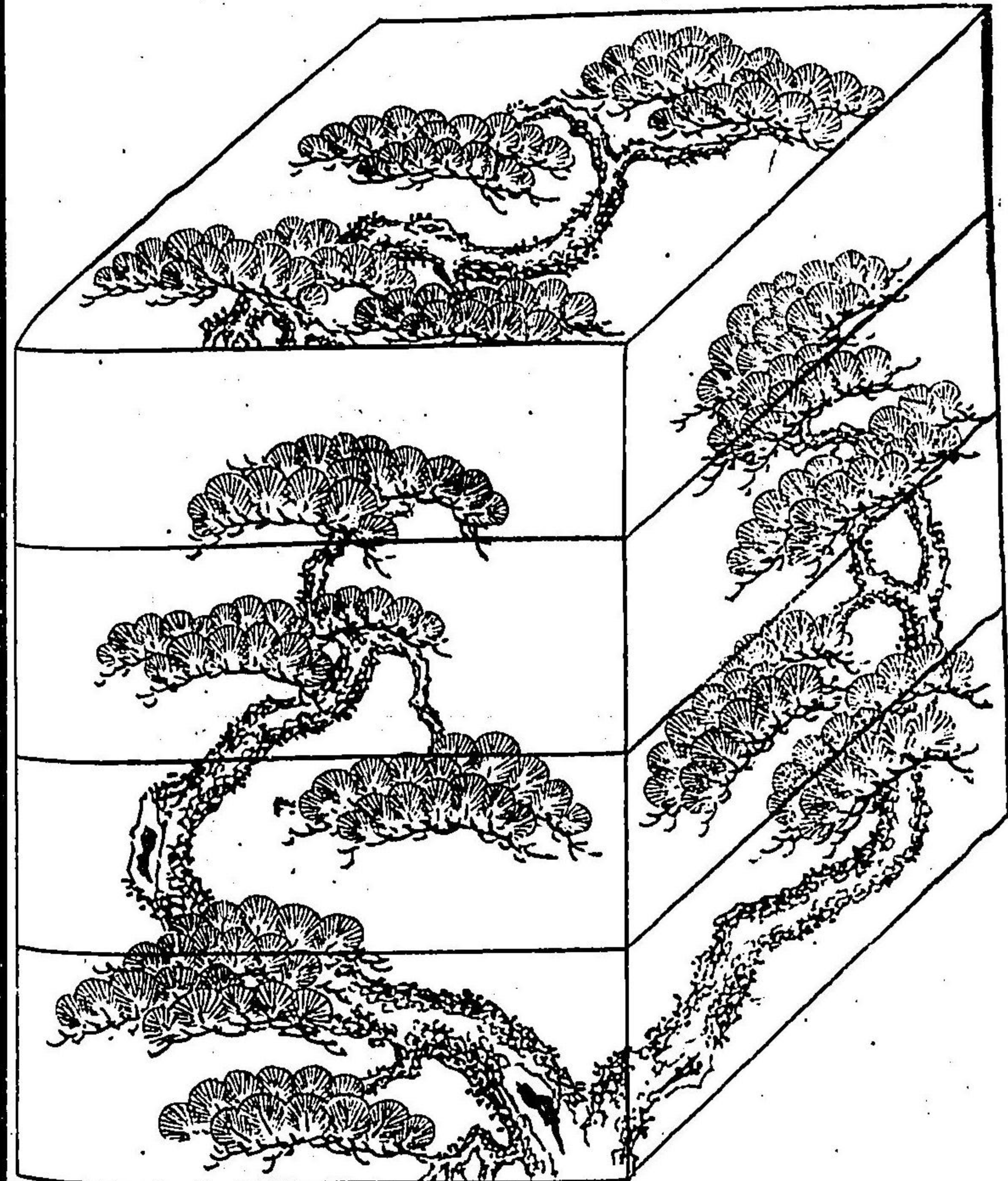
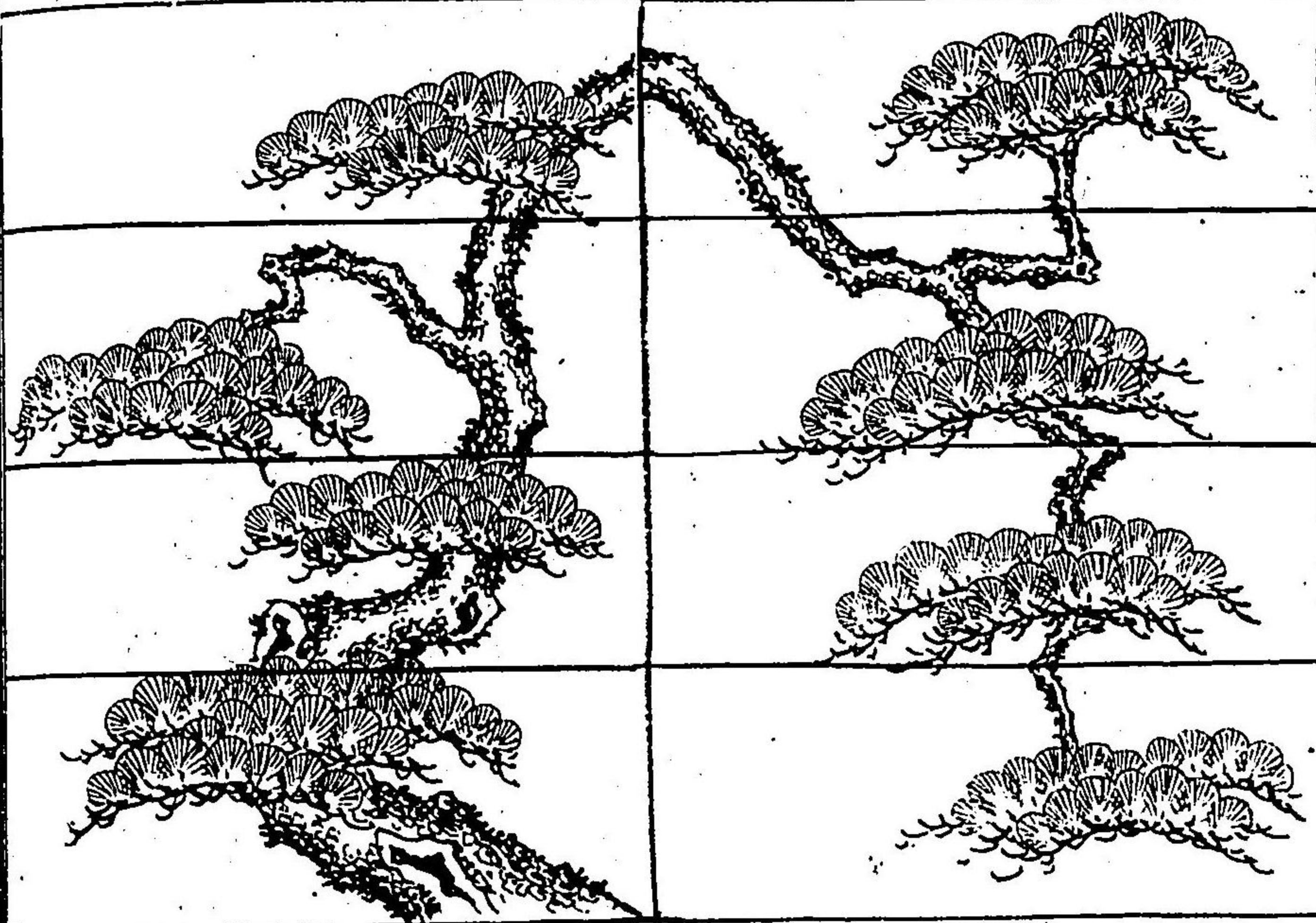
八之字

湯次

汁椀

二之椀

安政二年製
花梨木製



明治三年製
重塗蠟色重箱

附 言

圖畫は其製造の年次を逐ふ方順序あるか如しと雖とも圖畫及器物の模様によて配
置する方聊か見易しと認めたるか故に年次を逐はさりしなり由て覽者の便を謀り
更に年次を左に掲げ以て参考に供す
正徳、享保、元文、寛保、延享、寛延、寶曆、明和、安永、天明、寛政、享和、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政、
萬延、文久、元治、慶應、明治
正徳二年より明治廿二年に至る其間百七十八年となる

正 誤

漆器考四頁の裏十三行目法りたるの下にもを脱す

(定價金五十錢)

全 明治二十三年十一月一日印刷
年十一月十四日出版

著 者

東京府平民

石 澤 兵 吾

東京市下谷區金杉村
貳百七十六番地

全 平民

吾 妻 健 三 郎

東京市日本橋區葺屋
町六番地

發行 者 兼
印 刷 者

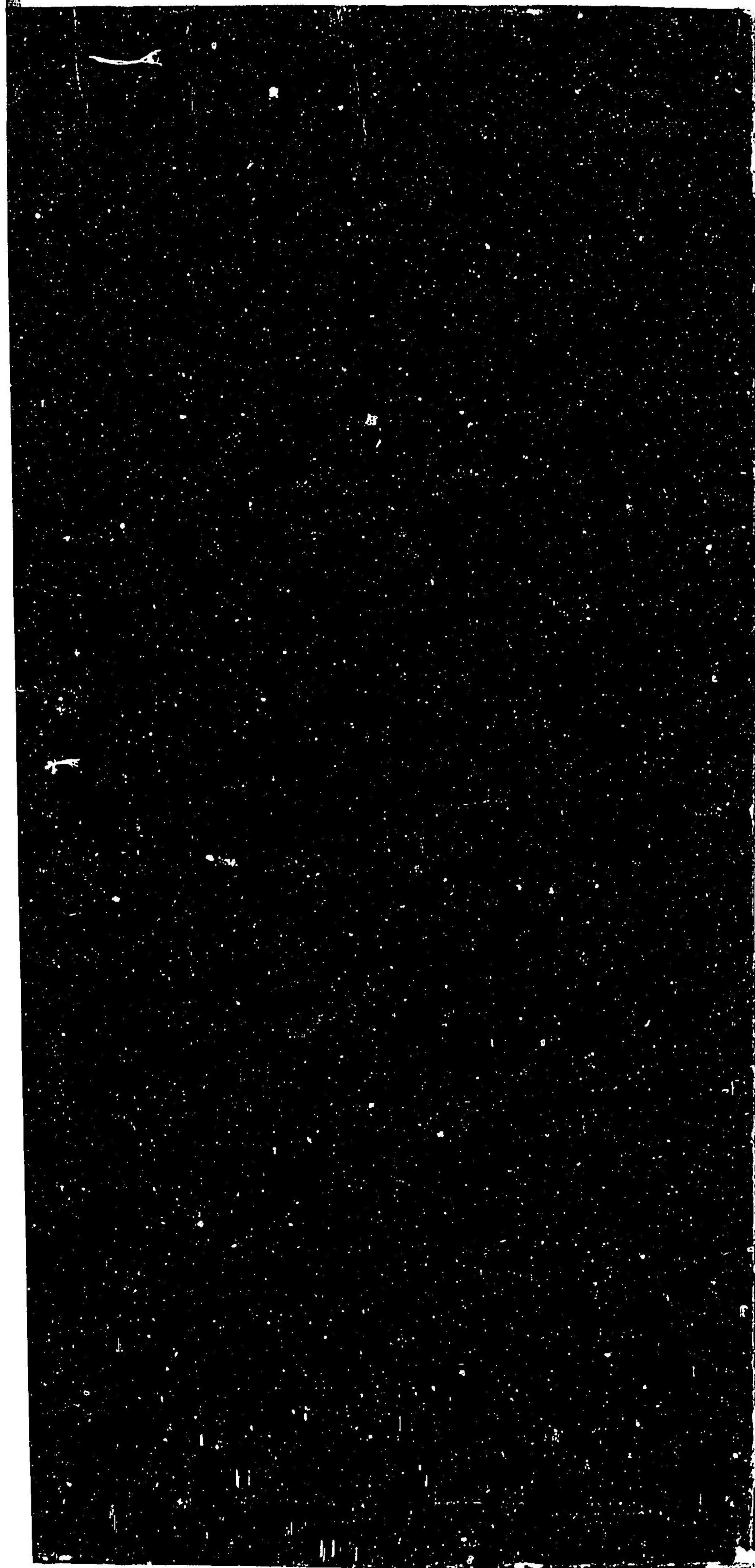
印 刷 所

東 陽 堂

東京市日本橋區葺屋
町六番地



9
71



9

71

琉球漆器考

072264-000-0

9-71

琉球漆器考

石沢 兵吾/著

M23

CEF-0171

